

鳥居龍蔵の第四回台湾調査関連資料「たかさごのたび 一」(上)

松永 友和・石井 伸夫・小林 篤正・野林 厚志・長谷川賢二
坂東 泰・宮岡真央子・植地 岳彦・大橋 俊雄・下田 順一

[Matsunaga Tomokazu, Ishii Nobuo, Kobayashi Atsumasa, Nobayashi Atsushi,
Hasegawa Kenji, Bando Yutaka, Miyaoka Maoko, Ueji Takehiko,
Ohashi Toshio, Shimoda Junichi

: Introduction and transcription of *Takasago no Tabi I*(Part 1), a field note written by
Torii Ryuzo on his fourth Taiwan Survey]

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告, 第6号, p. 1-54, 2026 別刷

Reprinted from

Bulletin of the Tokushima Prefectural Torii Ryuzo Memorial Museum, no. 6, p. 1-54, March 2026

【資料紹介】

鳥居龍蔵の第四回台湾調査関連資料「たかさごのたび一」(上)

松永 友和¹・石井 伸夫²・小林 篤正³・野林 厚志⁴・長谷川賢二¹
坂東 泰³・宮岡真央子⁵・植地 岳彦³・大橋 俊雄⁶・下田 順一³

はじめに

本稿は、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館(以下、「当館」と記す)が所蔵する資料「たかさごのたび一」を翻刻・紹介するものである。ただし、紙幅の関係により、資料全体をおよそ半分に分け、その前半部分を(上)として掲載することとする。

鳥居龍蔵(一八七〇〜一九五三)は、日清戦争(一八九四〜九五)の結果、日本の領土となった台湾で、一八九六(明治二九)年から一九一一年にかけて五回の調査を行った。それによって台湾の東部と南部を中心に踏査し、先住民(台湾では「原住民族」が正式名称)の諸集団を調査した¹⁾。この調査では、当時の学術研究、とりわけ野外調査をともなう分野において、まだ導入されていない写真記録をいち早く取り入れたことでも知られている²⁾。鳥居は、台湾の各地で多くの写真を撮影するとともに、詳細な調査記録(以下、「台湾フィールドノート」と記す)を残し、現在、当館では二四冊を確認している。

ところで、当館を含む徳島県文化の森総合公園文化施設では、二〇一九(令和元)年度から「徳島県文化の森デジタルアーカイブ構築事業」を実施した。当館では、「徳島県立鳥居龍蔵記念博物館デジタルアーカイブ」を開設し、台湾フィールドノートを公開した³⁾。その反響は大きく、当館は、宮岡真央子の仲介により、国立台湾史前文化博物館(以下、「史前館」と記す)と学術交流を開始した。いわば資料の公開が、両館を結びつける契機となったのである。二〇二二年九月には、史前館と連携協定を締結するまでに至り、以後、①学術調査を目的とした相互訪問、②研究成果の公表、③展覧会の開催と教育普及の推進を目的とした共同研究に取り組んでいる⁴⁾。

当館が、台湾フィールドノートの解読を本格的に始めたのは二〇二二年のことである。同年五月二七日には、第一回「台湾フィールドノート講読会」を開催し、その後、月一回のペースで実施している⁵⁾。講読会には、当館職員他に、野林厚志と宮岡真央子が参加している。なお、講読会で翻刻したデータについては、その後若干の修正を加えた上で定期的に史前館に送付し、さらなる調査研究の深化を図っている。

- 1 徳島県立博物館、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- 2 鳥居龍蔵を語る会
- 3 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- 4 国立民族学博物館
- 5 福岡大学
- 6 徳島県立博物館

表 台湾フィールドノート

	資料名	調査時期	寸法 (縦×横)
1	(台湾 1896 - 1)	第 1 回 (1896年 8 月 ~12月)	145mm × 100mm
2	(台湾 1896 - 2)		145mm × 100mm
3	(台湾 1896 - 3)		145mm × 100mm
4	(台湾 1896 - 4)		152mm × 195mm
5	(台湾 1896 - 5)		150mm × 192mm
6	(台湾 1896 - 6)		152mm × 95mm
7	(台湾 1896 - 7)		100mm × 165mm
8	(台湾 1897)	第 2 回 (1897年 10 月 ~1898年 1 月)	145mm × 100mm
9	(台湾 1897)		150mm × 100mm
10	(台湾 1897)		108mm × 80mm
11	(台湾 1898)	第 3 回 (1898年 10 月 ~12月)	105mm × 69mm
12	(台湾 1898)		152mm × 100mm
13	(台湾 1898-1899)		155mm × 100mm
14	たかさごのたび 一	第 4 回 (1900年 1 月 ~10月)	135mm × 95mm
15	たかさごのたび 二		135mm × 95mm
16	たかさごのたび 三		130mm × 95mm
17	たかさごのたび 四		135mm × 95mm
18	たかさごのたび 五		135mm × 100mm
19	たかさごのたび 六		128mm × 95mm
20	たかさごのたび 七		187mm × 118mm
21	たかさごのたび 八		188mm × 120mm
22	しやしんひかへ (台湾 1900)		125mm × 85mm
23	(台湾 1910)	第 5 回 (1910年 12 月 ~1911年 2 月)	165mm × 100mm
24	(台湾)	不明	128mm × 85mm

次に、本稿で紹介する「たかさごのたび 一」について述べることにしたい。「たかさごのたび 一」は、鳥居龍蔵の五回に及ぶ台湾調査のうち、第四回調査時のものである。

鳥居は第四回調査において、一九〇〇年一月から一〇月までの長期にわたり調査を行い、「たかさごのたび」と題する八冊の記録を残した。この調査で鳥居は、通訳として一八九五年に台湾に渡り、すでに山地の地理に精通していた森丑之助（一八七七〜一九二六）をとめない、基隆から澎湖諸島を訪れ、そして台湾南部から北上し、さらに新高山（現玉山）の登頂をも果たし

資料の概要

ている。その後、中部と東海岸に足を運び調査を実施している。当時、鳥居は三〇歳、森は二三歳であった（調査開始時点）。

さて、第四回調査の冒頭にあたる「たかさごのたび 一」は、一九〇〇年一月二日の「午後六時鳥居家を出で第二共同丸に乗ず」という記事から始まる。鳥居は、一八九〇年に二〇歳で修学のため単身で上京し、その二年後の一八九二年には家族も東京に移住している。すでに家族とともに、研究と生活の拠点を東京に移していたが、台湾への出発の起点となったのは徳島であった。鳥居は同日、坪井正五郎や自身の父親ら「諸氏へ郵書を発す」と記すが、それは東京にいる坪井や父親らに手紙を送ったことを意味している。

鳥居はその後、古川港（徳島市）から兵庫まで船で移動し、さらに、当時神戸と基隆の間を就航していた横浜丸に乗船する。横浜丸は一月三日に神戸港を出発し、四日に門司を経由して、七日の午前一〇時頃に基隆に到着する。筆まめな鳥居は、船中での出来事も記録しており、持ってきた本をすべて読み終え、退屈のぎに古新聞にまで目を通したことを書き留めている。

七日、台湾に上陸した鳥居は、偶然にも台湾総督府税関職員の高木隆次に会い、しばし談話している。その後、八日に鉄道を使って基隆から台北に移動し、台湾総督府を訪問する。台湾総督府では殖産課長で技師であった柳本道義（一八五七〜一九三七）や、同じく技師で後に植物学者として知られる田代安定（一八五七〜一九二八）、殖産課の嘱託で後に台湾人類学の先駆者として知られる伊能嘉矩（一八六七〜一九二五）らを訪ねている。その夜は田代の官舎に宿泊することとなり、鳥居は田代と伊能と互いに談話する。伊能が帰宅した後も、田代と夜更けまで話を続け、調査に関する多くの情報を得ていることがわかる。

その後、一〇日に以後の調査で同行することとなる張君楚と会い、一日に台北から基隆に移動する。さらに一二日には森丑之助と合流し、一三日から基隆の全景写真を撮影したり、石器が拾得された場所を訪れたりするなど、徐々に調査を開始する。

一五日、基隆で明石丸に乗船し、澎湖諸島の馬公城に到着したのは一六日の昼一二時頃である。鳥居は、昼食をとるために入った洋食店で「神様の神符」を購入する。フィールドノートには、「余は支那人の舗にて神様の神符を買ふ。一組二十四枚にて代価は僅かに八厘なり。神符は支那人の信ずる神様なり」とある。様々な事柄に興味関心を抱いていた鳥居の様子がうかがえる。

一七日午前一時に澎湖諸島を出発し、同日午前七時に安平港(台南市)に到着する。鳥居は、森と張の三人で台南に行き、県庁では技師の藤根農字士(藤根吉春⁽¹⁾)を訪れ、「旅行の打合せ」を行っている。翌一八日には再び安平港に戻り、打狗(現高雄)行きの汽船に乗船する。その後、打狗弁務支署や東港弁務支署、蕃薯寮弁務支署を訪問し、あらかじめ田代から情報を得ていた諸氏に会っている。二一日には水底寮(現屏東県枋寮郷の一地域)で通事の黄漢生のもとを訪問する。鳥居は、黄漢生から調査目的地の「リキリキ社」(現力里旧社⁽²⁾)に関する情報をあらかじめ得ていたのである。

二二日、鳥居と森丑之助、黄漢生、張君楚、苦力の計五人は、「リキリキ社」に向け登山を始める。途中の先住民族の集落では、写真撮影や身体計測を行っている。調査目的地である「リキリキ社」に到着したのは二三日である。鳥居らは頭人(頭目)の家を訪れ、落花生や芋、粟酒を振る舞われるなど、歓待を受ける。鳥居は、「頭人は未だ三十前後の男にて極めて親切なる人なり」と記すとともに、粟酒の飲み方なども観察し、事細かに記録している。鳥居にとつて、目に映るものすべてが調査対象であったのである。その後鳥居は、子どもが弓矢を射る様子や入墨の風習などについて、文字だけではなく写真やスケッチなどを併用しながら、当時の状況を記録している⁽³⁾。

おわりに

以上、鳥居龍蔵の第四回台湾調査(一九〇〇年一月から一〇月)に関連した資料「たかさごのたび一」のうち、およそ半分(具体的には一九〇〇年

一月二日から同月二三日までの記事)について紹介した。残りの一月後半にあたる(下)については、本誌次号で紹介することにした。

ところで、当館では第一回台湾調査のフィールドノートから翻刻を開始する計画もあったが、史前館による調査活動とタイアップすることを重視した結果、台湾南部に関連する第三回調査のフィールドノートから翻刻することにした。二〇二二年に第三回調査のフィールドノート三冊を翻刻し、二〇二三年には第四回調査のフィールドノート「たかさごのたび一」を、二〇二四年に第二回調査のフィールドノート三冊を翻刻した。二〇二五年からは再び第四回調査のフィールドノートに戻り、継続して解読作業を行っているところである。今後、すでに翻刻を終えた資料についても、順次、資料紹介を掲載する予定である。

なお、「たかさごのたび一」の翻刻作業は、石井、小林、野林、長谷川、松永が分担して行った。全体の語句の統一や文字の校正、及び解題の執筆は主に松永が担当し、その他の著者が補足した。

注

- (1) 鳥居龍蔵は台湾での調査をもとに、「東部台湾に於ける各蕃族及び其分布」(『東京人類学会雑誌』一三六、一八九七年)など、数多くの論考を発表している。鳥居自身が執筆した論考の多くは、『鳥居龍蔵全集』第五巻及び第一巻(朝日新聞社、一九七六年)に収録されている。また、鳥居が台湾調査について回顧したものに、『ある老学徒の手記』(朝日新聞社、一九五三年、岩波文庫版は二〇一三年)がある。鳥居の台湾調査の概要を論じたものに、松澤員子「鳥居龍蔵の台湾調査」(国立民族学博物館編『民族学の先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア』、一九九三年)、末成道男「鳥居龍蔵の研究」(日本順益台湾研究民研究会編『台湾原住民研究概覧 日本からの視点』風響社、二〇〇一年)、野林厚志「鳥居龍蔵の台湾・西南中国調査」(『史窓』三四、徳島地方史研究会、二〇〇四年)、山路勝彦『近代日本の海外学術調査』(山川出版社、二〇〇六年)などがある。なお、台湾をテーマとした当館主催の企画展の図録として、『鳥居龍蔵の見た台湾』(二〇一二年)、『台湾世界を行く 鳥居龍蔵の見た海・山・ひと・ムラ』(二〇二四年)がある。
- (2) 鳥居龍蔵写真資料研究会編『東京大学総合研究資料館所蔵 鳥居龍蔵博士撮影写真資料カタログ 第一部解説・第二部写真台湾一・第三部写真台湾二』(東京大学総合研究資料館、一九九〇年)参照。鳥居が撮影した写真に関する著書・論文に、清水純『画像が語る台湾原住民の歴史と文化 鳥居龍蔵・浅井恵倫撮影写真の探究』(風響社、二〇一四年)、野林厚志「鳥居龍蔵の乾板写真術」(『精神のエクスペディション』東京大学、一九九七年)、范如苑「鳥居龍蔵の記録した台湾―民俗学における初期乾板写真の重要性を中心に―」(鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵研究』一、二〇一一年)などがある。
- (3) 館蔵資料の公開を含め、当館所蔵資料の状況について言及したものに、
- (長谷川賢二「鳥居龍蔵研究の課題と方向性―徳島県立鳥居龍蔵記念博物館一〇年の歩みを中心に―」(鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵研究』五、二〇二二年)がある。
- (4) 共同研究の成果の一部に、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編『令和四年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業 国際シンポジウム「鳥居龍蔵と台湾資料の可能性を探る」講演要旨集』(鳥居龍蔵がつなぐ台湾と徳島の文化交流事業実行委員会、二〇二三年)がある。
- (5) 台湾フィールドノート講演会の概要については、『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館年報 第一三三号』(二〇二三年)「調査研究事業」に掲載した。以後、開催日と担当者を年報に掲載している。
- (6) 近年、鳥居による台湾調査に関する研究は進展し、例えば以下の論考がある。石尾和仁「鳥居龍蔵の第五回台湾調査をめぐって」(『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』一、二〇一三年)、宮岡真央子「学術探検の開拓と展開―鳥居龍蔵と森丑之助の台湾調査をめぐって―」(鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵研究』二、二〇一三年)、石尾和仁「鳥居龍蔵の台湾調査に関する諸資料」、宮岡真央子「台湾調査―第一回、第二回を中心に―」(ともに徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』思文閣出版、二〇二〇年所収)、宮岡真央子「鳥居龍蔵の台湾研究―残された資料の今日的意義―」(徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編『鳥居龍蔵生誕一五〇周年記念 国際シンポジウム「鳥居龍蔵と現代社会」講演要旨集』(徳島県、二〇二一年)、宮岡真央子「鳥居龍蔵の第五回台湾調査」(『台湾原住民研究』二五、二〇二一年)、石井伸夫「鳥居龍蔵による台湾調査関連資料の概要について」、宮岡真央子「鳥居龍蔵と台湾―同志たちとの協働を中心に―」、野林厚志「日本の初期人類学と鳥居龍蔵―起源探求の方法論への関心―」(いずれも前掲注(4))『国際シンポジウム「鳥居龍蔵と台湾 資料の可能性を探る」講演要旨集』所収)、宮岡真央子「鳥居龍蔵の台湾調査フィールドノート 一九〇〇年阿

里山行を中心とした予備的考察」(『台湾原住民研究』二七、二〇二三年)、清水純「鳥居龍蔵の第一回台湾調査ルート」、宮岡真央子「鳥居龍蔵の台湾調査協力者、高木隆次 デジタルアーカイブを活用した研究の一例」ともに『台湾原住民研究』二八、二〇二四年、所収。

(7) 「たかさごのたび」の他に調査の動向を伝えるものとして、「鳥居氏台湾通信」(『東京人類学会雑誌』一六七、一九〇〇年) などがある。「鳥居氏台湾通信」には、「鳥居龍氏^(マヌ)より坪井理科大学教授の許に達したる通信中の要点を摘記すれば左の如し」とあり、調査中の鳥居が坪井に送った書簡などが、その情報源であることがわかる。

(8) 森丑之助については、楊南郡著「笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子編 訳『幻の人類学者 森丑之助 台湾原住民の研究に捧げた生涯』(風響社、二〇〇五年)、笠原政治『台湾原住民民族研究の足跡 近代日本人類学史の一側面』(風響社、二〇二二年) 参照。

(9) 前掲注(6) 宮岡「鳥居龍蔵の台湾調査協力者、高木隆次」参照。

(10) 田代安定と伊能嘉矩については、柳本通彦『明治の冒険科学者たち 新天地・台湾にかけた夢』(新潮社、二〇〇五年)、『伊能嘉矩と台湾研究―台湾人類学の先駆者―』(遠野市立博物館、二〇一七年)、前掲注(8) 笠原『台湾原住民民族研究の足跡』参照。

(11) 藤根については、中央研究院台湾史研究所が開設しているウェブサイトに「台湾総督府職員録系統」<https://who.ih.sinica.edu.tw/> によって確認した(最終閲覧二〇二五年二月二〇日)。

(12) 力里旧社は、台湾屏東県春日郷の山間部に位置しており、車で山道を三時間ほど進んだ場所に位置している。力里旧社の人びとは、一九六〇～七〇年代に山の麓に移住したため、現在この場所に人は居住していない(旧社)は「旧村」の意)。

(13) 著者のうち石井・小林・野林・長谷川・松永は、史前館の協力を得て、二〇二三年二月七～一二日にかけて鳥居の足跡をたどる現地調査を実施

した。力里旧社には二月一〇日に訪問し、旧社の現状を見ずるとともに当時の生活の様子を聞くことができた。その際、あらためて鳥居が記した台湾フィールドノートの情報の豊富さや資料的価値の高さを実感するとともに、現地を訪問することの重要性を認識した次第である。

(付記)

本研究は、科学研究費助成事業による基盤研究(A)「民族誌アーカイブズとフィールド調査の接合による植民地初期台湾の先住民社会の探究」(研究代表者・野林厚志)(JSPS科研費22H00040)の成果の一部である。



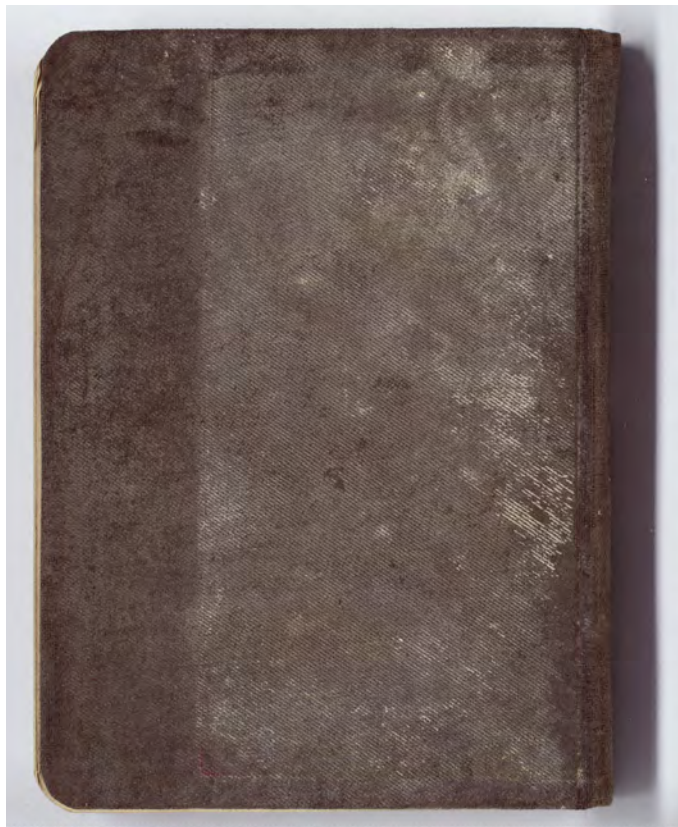
力里旧社で解説をうけている様子 (2023年2月10日撮影)

凡例

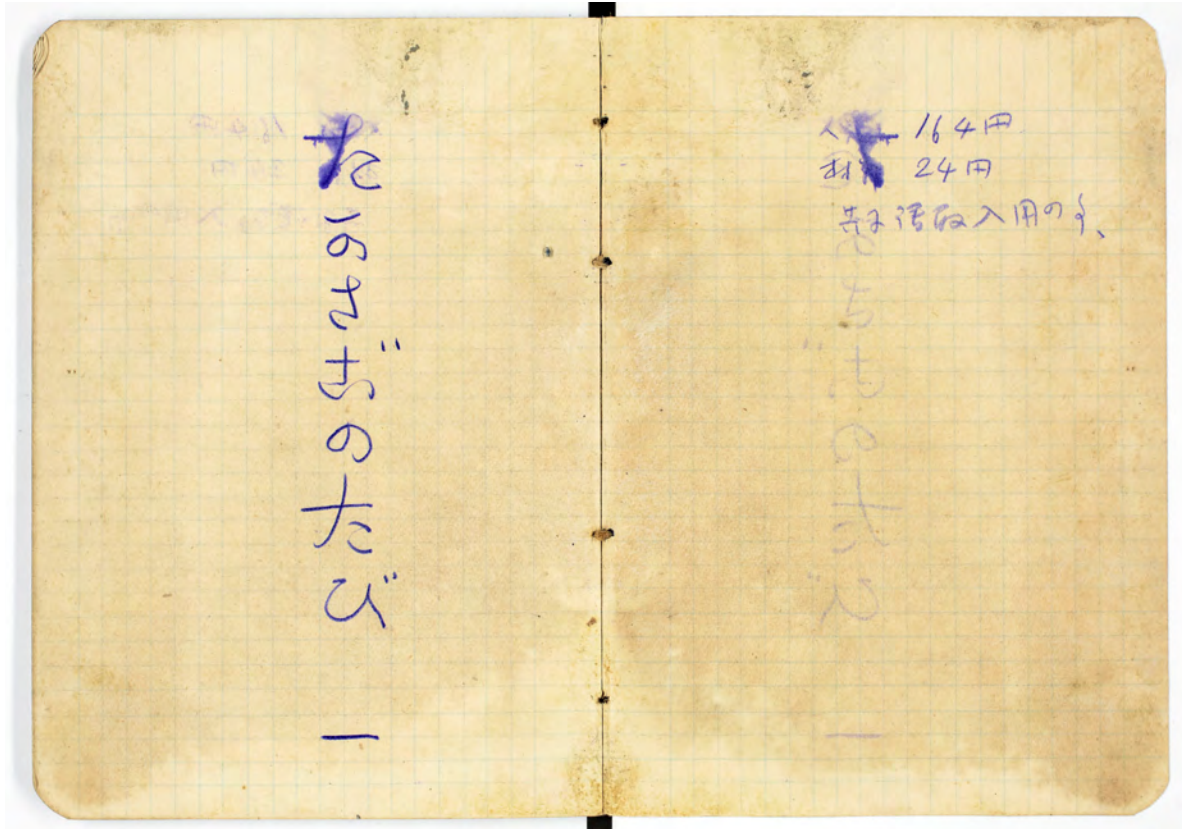
- 1 本稿は、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館が所蔵する資料「たかさごのたびー」のうち、およそ半分を翻刻したものである。
- 2 資料翻刻にあたり、上部に資料の図版を、下部に翻刻を掲載した。図版の右上の番号は、インターネットで公開している「徳島県立鳥居龍蔵記念博物館デジタルアーカイブ」の「たかさごのたびー」(https://adacac.jp/tokushima-bunkanomoriviewer/mp000210-200060/TMM_021/)の画像番号と対応している。なお、白紙(書き込みのないページ)は省略した。
- 3 翻刻にあたって、改行をはじめとする体裁については、原本の形を尊重するようにつとめた。ただし、上部の書込みなどは追込みとし、改行「 \lfloor 」を付した。
- 4 用字については、旧字は新字に、異体字・古体字・略字は正字または現在通用の字体に改めた。ただし、人名や地名など一部は原文のままとした。
- 5 編者の判断により、必要に応じて読点「、」および並列点「・」をつけた。また、変体仮名は平仮名に改めた。
- 6 抹消された文字で判読できる場合や訂正・重ね書きは、語句に二重線を付し、その下に訂正後の文字を記した。判読できない場合は省略した。
- 7 原本中の行間の補記については、原則として本文に挿入した。
- 8 編集者による校訂は()に入れ、傍注とした。誤記や意味不明などの場合には正字を傍注とするか、(ママ)を付した。疑念が残る場合には(カ)と注記した。
- 9 判読不能箇所については□とした。
- 10 資料には、現在の人権意識からみて差別的な表記がみられるが、当該期の歴史を科学的に研究し、その理解に供するため、そのまま掲載した。

資料翻刻

1 表紙

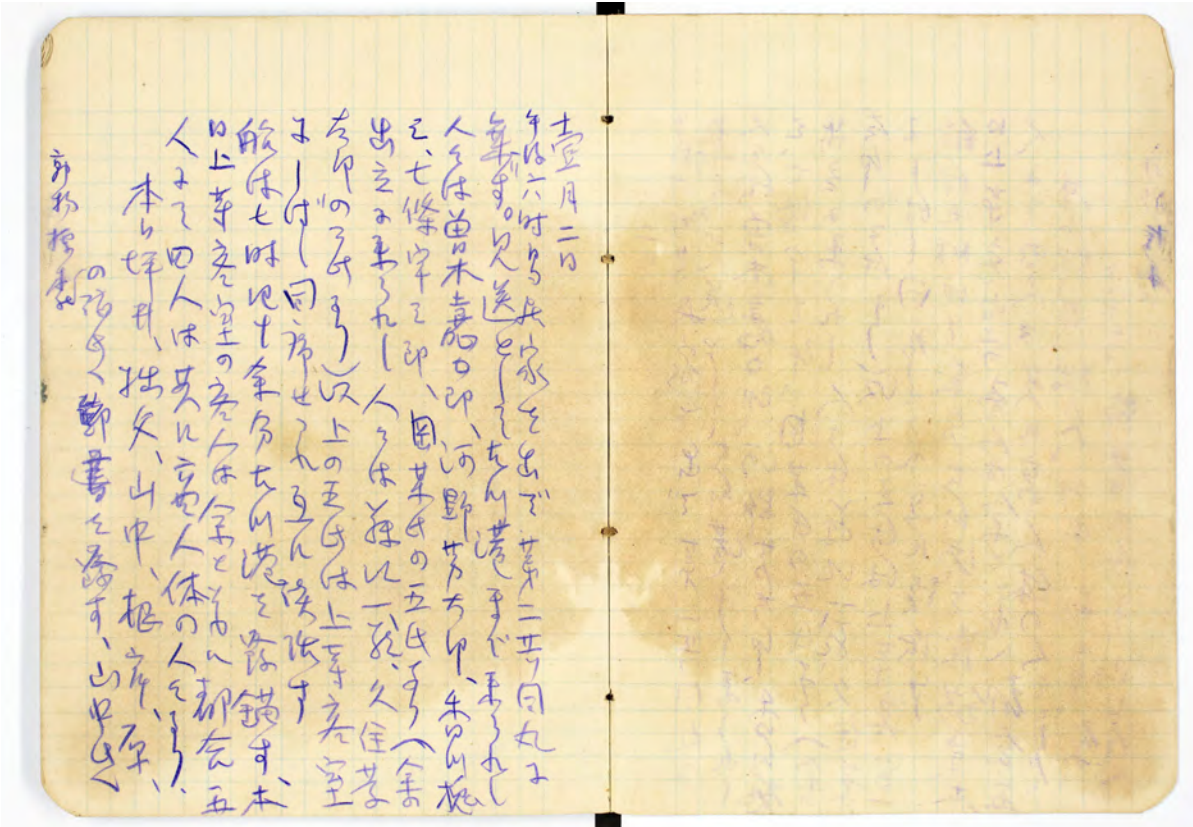


2 白紙
3 白紙



たかさごのたび
—

人口 164円
材料^(カ) 24円
共に請取入用の事、



十月二日
 午後六時鳥居家を出で第二共同丸に
 乗ず。見送として古川港まで来られし
 人々は曾木嘉五郎、河野芳太郎、香川槐
 三、七條宇三郎、岡某氏の五氏なり（余の
 出立に來られし人々は藤江一蔵、久住慶
 太郎の二氏なり）以上の五氏は上等客室
 にしばし同席せられ互に談話す
 船は七時四十分古川港を發錨す、本
 日上等客室の客人は余とともに都合五
 人にて、四人は共に商人体の人々なり、
 本日坪井、拙父、山中、根岸、原、
 動物標本社の諸氏へ郵迷書を發す、山中氏へ

十月二日

午後六時鳥居家を出で第二共同丸に

乗ず。見送として古川港まで来られし

人々は曾木嘉五郎、河野芳太郎、香川槐

三、七條宇三郎、岡某氏の五氏なり（余の

出立に來られし人々は藤江一蔵、久住慶

太郎の二氏なり）以上の五氏は上等客室

にしばし同席せられ互に談話す

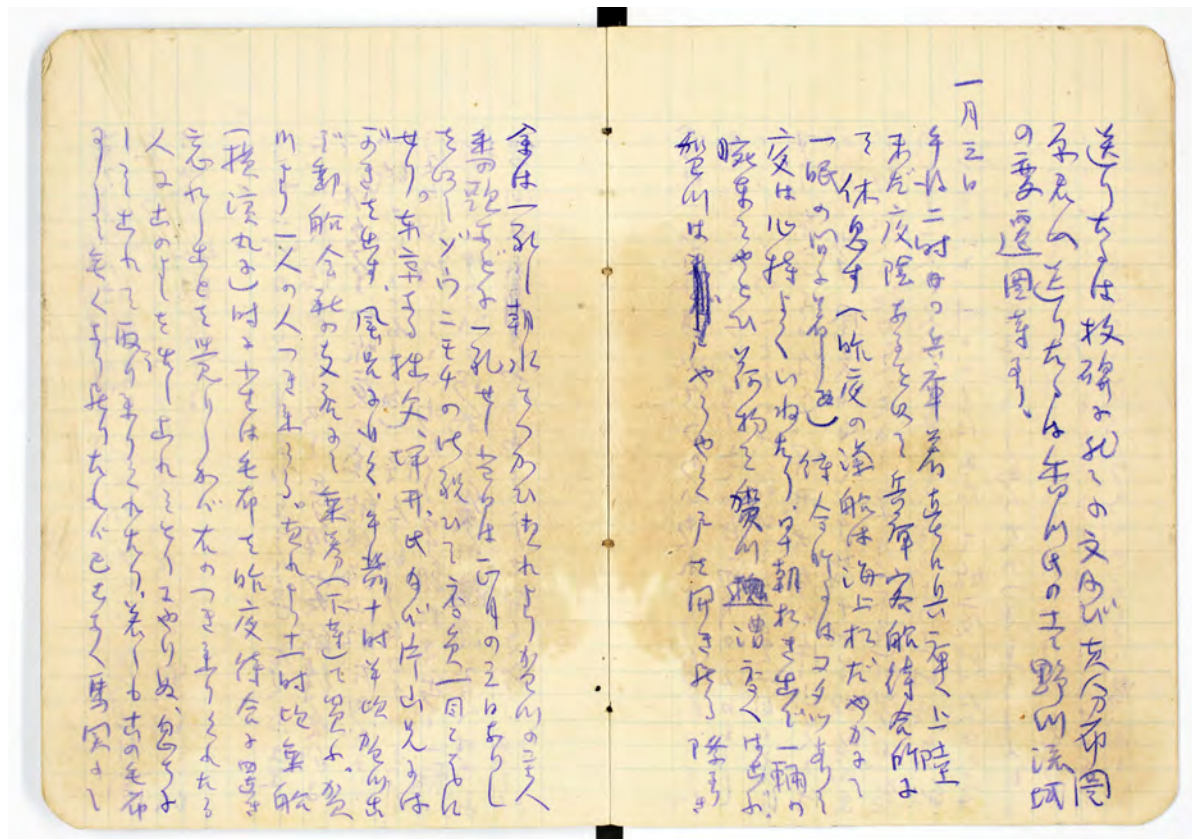
船は七時四十分古川港を發錨す、本

日上等客室の客人は余とともに都合五

人にて、四人は共に商人体の人々なり、

本日坪井、拙父、山中、根岸、原、

動物標本社の諸氏へ郵迷書を發す、山中氏へ



送りたるは板碑に就ての文及び其分布図
 原君へ送りたるは香川氏の吉野川流域
 の変遷図等なり、

一月三日

午後二時〇〇兵庫着、直ちに兵庫へ上陸
 未だ夜陰なるを以て兵庫客船待合所に
 て休息す（昨夜の汽船は海上おだやかにて
 一眠の間に着しぬ）待合所にはコタツありて
 夜は心持よくいねたり、早朝おき出で一輛の
 腕車をやとひ荷物を番賀川廻漕店へはこぶ。
 賀川は兼井戸やく戸を開き居る際なりき

余は一礼し朝水をつかひ其れより賀川の主人
 番頭などに一礼せし、当日は正月の三日なりし
 を以て、ゾウニモチの御祝ひを店員一同とともに
 せり。東京なる拙父、坪井氏及び片山兄には
 がきを出す、風呂に行く。午前十時半頃賀川出
 で郵船会社の支店にて乗券（下等）を買ふ。賀
 川より一人のつぎ来らる。其れより十一時頃乗船
 （横濱丸に）時に小生は毛布を昨夜待合に置き
 忘れしことを覚りしかバ、右のつき来りくれたる
 人にこのよしを話しこれをとりによりぬ、忽ちに
 してこれを取り来りくれたり。若しもこの毛布
 して無くなり居りたれば已むなく馬関にて

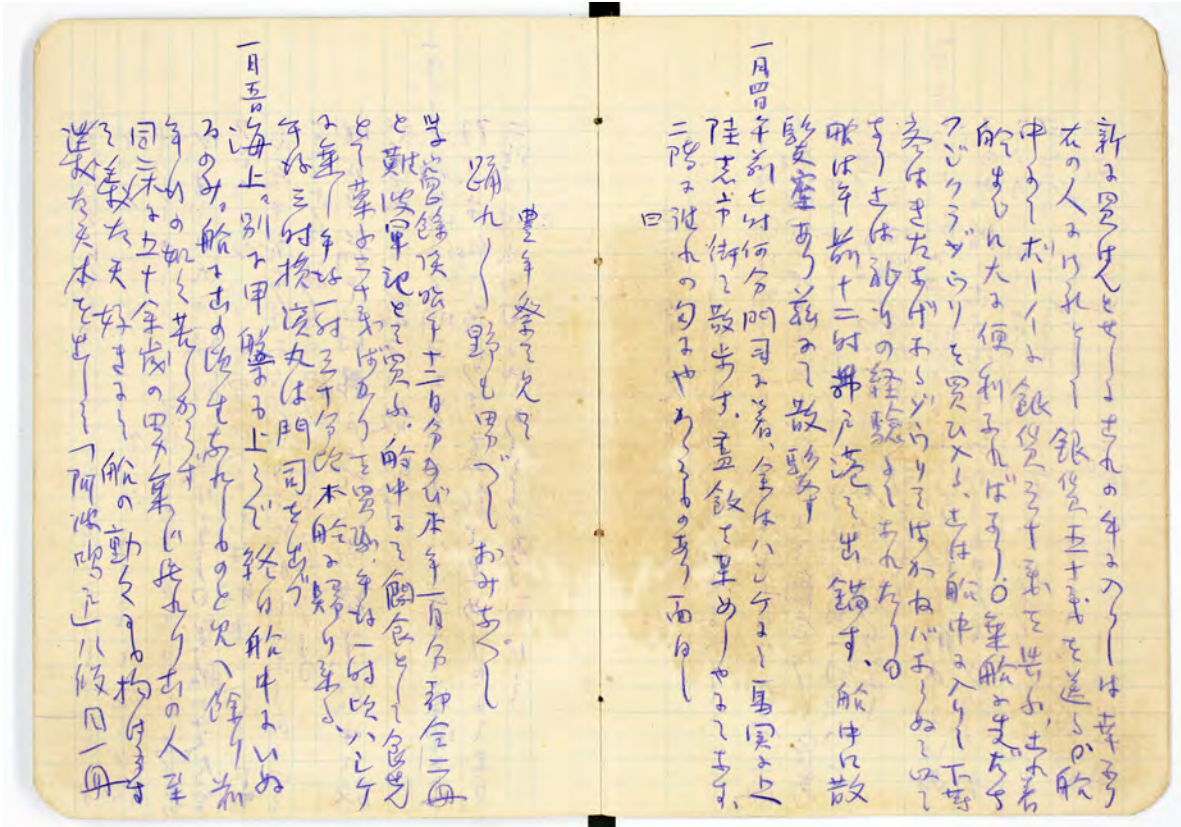
一月三日

送りたるは板碑に就ての文及び其分布図
 原君へ送りたるは香川氏の吉野川流域
 の変遷図等なり、

午後二時〇〇兵庫着、直ちに兵庫へ上陸

未だ夜陰なるを以て兵庫客船待合所に
 て休息す（昨夜の汽船は海上おだやかにて
 一眠の間に着しぬ）待合所にはコタツありて
 夜は心持よくいねたり、早朝おき出で一輛の
 腕車をやとひ荷物を番賀川廻漕店へはこぶ。
 賀川は兼井戸やく戸を開き居る際なりき

余は一礼し朝水をつかひ其れより賀川の主人
 番頭などに一礼せし、当日は正月の三日なりし
 を以て、ゾウニモチの御祝ひを店員一同とともに
 せり。東京なる拙父、坪井氏及び片山兄には
 がきを出す、風呂に行く。午前十時半頃賀川出
 で郵船会社の支店にて乗券（下等）を買ふ。賀
 川より一人のつぎ来らる。其れより十一時頃乗船
 （横濱丸に）時に小生は毛布を昨夜待合に置き
 忘れしことを覚りしかバ、右のつき来りくれたる
 人にこのよしを話しこれをとりによりぬ、忽ちに
 してこれを取り来りくれたり。若しもこの毛布
 して無くなり居りたれば已むなく馬関にて



新に買はんとせしに、これの手に入りしは幸なり
 右の人に御礼として銀貨五十銭を送る、○船
 中にてボーイに銀貨三十銭を与ふ。これ着
 船までに大に便利なればなり。○乗船に先だち
 フジクラソウリ（船倉）を買ひ入る、こは船中に入りて下等
 客はきたなげなるゾウリをはかねばならぬを以て
 なり、こは旅行の経験にてなれたり○
 船は午前十二時神戸港を出錨す、船中に散
 髪室あり茲にて散髪す
 一月四日午前七時何分門司に着、余はハシケ（船）にて馬関に上
 陸し市街を散歩す。昼飯を某めしやにてなす、
 二階に誰れの句にや、かゝるものあり面白し
 曰

豊年祭を見て

踊れ〜野も男べしおみなへし

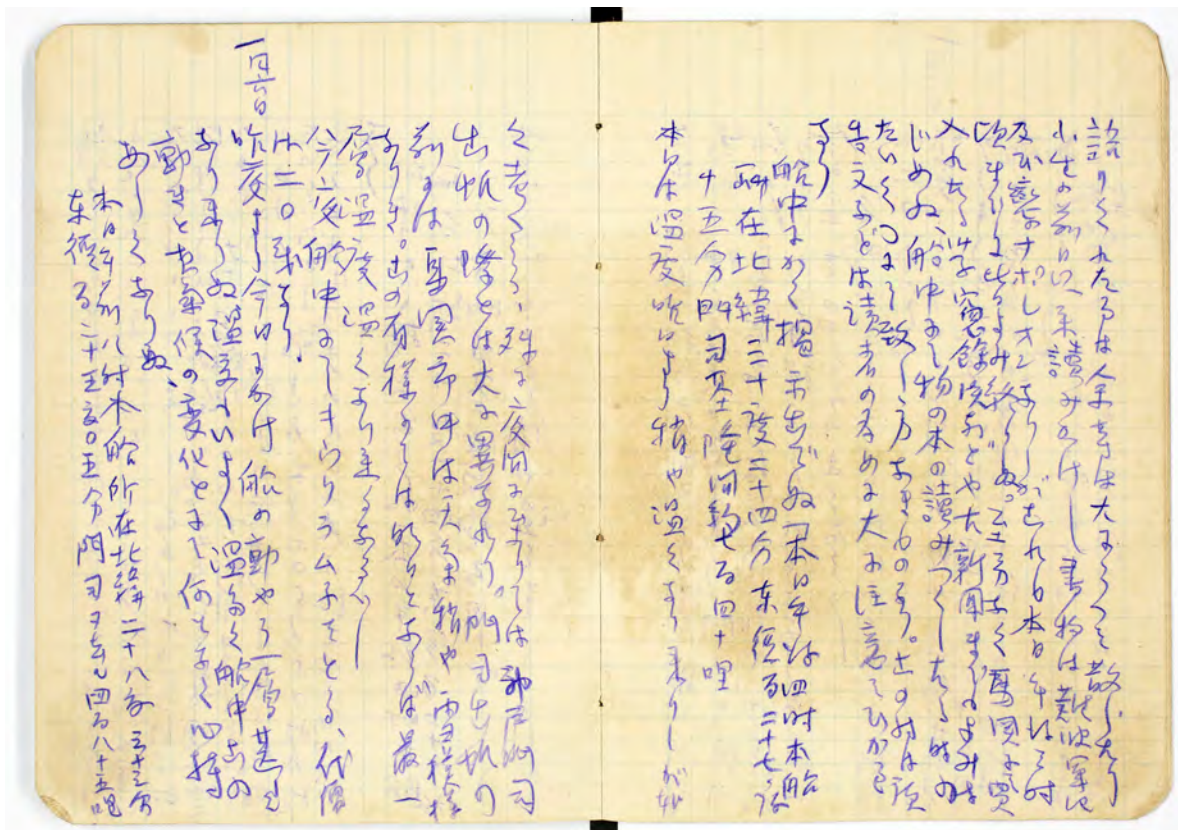
学窓余談昨年十二月分及び本年一月分都合二冊
 と難波軍記とを買ふ。船中にて間食として食せん
 とて菓子二十銭ばかりを買ひふ。午後一時頃ハシケ
 に乗し午後一時三十分頃本船に帰り来る、
 午後三時横浜丸は門司を出づ

一月五日海上。別に甲盤にも上らで終日船中にいぬ

るのみ。船にこの頃生なれしものと見へ余り前
 年行の如く苦しからず

同床に五十余歳の男乗じ居れり、この人至
 て義太夫好きにて船の動くにも拘はらず
 義太夫本を出して「阿波鳴戸」八段目一冊

豊年祭を見て
 踊れ〜野も男べしおみなへし
 学窓余談昨年十二月分及び本年一月分都合二冊
 と難波軍記とを買ふ。船中にて間食として食せん
 とて菓子二十銭ばかりを買ひふ。午後一時頃ハシケ
 に乗し午後一時三十分頃本船に帰り来る、
 午後三時横浜丸は門司を出づ
 一月五日海上。別に甲盤にも上らで終日船中にいぬ
 るのみ。船にこの頃生なれしものと見へ余り前
 年行の如く苦しからず
 同床に五十余歳の男乗じ居れり、この人至
 て義太夫好きにて船の動くにも拘はらず
 義太夫本を出して「阿波鳴戸」八段目一冊



語りくられたるは余等は大にうつを散じたり
 小生の前日以来読みかけし書物は難波軍記
 及び恋のナポレオンなりしが、これも本日午後三時
 頃までに皆よみ終りぬ。至方なく馬関にて買
 入れたる学窓余談などや古新聞までもよみは
 じめぬ、船中にて物の本の読みつくしたる時の
 たいくつにて致し方なきものなり。この時は広
 告文などは読者の為めに大に注意をひかる、
 なり

船中にかく揭示出でぬ「本日午後四時本船
 所在、北緯三十度二十四分、東径百二十七度
 十五分、門司・基隆間約七百四十哩

本日は温度、昨日より稍や温くなり来りしが如

く考へらる、殊に夜間に至りては神戸・門司

出帆の際とは大に異なれり。門司出帆の

前には馬関市中は天気稍や雪模様

なりき。この有様にては明日とならば最一

層温度温くなり来るべし

今夜船中にてキウリラムをとる、代価

は二〇銭なり。

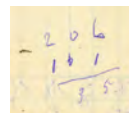
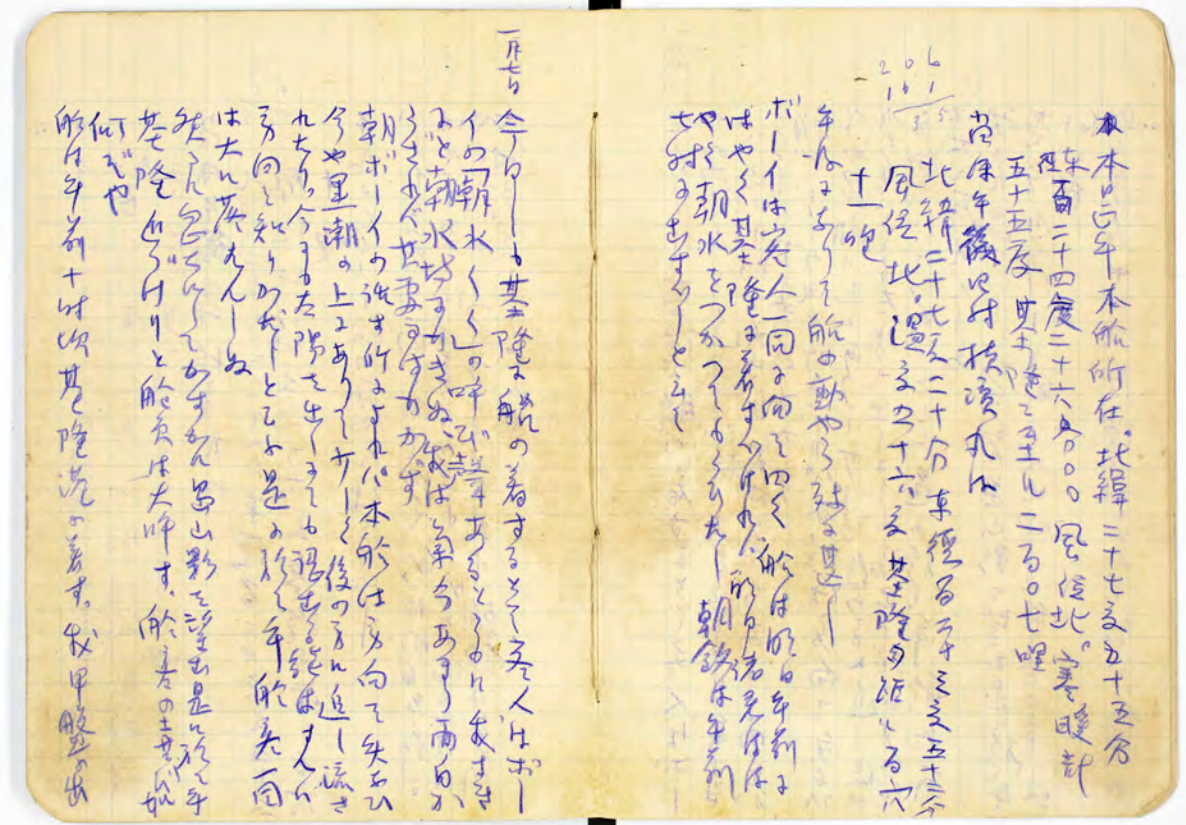
一月六日昨夜より今日にかけ船の動やう一層甚しく

なり来りぬ、温度もいよく温たく、船中この

動きと其氣候の変化とにて何となく心持

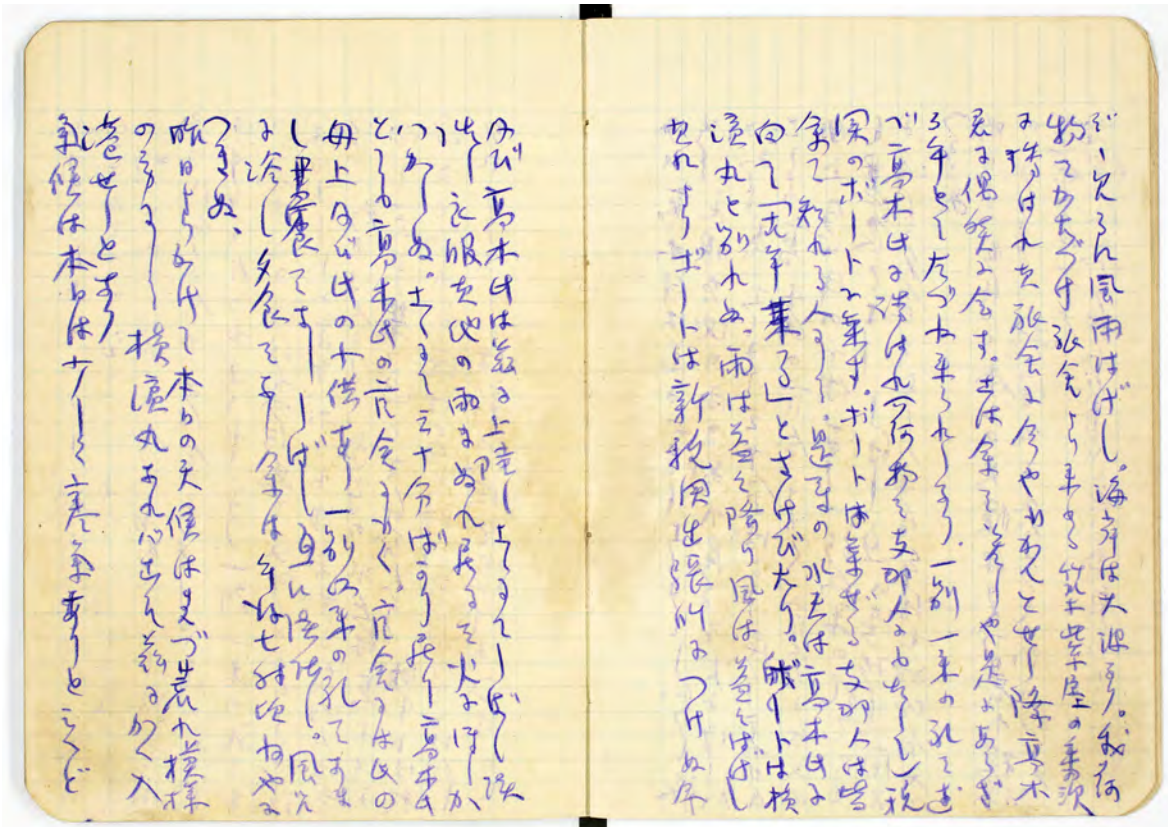
あしくなりぬ、

本日午前八時本船所在、北緯二十八度三十三分
 東径百二十五度〇五分、門司ヲ去ル四百八十五哩



本日正午本船所在。北緯二十七度五十五分
東徑百二十四度二十六分〇〇、風位北。寒暖計
五十五度。基隆ニ至ル二百〇七哩
尚ほ午後四時横濱丸は
北緯二十七度二十分。東徑百二十三度五十二分
風位北。温度五十六度。基隆ヲ距ル百六
十一哩
午後になりて船の動やう殊に甚し
ボーイは客人一同に向て曰く、船は明日午前に
はやく基隆に着すべけれバ明日諸君はは
やく朝水をつかつてもらひたし、朝飯は午前
七時に出すべしと云々

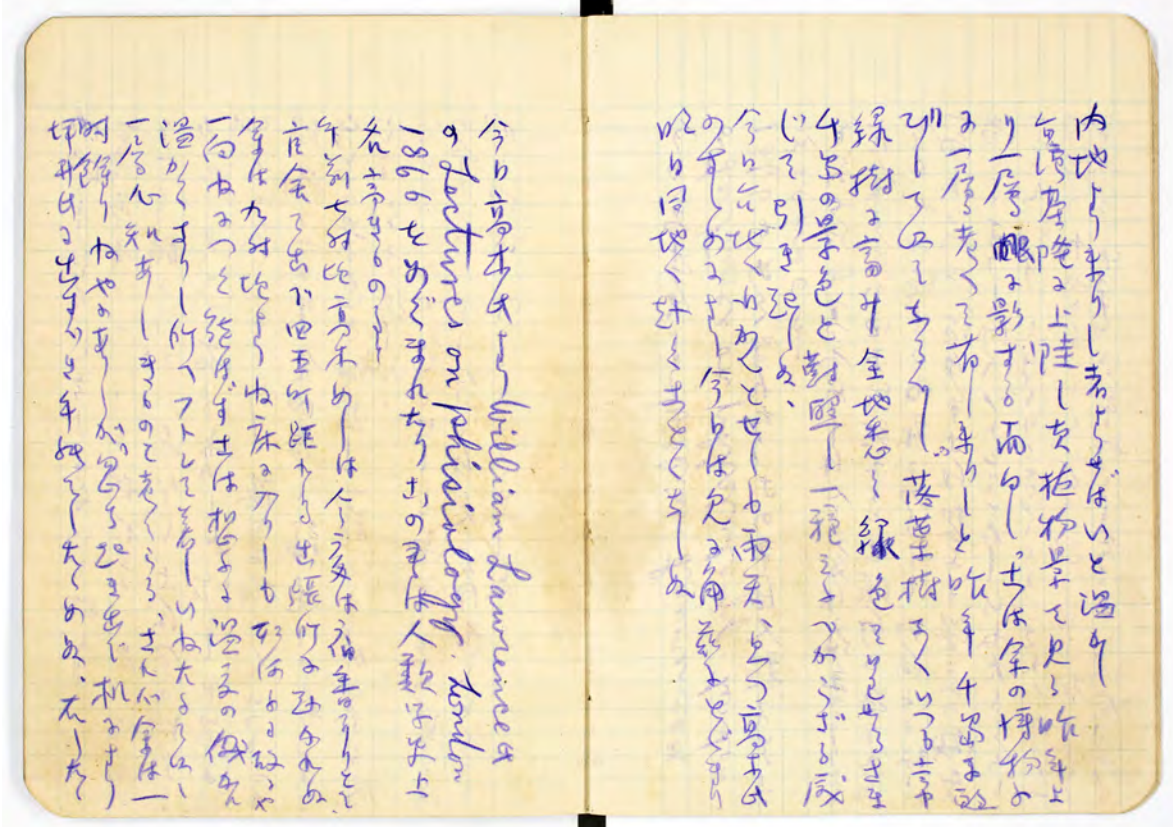
一月七日今日しも基隆に船の着するとして、客人はボーイの「朝水くくく」の呼び声あるとともに我さきにと朝水場に行きぬ、我は気分あまり面白からざれば其処には行かず
朝ボーイの話す所によれば、本船は方向を失なひ今や黒潮の上において少しく後の方に追し流されたり。今にも太陽を出しにても認むる能はずんバ方向を知りがたしと云ふ、是に於て乎、船客一同は大に落たんしぬ
然るに忽ちにしてかすかに島山影を望む、是に於て乎基隆近づけりと船員は大呼す。船客の喜び如何ぞや
船は午前十時頃基隆港に着す。我甲盤に出



い、見ると風雨はげし。海岸は大波なり。我荷物をかたづけ、旅舎より来る築紫屋の番頭に誘はれ其旅舎に今や行かんとせし際、高木君に偶然に会す。こは余を若しや是にあらざる乎とてたづね来られしなり。一別一來の礼を述べ高木氏に誘はれ(荷物を支那人にもたして)税関のボートに乗す。ボートは乗せる支那人は皆余を知れる人にして。是等の水夫は高木氏に向て「古年来る」とさげびたり。ボートは横浜丸と別れぬ。雨は益々降り風は益々はげし其れよりボートは新税関出張所につけぬ、余

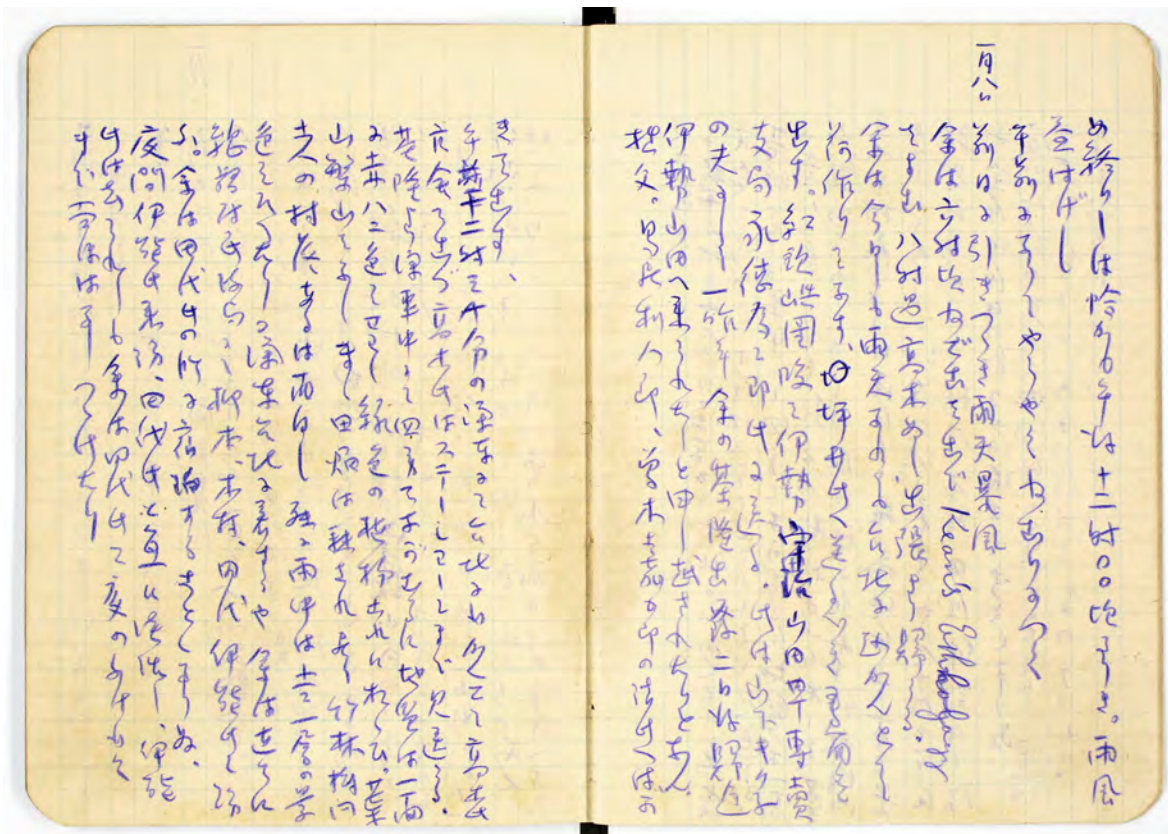
及び高木氏は茲に上陸し、こゝにてしばし談話し衣服其他の雨にぬれ居るを火にほしかハかしぬ。こゝにて三十分ばかり居り高木氏とともに高木氏の官舎に行く。官舎には氏の母上及び氏の小供あり一別以來の礼をすまし、昼食をなししばし互に談話し。風呂に浴し夕食をなし、余は午後七時頃ねやにつきぬ、昨日よりかけて本日の天候は先づ荒れ模様の方にして、横浜丸なればこそ茲にかく入港せしとなり
気候は本日は少しく寒気ありと云へど

及び高木氏は茲に上陸し、こゝにてしばし談話し衣服其他の雨にぬれ居るを火にほしかハかしぬ。こゝにて三十分ばかり居り高木氏とともに高木氏の官舎に行く。官舎には氏の母上及び氏の小供あり一別以來の礼をすまし、昼食をなししばし互に談話し。風呂に浴し夕食をなし、余は午後七時頃ねやにつきぬ、昨日よりかけて本日の天候は先づ荒れ模様の方にして、横浜丸なればこそ茲にかく入港せしとなり
気候は本日は少しく寒気ありと云へど



内地より来りし者よりせばいと温かし
 台湾基隆に上陸し其植物景を見る、昨年よ
 り一層眼に影する面白し。こは余の博物学
 に一層考へを有し来りしと昨年千島に遊
 びしを以てなるべし。落葉樹なくいつも常
 緑樹に富み全地悉く緑色を呈せるさま
 千島の景色と対照し一種云ふべからざる感
 じを引き起しぬ、
 今日台北へ行かんとせしも雨天、且つ高木氏
 のすゝめにより今日は兎に角茲にとゞまり
 明日同地へ赴くこと、なしぬ

今日高木氏より William Lawrence 氏
 の Lectures on physiology, London
 1866 をめぐまれたり、この書は人類学史上
 名高きものなり
 午前七時頃高木ぬしは、今夜は宿番なりとて
 官舎を出で四、五町距れる出張所に赴かれぬ、
 余は九時頃よりね床に入りしも如何なる故にや
 一向ねにつく能はず、こは想ふに温度の俄かに
 温かくなりし所へフトンを着しいねたるを以て
 一層心知あしきものと考へらる、されバ余は一
 時余りねやにありしが、忽ち起き出で机により
 坪井氏に出すべき手紙をした、めぬ、右した、



め終りしは恰かも午後十二時〇〇頃なりき。雨風益々はげし

午前になりてやうやくねむりにつく

一月八日前日に引きつゝ、き雨天暴風

余は六時頃ねどこを出で Kean's Ethnology をよむ、八時過高木ぬし出張より帰らる。

余は今日しも雨天なれども台北に赴かんとて

荷作りをなす、〇坪井氏へ送るべき書面を

出す。紅頭嶼図略を伊勢山田宇治山田町専売

支局永徳為二郎氏に送る。氏は山下キク子

の夫にして、一昨年余の基隆出發二日後帰途

伊勢山田へ来られたしと申し越されたりとなん。

拙父。鳥居利八郎、曾木嘉五郎の諸氏へはが

きを出す、

午前十二時三十分の汽車にて台北に行かんとて高木氏

官舎を出づ、高木氏はステーションまで見送らる。

基隆より汽車中にて四方をながむるに、地質は一面

に赤ハニ色を呈し緑色の植物これにおゝひ。葉

山繁山をなしま、田畑は耕され居り竹林樹間

土人の村落あるは面白し、殊に雨中は尚一層の景色

をそへたり〇汽車台北に着するや余は直ちに

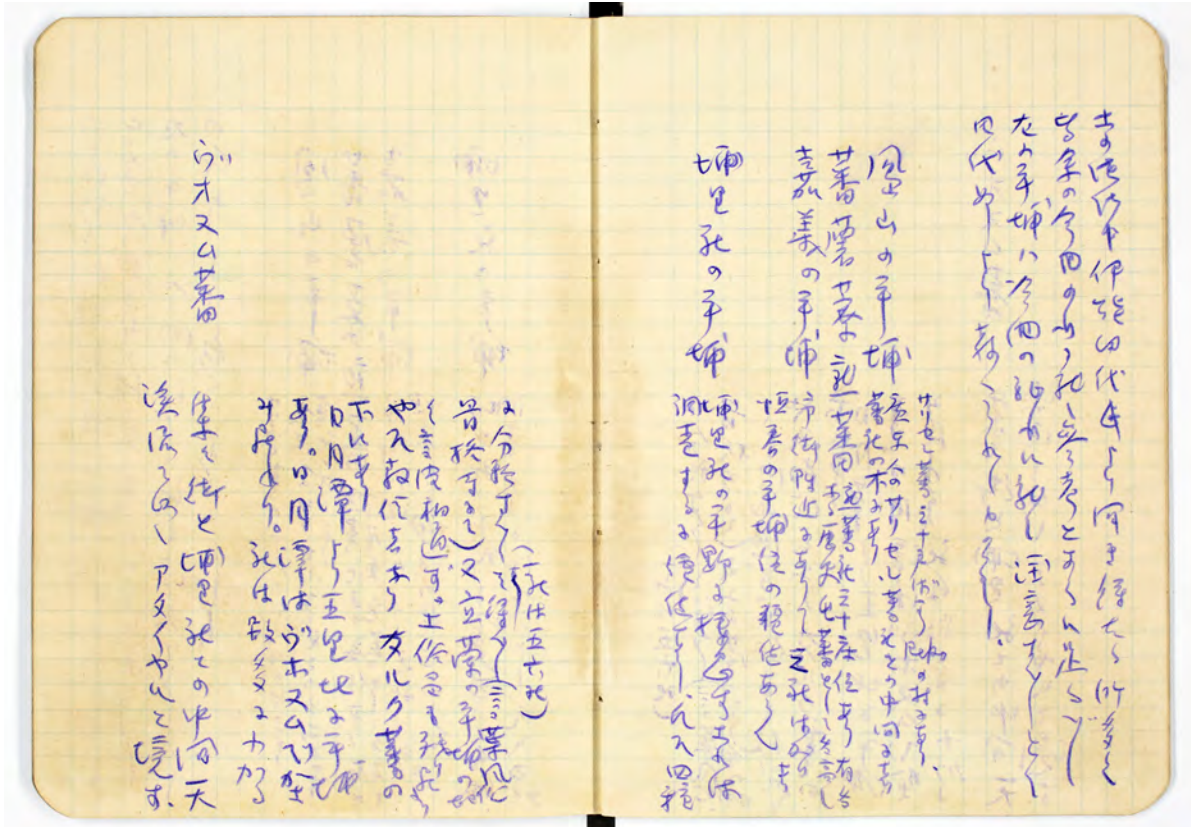
総督府民政局にて柳本、木村、田代、伊能氏を訪

ふ。余は田代氏の所に宿泊すること、なりぬ、

夜間伊能氏來訪、田代氏と互に談話し、伊能

氏は去られしも余は田代氏と夜のふけ行く

まで尚ほはなしつゝ、けたり



この談話中伊能・田代氏より聞き得たる所多く
 皆余の今回の旅行に就て参考とするに足るべし
 左の平埔ハ今回の旅行に就て注意すべしとて
 田代ぬしより教へられしものなり。

鳳山の平埔

サリセン蕃三十戸ばかり Pappo の村にあり、
 広東人のサリセン蕃社との中間にあり
 蕃社の下にあり、

蕃薯熟蕃

熟蕃社三十庄位あり、有名
 なる歴史屯蕃として名高し

嘉義の平埔

市街附近にありて三社ばかりあり
 恒春の平埔位の価値あらん

埔里社の平埔

埔里社の平野に棲息す、これは
 調査するに価値あり、凡そ四種

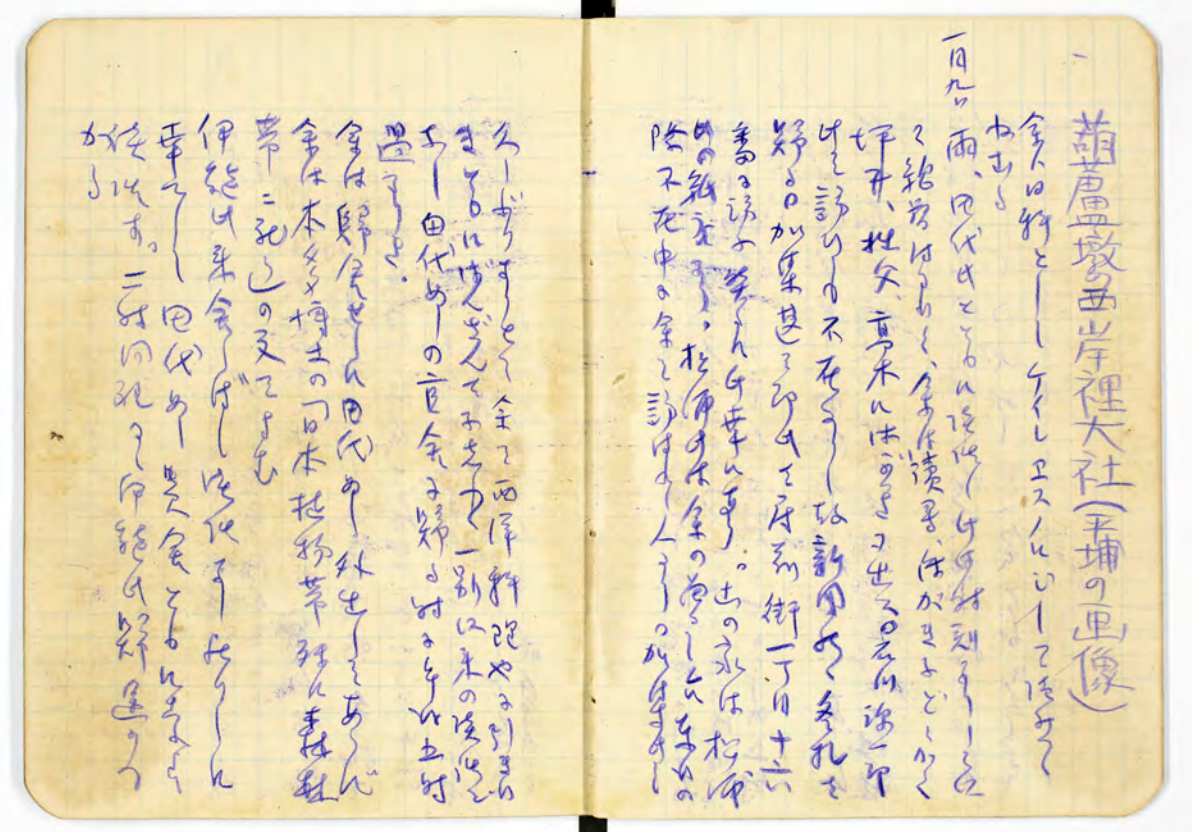
(一社は五、六社なり)

に分類すべしを得べし(言葉・風俗・
 骨格等にて)又宜蘭の平埔の如
 く言語相通ず。土俗品も残り居なり
 (耶蘇) やそ教信者なり、タルク蕃の
 下にあり

日月潭より五里北に平埔
 あり。日月潭はヴオヌムでかこ
 み居れり。社は数多にわかる

ヴオヌム蕃

集々街と埔里社との中間一大
 溪流を以てアタイヤルと境す、



葫蘆墩の西岸裡大社(平埔の画像)

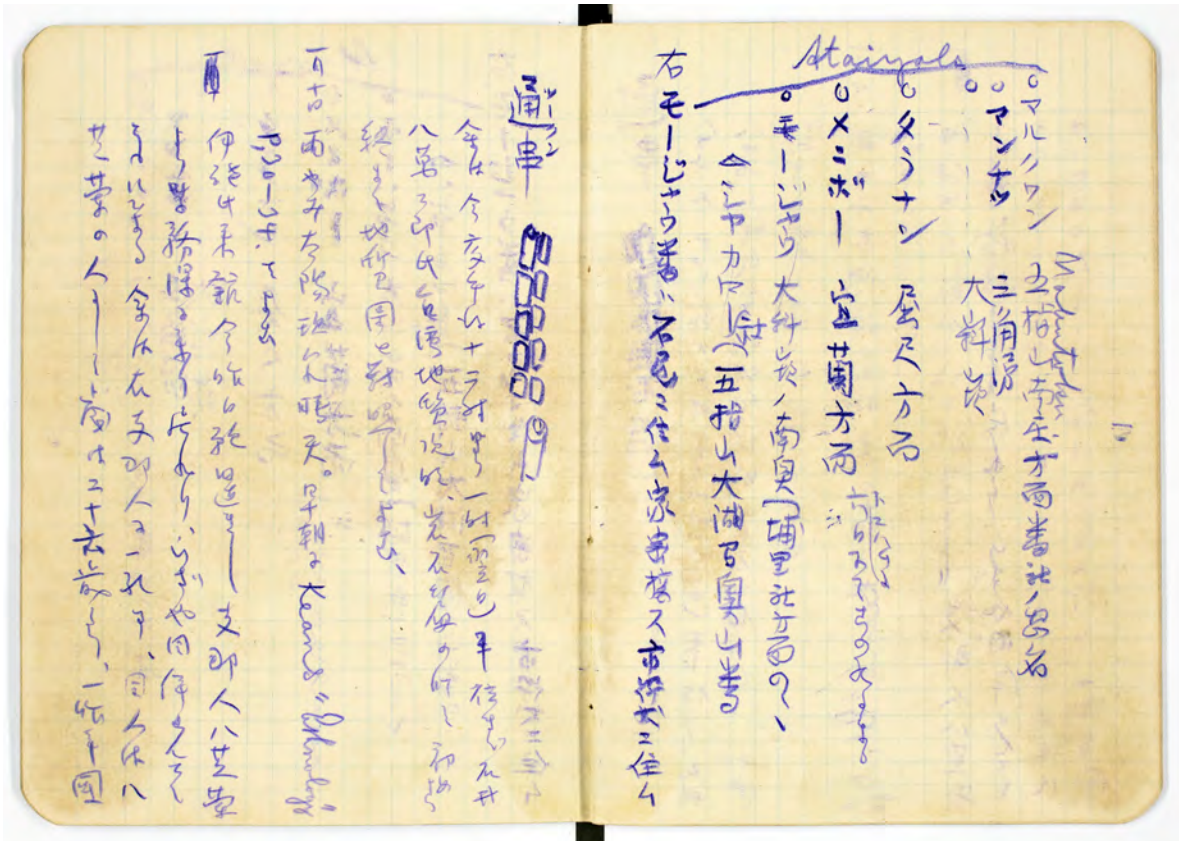
一月九日雨、田代氏と...
 余は日科としてケイン エスノロジーを讀みつ、
 ねむる
 総督府に行く、余は讀書、はがきなどをかく
 坪井、拙父、高木にはがきヲ出ス○石川源一郎
 氏を訪ひしも不在なりし故、新聞社へ名札を
 歸る○加集甚三郎氏を府前街一丁目十六
 番に訪ふ、然るに氏幸にあり。この家は松浦
 氏の紙店なり。松浦氏は余の曾て台東行の
 際、不在中に余を訪はれし人なり○加集氏も
 不在中に余を訪はれし人なり○加集氏も

久しぶりなりとて余を西洋料理（店）りに引き行
 き、ともにばんざん（晩餐）をなしつ、一別以来の談話を
 なし田代ぬしの官舎に帰る、時に午後五時
 過なりき。
 余は歸舎せしに田代ぬし外出してあらず
 余は本多博士（本多静六）の「日本植物帯殊に森林
 帯ニ就テ」の文をよむ
 伊能氏来舎、しばし談話なし居りしに
 幸にして田代ぬし（婦カ）貴舎、ともにこれより
 談話す。二時間程にて伊能氏帰途につ
 かる

「葫蘆墩（異筆）の西岸裡大社（平埔の画像）」
 余ハ日科（課）としてケイン エスノロジーを讀みつ、
 ねむる

一月九日雨、田代氏とともに談話し氏は時刻なりしを以
 て総督府に行く、余は讀書、はがきなどをかく
 坪井、拙父、高木にはがきヲ出ス○石川源一郎
 氏を訪ひしも不在なりし故、新聞社へ名札を
 歸る○加集甚三郎氏を府前街一丁目十六
 番に訪ふ、然るに氏幸にあり。この家は松浦
 氏の紙店なり。松浦氏は余の曾て台東行の
 際、不在中に余を訪はれし人なり○加集氏も
 不在中に余を訪はれし人なり○加集氏も

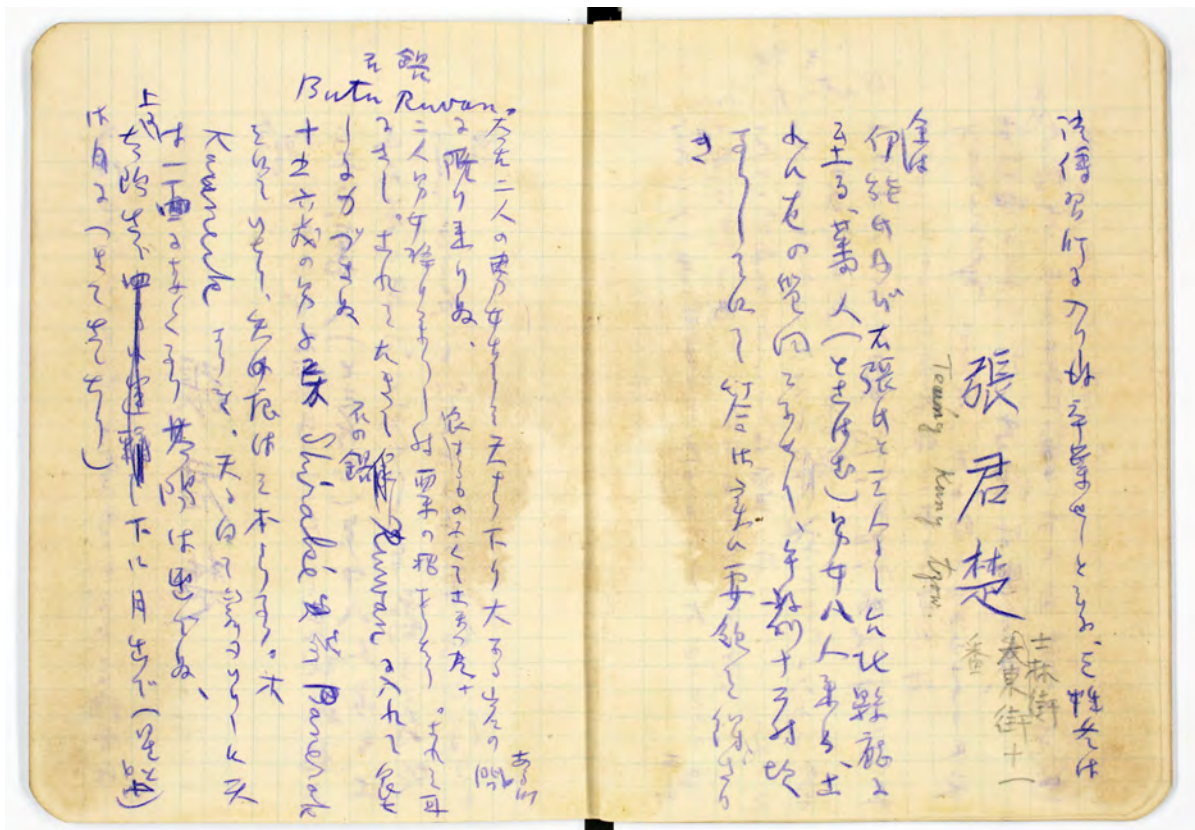
久しぶりなりとて余を西洋料理（店）りに引き行
 き、ともにばんざん（晩餐）をなしつ、一別以来の談話を
 なし田代ぬしの官舎に帰る、時に午後五時
 過なりき。
 余は歸舎せしに田代ぬし外出してあらず
 余は本多博士（本多静六）の「日本植物帯殊に森林
 帯ニ就テ」の文をよむ
 伊能氏来舎、しばし談話なし居りしに
 幸にして田代ぬし（婦カ）貴舎、ともにこれより
 談話す。二時間程にて伊能氏帰途につ
 かる



廿月
伊能氏来館、今昨日願置きし支那人八芝蘭より学務課に來り居れり、いざや同伴せんとてともに參る、余は右支那人に一札す、同人は八芝蘭の人にして歳は二十六歳なり、一昨年国

一月十日雨やみ太陽現ハレ晴天。早朝に Keans "Ethnology"
P.30-34. をよむ

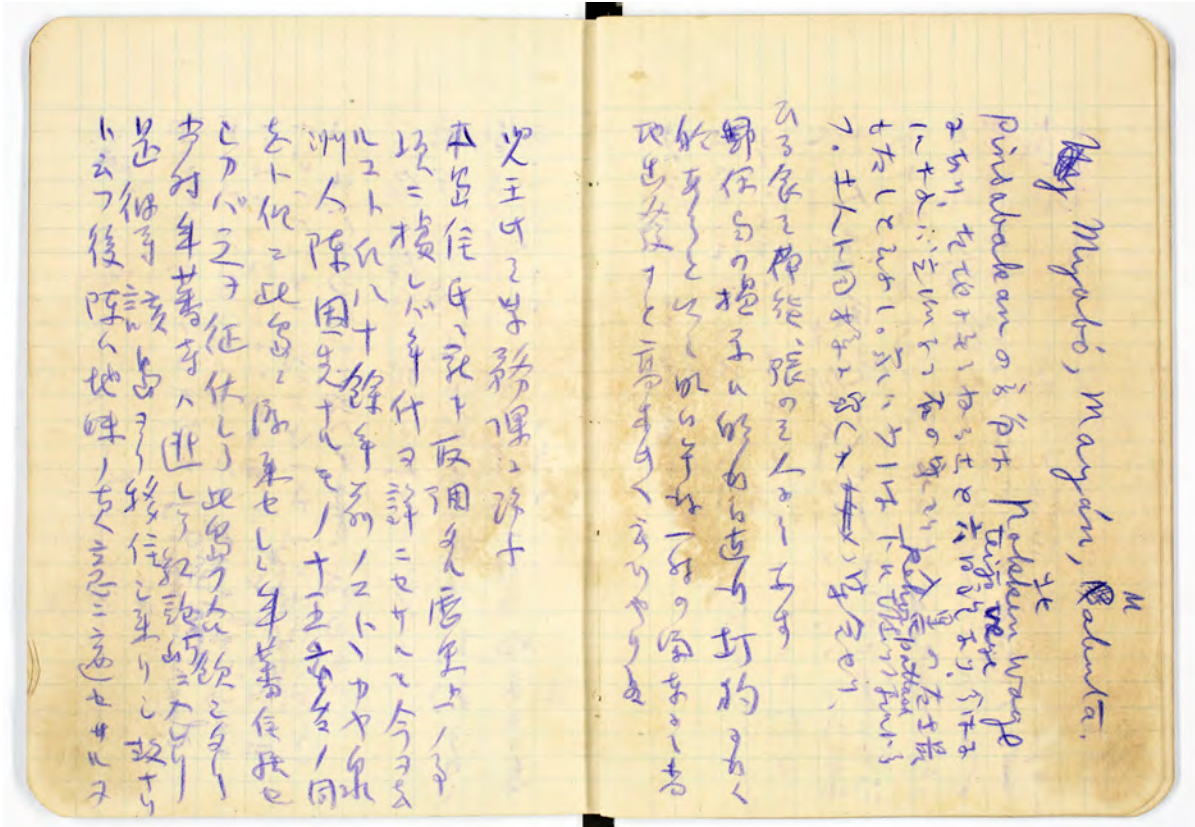
通串
余は今夜午後十二時より一時(翌日)半位まで石井八萬二郎氏台湾地質説明、岩石篇の所を初めより終まで地質図と対照してよむ、



石鍋
Butu Ruwan.

太古二人の男女ありて天より下り大なる岩の間
 に降り来りぬ、食するものなくてこまった
 二人男女降り来りし時粟の穂ありたり。これを耳
 にさし。これをたきて兼石の鍋 Ruwan に入れて食せ
 しに力づきぬ
 十五、六歳の男子、弗矢 Shiraké 朱箭 Panerok
 を以ていたり、矢俵の根は三本よりなり。木
 Kameck なりき。天に向て箭ヲいりしに天
 は一面に赤くなり太陽は出でぬ、
 上に太陽出で四方に運轉し下に月出で (星とも)
 は月につきて出したり)

語伝習所に入りし後卒業せしと云ふ、其姓名は
 (異姓) 張 君 楚 (鉛筆書) 「士林街 / 大東街十一番」
 (鉛筆書) [Teang Kung tzow]
 余は伊能氏及び右張氏と三人にて台北県庁に
 至る、蕃人(とこはむ)男女八人来る、こ
 れに左の質問をなせり、午後前十二時頃
 なりしを以て答は実に要領を得ざり
 き



My Myabó, Mayán, Mabutá.

Pinsabakan の 方角は、^北 pakken wage
 あり、其地に至るること六日程なり。今はな
 しによれば立派なる石の家アリテ、入墨の太さ最
 も太しと云ふ也。家ハ少しは下に掘ッテ居ルト云
 フ。土人ト同様に家カタヲヲ集合セリ、
 ひる食を伊能、張の三人にてなす
 郵便局の掲示に明後日直行打狗(高雄)に行く
 船あるを以て、明日午後一時の汽車にて当
 地出發すと高木氏へ云ひやりぬ

児玉氏の學務課に訪ふ
 本島住民ニ就キ取調タル歴史上ノ事
 項ニ抛レバ、年代ヲ詳ニセサルモ今ヲ去
 ルコト凡八十余年前ノコト、カヤ、泉
 洲人陳因先ナルモノ十五、六名ノ同
 志ト俱ニ此島ニ渡來セシニ、生蕃住居セ
 シカバ之ヲ征伏シテ此島ヲ占領シタリ
 當時生蕃等ハ逃レテ紅頭嶼ニ入レリ
 是彼等該島ヨリ移住シ来リシ故ナリ
 ト云フ、後陳ハ地味ノ其意ニ適セサルヲ

My Myabó, Mayán, Mabutá

〔^{編註} Pinsabakan の方角は、^北 pakken wage
 teijo vege

〕
 あり、其地に至るること六日程なり。今はな
 しによれば立派なる石の家アリテ、入墨の太さ最
 も太しと云ふ也。家ハ少しは下に掘ッテ居ルト云
 フ。土人ト同様に家カタヲヲ集合セリ、

ひる食を伊能、張の三人にてなす

郵便局の掲示に明後日直行打狗(高雄)に行く

船あるを以て、明日午後一時の汽車にて当

地出發すと高木氏へ云ひやりぬ

〔^{児玉} 児玉氏を學務課に訪ふ

本島住民ニ就キ取調タル歴史上ノ事

項ニ抛レバ、年代ヲ詳ニセサルモ今ヲ去

ルコト凡八十余年前ノコト、カヤ、泉

洲人陳因先ナルモノ十五、六名ノ同

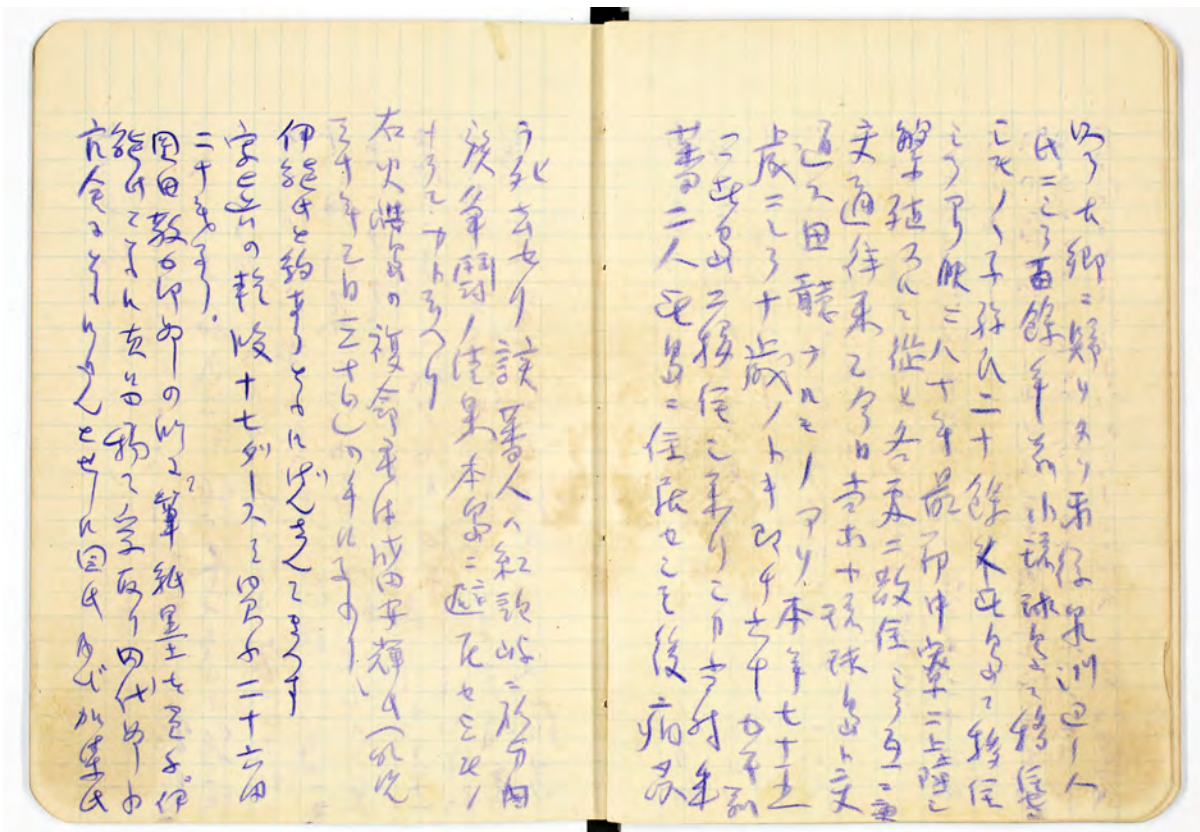
志ト俱ニ此島ニ渡來セシニ、生蕃住居セ

シカバ之ヲ征伏シテ此島ヲ占領シタリ

當時生蕃等ハ逃レテ紅頭嶼ニ入レリ

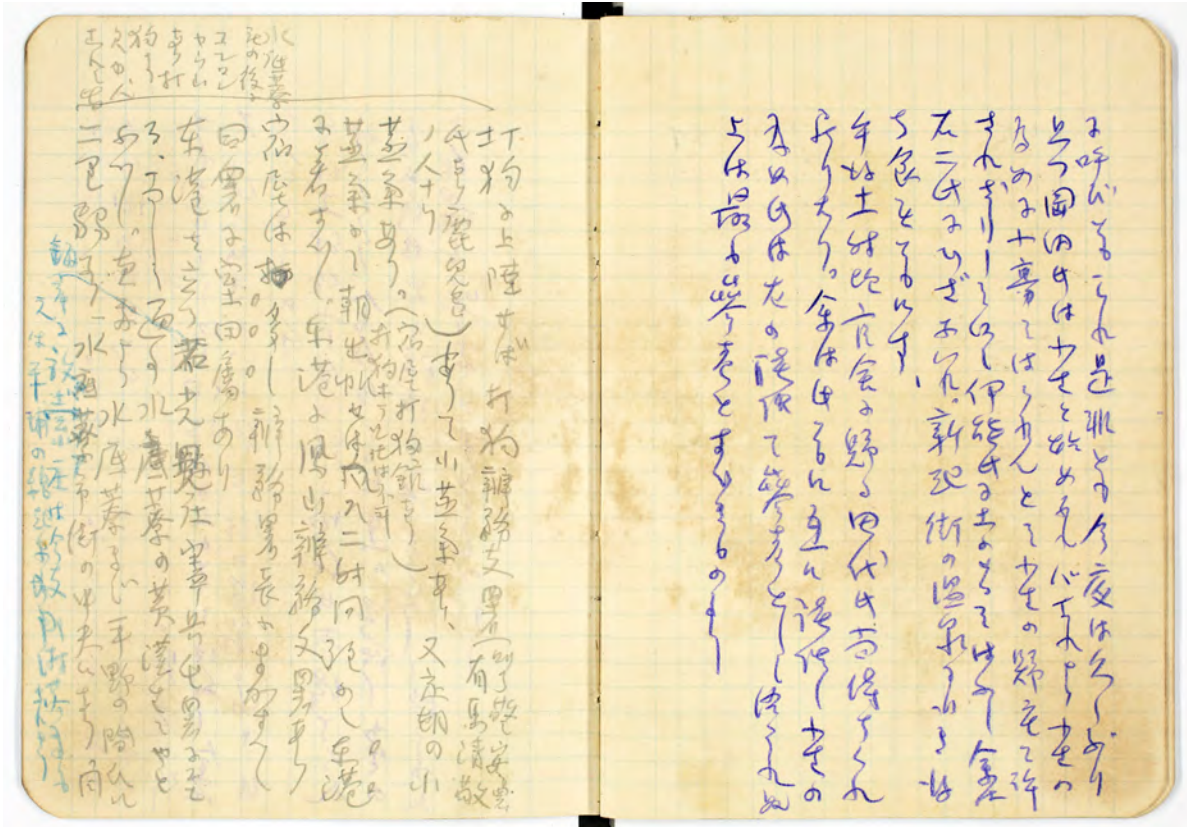
是彼等該島ヨリ移住シ来リシ故ナリ

ト云フ、後陳ハ地味ノ其意ニ適セサルヲ



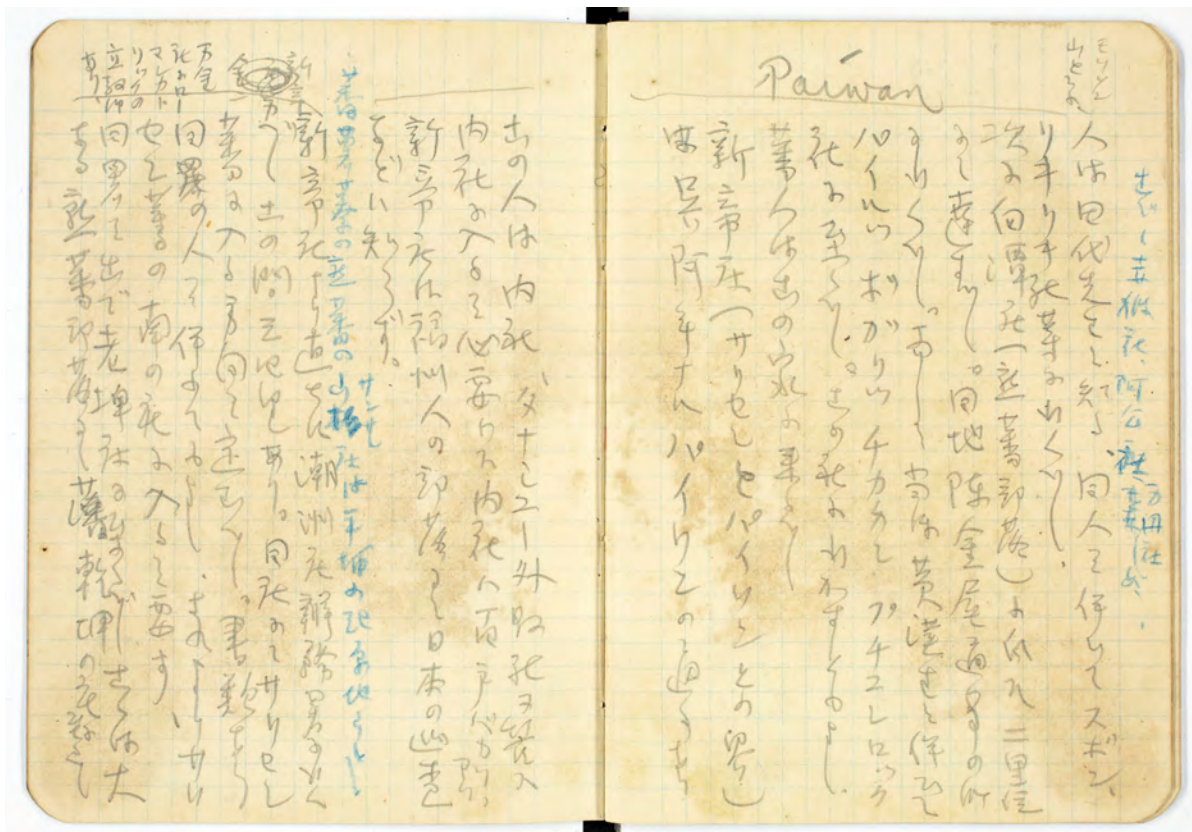
以テ古郷^(故)ニ帰リタリ、爾後、泉州辺ノ人
 民ニシテ百余年前小琉球島ニ移住セ
 シモノ、子孫凡二十余人、此島ニ移住
 シテアリ、既二八十年最初中寮ニ上陸シ
 繁殖スルニ從ヒ各処ニ散住シテ互ニ來
 交通往來シ、今日尚ホ小琉球島ト交
 通ス、田聽ナルモノアリ、本年七十五
 歳ニシテ十歳ノトキ即チ六十五年前
 ニ此島ニ移住シ來リシカ、當時生
 蕃二人此島ニ住居セシモ後病ヲ以

テ死去セリ、該蕃人ハ紅頭嶼ニ於テ同
 族争鬪ノ結果、本島ニ避居セシモノ
 ナランカト云ヘリ
 右火嶼島^(尖嶼島之)の復命書は成田安輝氏(明治
 三十年三月三十日)の手になれり、
 伊能氏と約^(版)あり、ともにばん^(晩)さんをきつ^(契)す
 写真の乾版十七ダースを買ふ、二十六円
 二十銭なり。
 岡田敬五郎ぬしの所にて筆・紙・墨を買ふ。伊
 能氏とともに其品物を受取り田代ぬしの
 官舎にともに行んとせしに、同氏及び加集氏



と呼びよるは是れ非とも今夜は久しぶり
 とう岡田氏は小生と始めなれば、これより小生の
 為めに小宴を（悪）はられんとて、小生の帰宅を許
 されざりしを以て伊能氏にこの旨をはなし、余は
 右二氏にいざなハレ新起街の温泉に行き後
 ち食をとにもにす、
 午後十一時頃官舎に帰る、田代氏尚待ちくれ
 居りたり。余は氏ともに互に談話し、小生の
 為め氏は左の談話を参考として語られぬ
 こは最も参考とすべきものなり

打狗の上陸せば打狗辨務支署（則ち警察署）
（船乗書以下画像番号まで）
 氏あり、鹿兒島（有馬清敬）
 ノ人ナリ
 蒸気あり。（宿屋打狗館あり）
（打狗ホテル行は不可）
 蒸気にて朝出帆せば凡そ二時間程にて東港
 に着すべし。東港に鳳山弁務支署あり
 宿屋は多し、弁務署長にまかすべし
 同署に室田属あり
 東港を立テ若光曝見庄寧兵屯署に至
 る、而して通事水底藁の黄漢生をやと
 ふべし。其処より水底藁まで平野の間凡そ
 二里弱なり、水底藁市街の中央にあり。同
（宿船館書）
 「海岸に放索庄は今支那村落なれども
 元は平埔の総起原ノ故事也、これより」
（上部）
 「水底藁ノ社の後にノコンロンノヤウ山ノあり打ノ狗よりノ
 見ゆ、人ノこれを皆ノ」

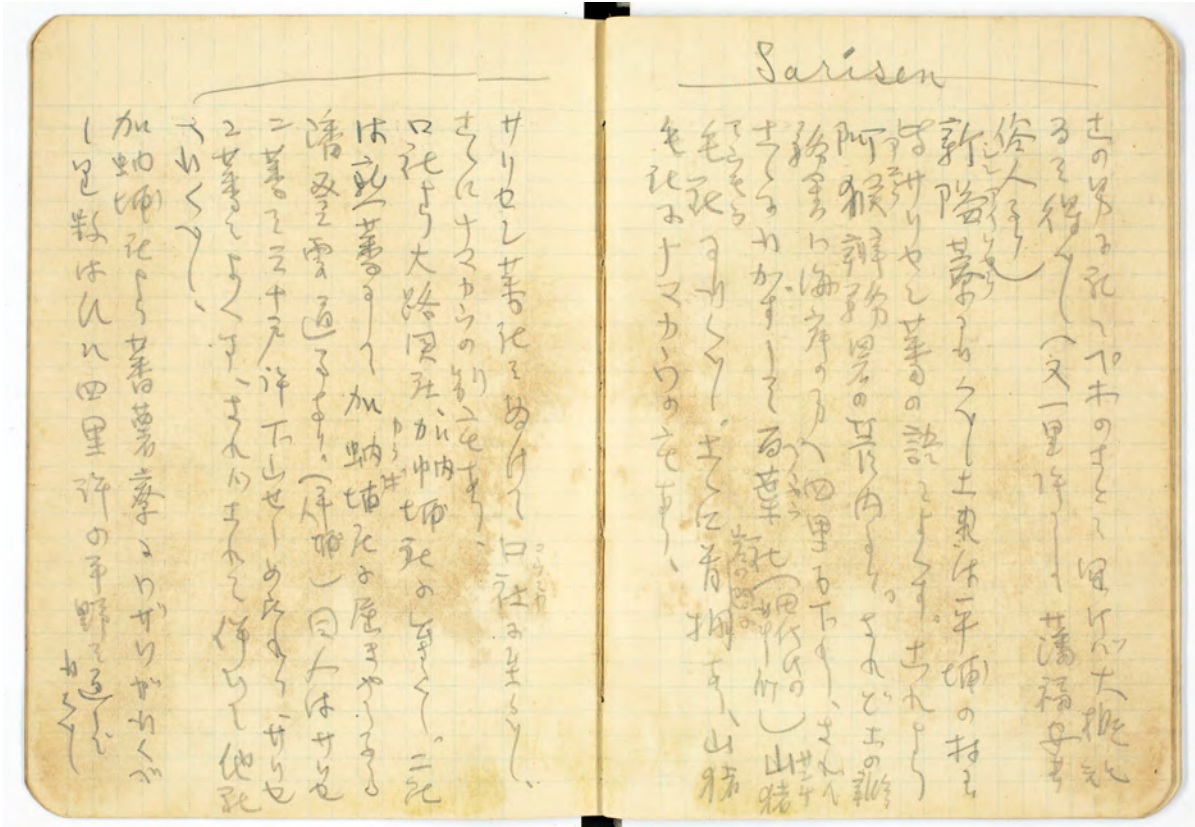


Paiwan

「モリソン／山と云ふ、」
(上部)
(青鉛筆書)
 人は田代先生を知る、同人を伴いてスボン、
 リキリキ社等に行くべし。
 次に向潭庄(熟蕃部落)に凡そ二里位
 にて達すべし。同地陳金屋通事の所
 に行くべし。而して尚ほ黄漢生を伴ひて
 パイルツ ボガリツ チカタン プチユンロック
 社に至るべし。この社に行かすともよし。
 蕃人はこの家に来るべし
 新帝庄(サリセンとパイワンとの界)
 肆に呉阿年ナルパイワンの通事あり

この人は内社、タナシユー外数社ヲ管ス
 内社に入るを必要トス、内社ハ百戸バカリアリ。
 新帝庄は福州人の部落にて日本の巡査
 などハ知らず。

「蕃薯寮(青鉛筆書)の熟蕃(サンサル)の山杉庄は平埔の起原地なりし也」
 新帝庄より直ちに潮洲庄弁務署に行く
 べし、この間三、四里あり。同庄にてサリセン
 蕃に入る方向を定むべし。書類あり
 同署の人を伴ふてもよし。これよりサリ
 セン蕃の南の庄に入るを要す、
 同署を出で老埤庄に至るべし、こゝは大
 なる熟蕃部落にて藩乾坤の宅に至るべし
(上部)
 「新帝庄(上部)ヲ方々金／万全／庄にロー／マンカト／リックの／
 宣教師あり、」



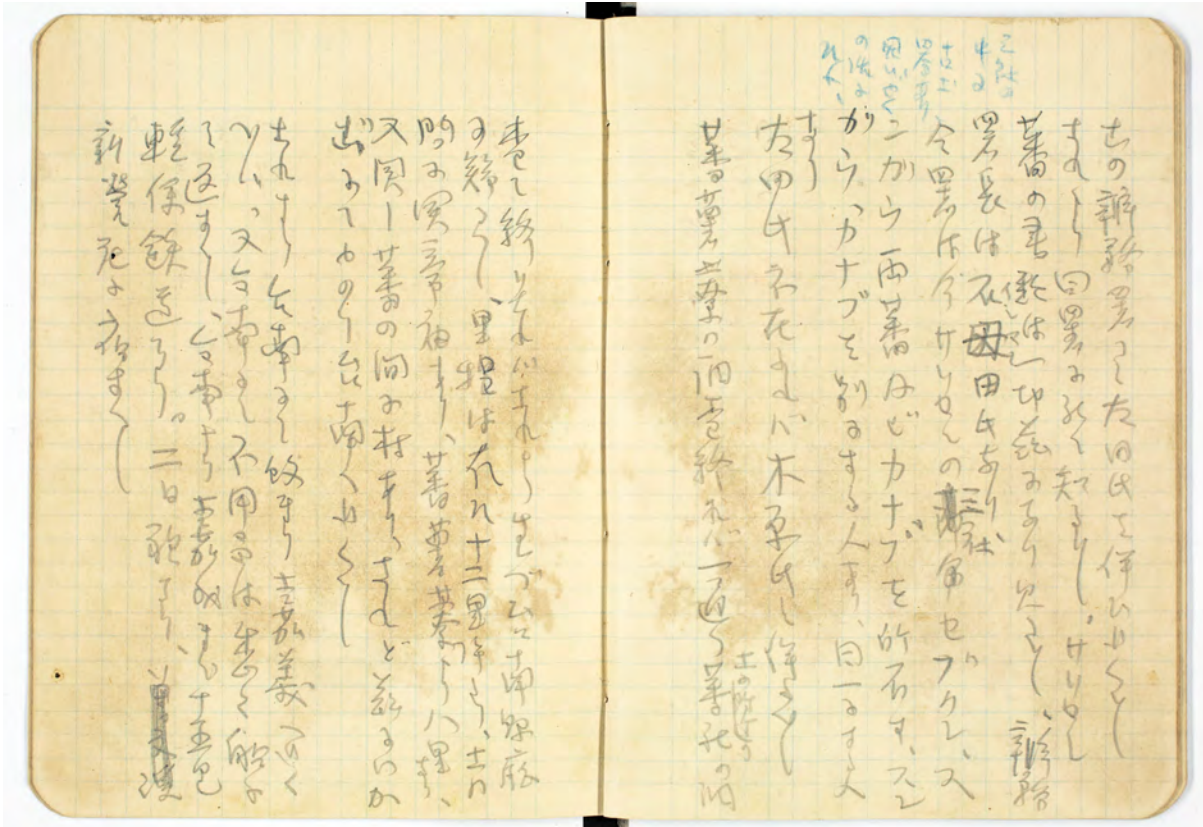
Sarisen

この男に就てベホのことを聞けば大概知るを得べし（又一里許にして藩福安あり、俗人なり）

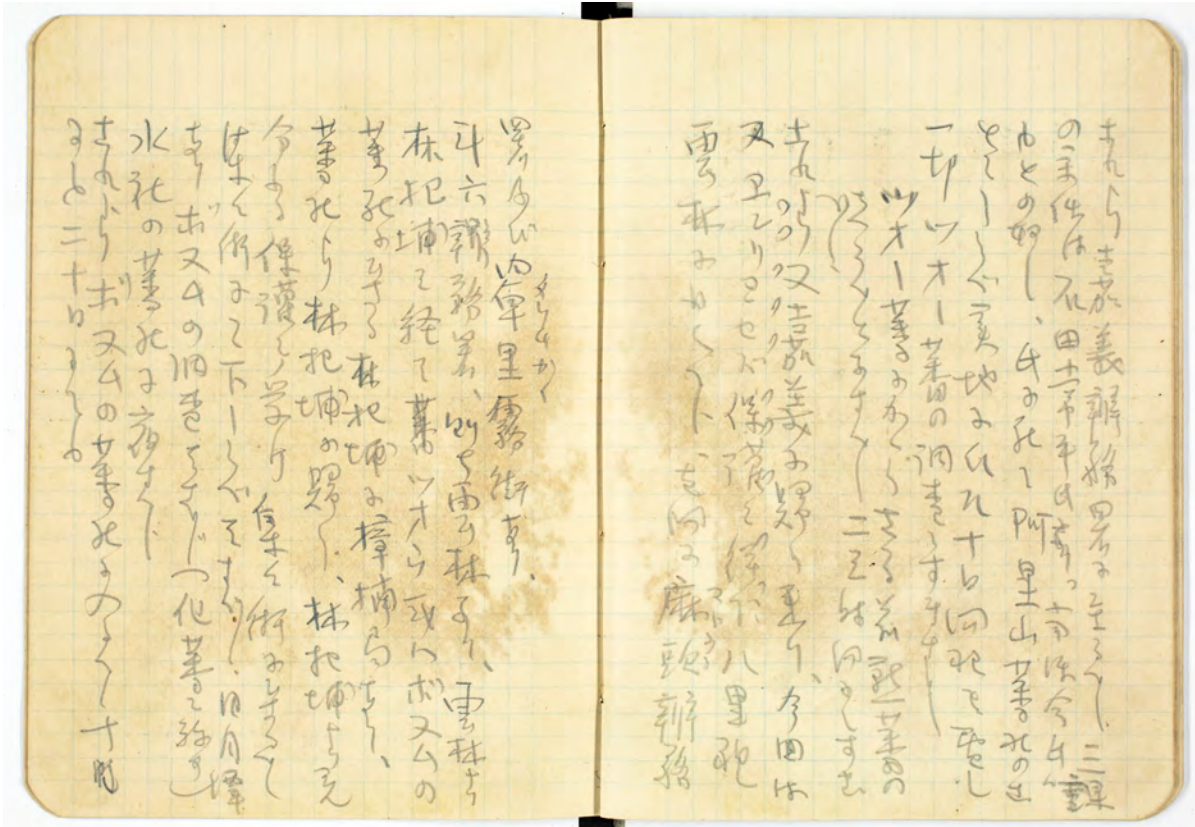
新隘藪シニアイヤウに行くべし、こゆれは平埔の村にて皆サリセン蕃の語をよくす。これより阿猴弁務署アコウの管内なり。されどこの弁務署ハ海岸の方へ四里も下れり、されハこ、に行かずして百葉社バイヤウ（田代氏の行きし所）サンチ山猪毛社リウモウに行くべし。こ、に岩の間に首棚あり、山猪毛社にナマカウの宅あり、

サリセン蕃社をぬけて口社コウシャに至るべし、こ、にナマカウの別宅あり、口社より大路関社、加納埔社カノウボに至るべし。二社は熟蕃にして加納埔社カノウボに屈きやうなる潘登雲通事あり。（平埔）ヘイポ 同人はサリセン蕃を三十戸許下山せしめ居れり、サリセン蕃をよくす、されバこれを伴ひて他社へ行くべし、

加納埔社より蕃薯寮にワザワザ行くべし、里数は凡そ四里許の平野を通じて行くべし



この弁務署にて太田氏(太田龍蔵)を伴ひ行くべし
 これより同署に就て知るべし。サリセン
 蕃の書類は一切茲にあり見るべし、弁務
 署長は石母田氏(石母田正輔)なり、
 同署は今サリセンの大部分三社セブケン、ス
 ンガウ両蕃及ビカナブを所有す、ス
 ガウ、カナブを別にする人あり、同一にする人
 あり
 「上部詳見三社の中に古土／器あり、／開びやく(開)／の話に／至れり」
 太田氏不在なれば木原氏(木原)を伴ふべし
 蕃薯寮の調査終れば一通りこの附近の蕃社の調
 査を終りたれば、これよりまづ台南県庁
 に帰るべし、里程は凡そ十二里許なり、この
 間に関帝廟あり、蕃薯寮より八里なり、
 又関一蕃の間に村あり、されど茲にいか
 ず(ここ)にてもり台南へ行くべし
 これより台南にて□まり嘉義へ行く
 べし。又台南にて不用品は悉く船に
 て返すべし、台南より嘉義まで十五里
 軽便鉄道なり。二日程なり、甯文溪
 新営庄に宿すべし



これより嘉義弁務署に至るべし。三課の主任は石田常平氏なり。尚ほ今氏ハもとの如し、氏に就て阿里山蕃社のことをしらべ実地に凡そ十日間程を費し一切ツオー蕃の調査をすすべし

ツオー蕃にかゝらざる前、熟蕃のしらべをなすべし、二、三時間にてすむべし、

これより又嘉義に帰り来り、今回は又エ。ン。リ。ヨ。セ。バ。保護を伴て八里程雲林に行くべし、其間麻頭弁務

署及び單里霧街あり。

斗六弁務署、則ち雲林なり、雲林より

林把埔を経て蕃ツオウ或ハボヌムの

蕃社に至る、林把埔に樟楠局あり、

蕃社より林把埔に帰り、林把埔より充

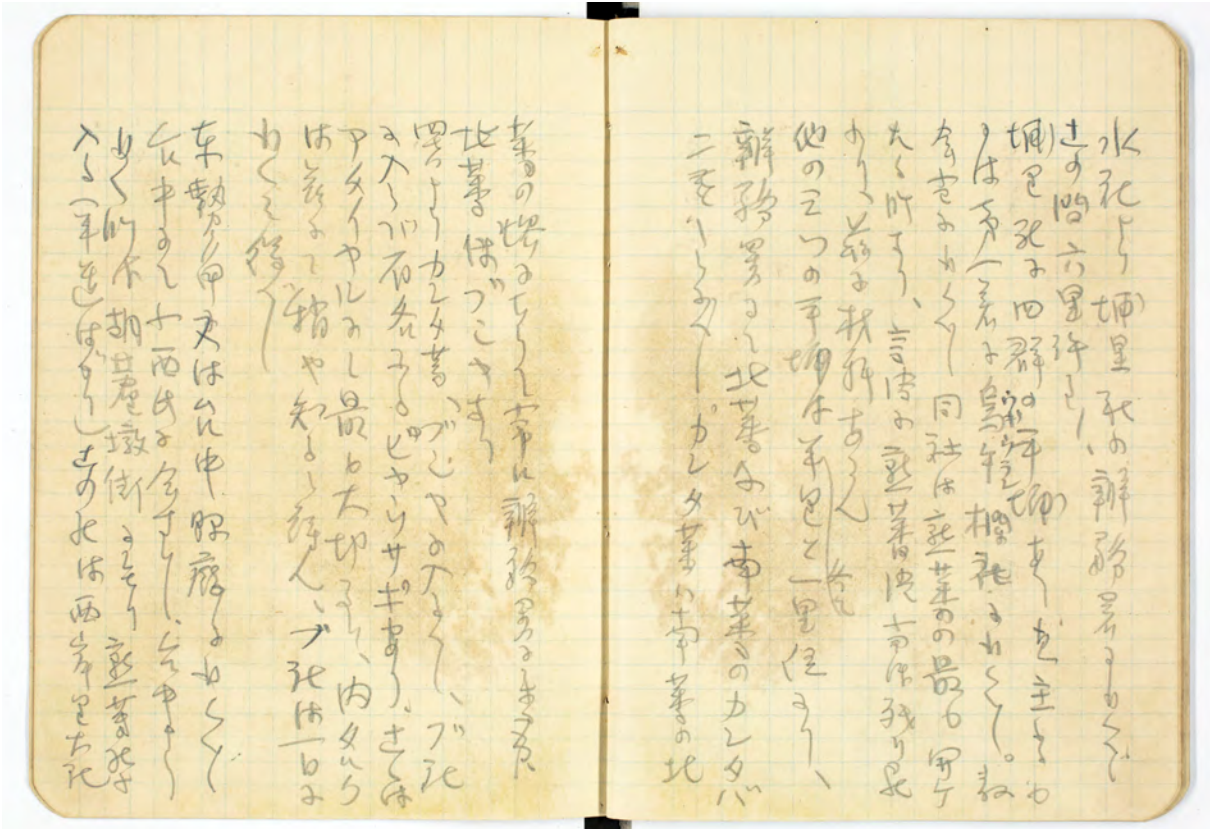
分なる保護ヲ受け集々街に至るべし

集々街にて下しらべをすべし、日月潭

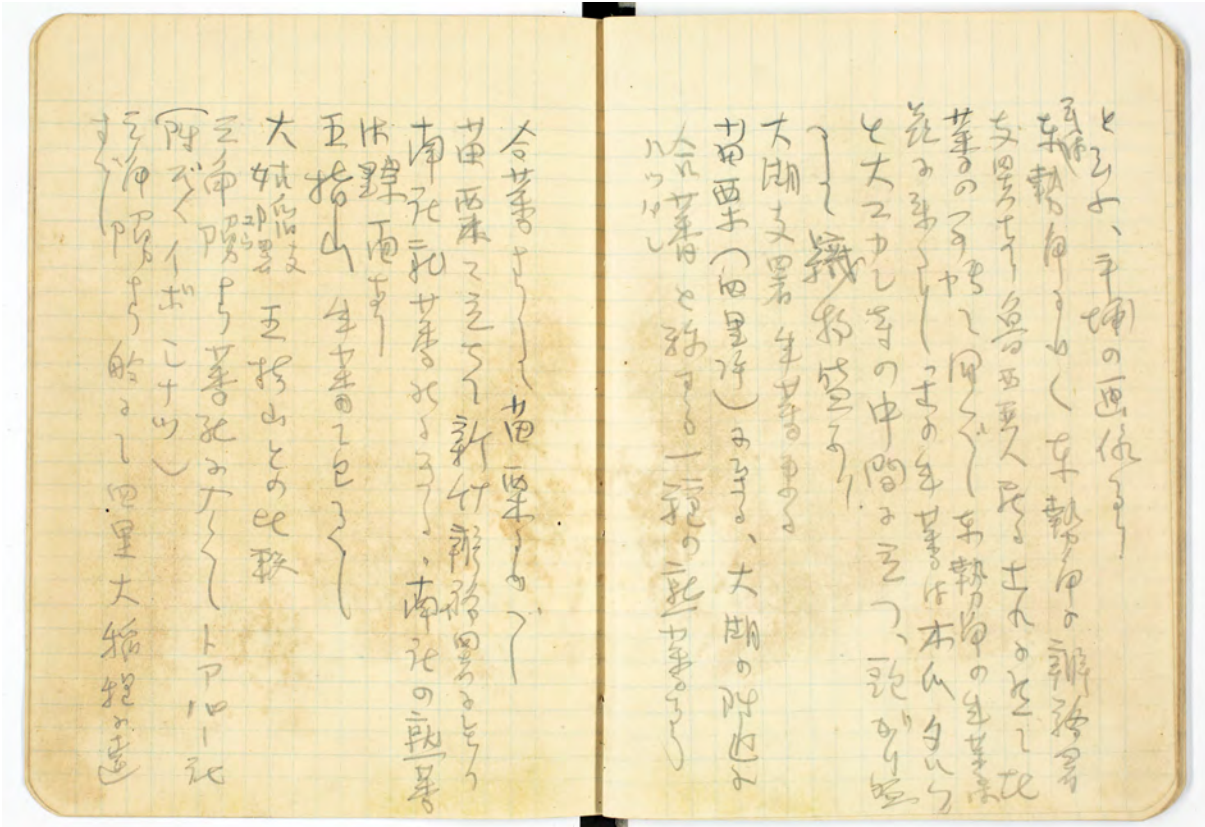
ありボヌムの調査をすべし(化蕃と称す)

水社の蕃社に宿すべし

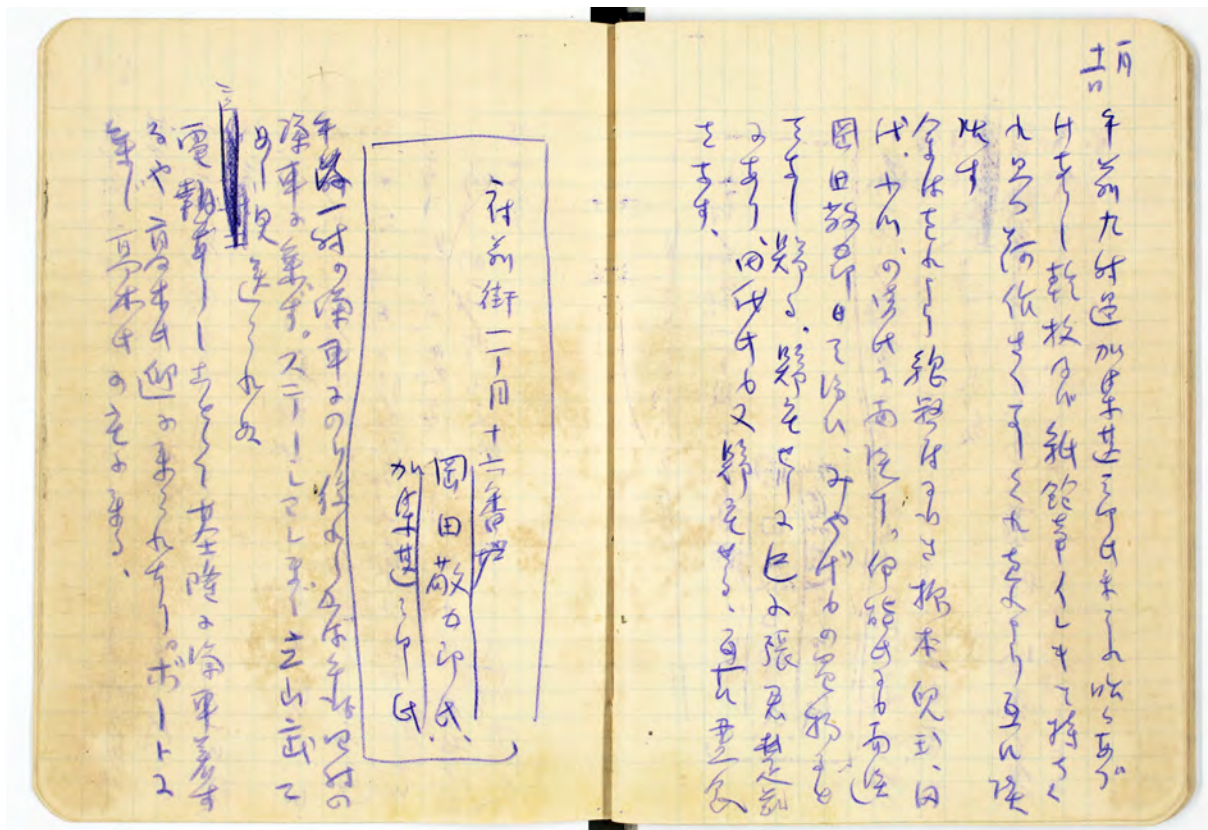
これよりボヌムの蕃社に入るべし、十日にも二十日にも



水社より埔里社の弁務署に行くべし
 この間六里許なり、
 埔里社に四群の平埔あり、其主なるも
 のは第一着に烏牛欄社ウギラシに行くべし。教
 会堂に行くべし、同社は熟蕃の最も開ケ
 たる所なり、言語に熟蕃語尚ほ残り居
 れり、茲に材料あらん
 他の三つの平埔は各々半里と一里位なり、
 弁務署にて北蕃及び南蕃のカンタバ
 ンをしらふべし。カンタ蕃ハ南蕃の北
 蕃の堺にありて常に弁務署に来るべし、
 北蕃はブンシヤなり
 署よりカンタ蕃、ブンシヤに入るへし、ブ社
 に入らバ有名なるピヤウサギあり。こゝは
 アタイヤルにて最も大切なり、内タルク
 は茲にて稍や知るを得ん、ブ社は一日に
 行くを得べし
 東勢角社又は台中県庁に行くべし
 台中にて小西氏に会すべし、台中より
 行く所は胡蘆墩街コロに至り熟蕃社に
 入る(半道ばかり)この社は西岸里大社



と云ふ、平埔の画像あり
 或は東勢角に行く、東勢角に弁務署
 支署あり魯西亜人居る、これに□^{（職）}て北
 蕃の事情を聞くべし、東勢角の生蕃は
 茲に来るべし。この生蕃は木瓜タルク
 と大コカン等の中間に立つ、頸がり盛
 にして織物盛なり、
 大湖支署生蕃来る
 苗栗（四里許）に来る、大湖の附近に
 合蕃と称する一種の熟蕃あり
 合蕃よりして苗栗に行へし
 苗栗を立ちて新竹弁務署に至り
 南庄熟蕃社に至る。南庄の熟蕃
 は黥面あり
 五指山 生蕃を見るべし
 大姑稻^{支署} 五指山との比較
 三角^隅より蕃社に入るべし、トアバー社
 （附ぞくイボシナツ）
 三角隅より船にて四里、大稻程に達
 すべし



一月十一日午前九時過加集甚三郎氏来られ昨日あづ

けありし乾板及び紙・鉛筆・インキを持ちく
れ、且つ荷作さへなしくれ其れより互に談
話す

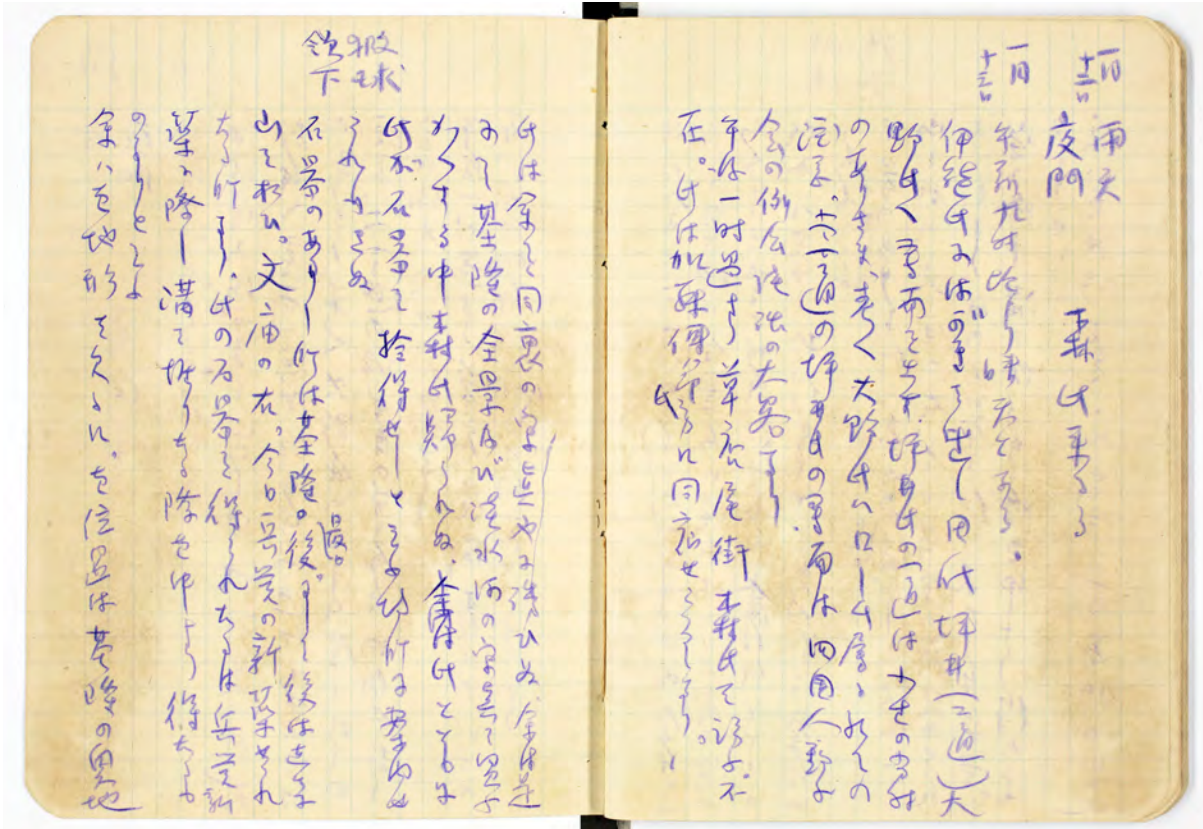
余は其れより総督府に行き柳本、兎玉、田
代、小川、の諸氏に面談す。伊能氏にも面談し
岡田敬五郎氏を訪ひ、みやげもの買物など
をなし帰る。帰宅せしに已に張君楚茲
にあり、田代氏も又帰宅せる。互に昼食
をなす、

府前街一丁目十六番戸
岡田敬五郎氏、
加集甚三郎氏、

午前午後一時の汽車にのり後れしかば午後四時の
汽車に乗ず。ステーションまで立山武二
ぬし見送られぬ

立山武二

電報ありしこと、て基隆に汽車着す
るや、高木氏迎に來られたり。ポートに
乗じ高木氏の宅に参る、



一月十二日 雨天

夜門(開カ) 森氏来る

一月十三日 午前九時頃より晴天となる。

伊能氏にはがきを出し田代、坪井(二通)、大野氏へ書面を出す。坪井氏の一通は小生の当時のありさま、考へ、大野氏ハローム層に就ての注意。尚一通の坪井氏の書面は四国人類学会の例会談話の大略なり。

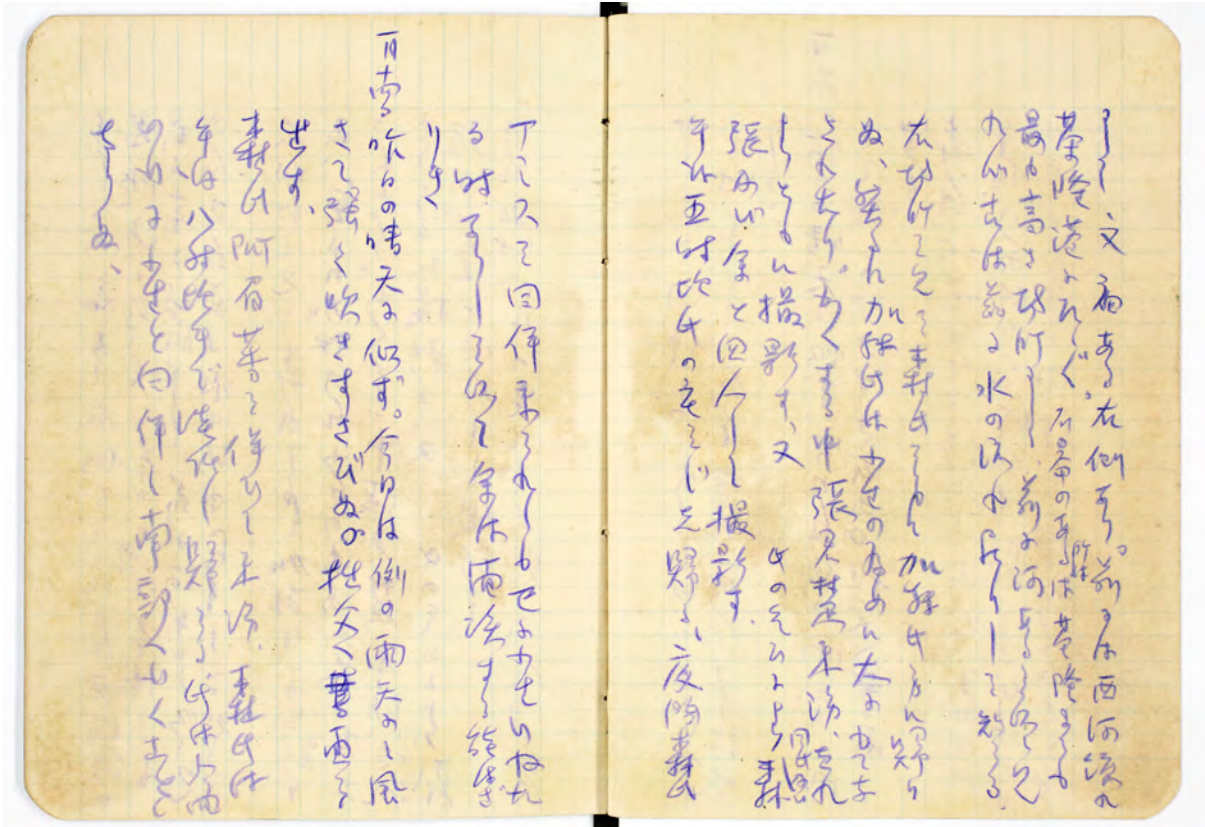
午後一時過より草店尾街森氏を訪ふ。不在。氏は加藤傳八郎氏方に同宿せらるゝなり。

獅球 領下

氏は余を同裏の写真やに誘ひぬ、余は是にて基隆の全景及び淡水河の写真を買ふかくする中森氏帰られぬ、余は氏とともに氏が石器を拾得せしと云ふ場所に案内せられ行きぬ

石器のありし所は基隆の最も後にして後は直ちに山を於ひ。文廟の右。今も兵營の新築せられたる所なり。氏の石器を得られたるは兵營新築に際し溝を掘りたる際、其中より得たるものなりと云ふ

余ハ其地形を見るに。其位置は基隆の奥地

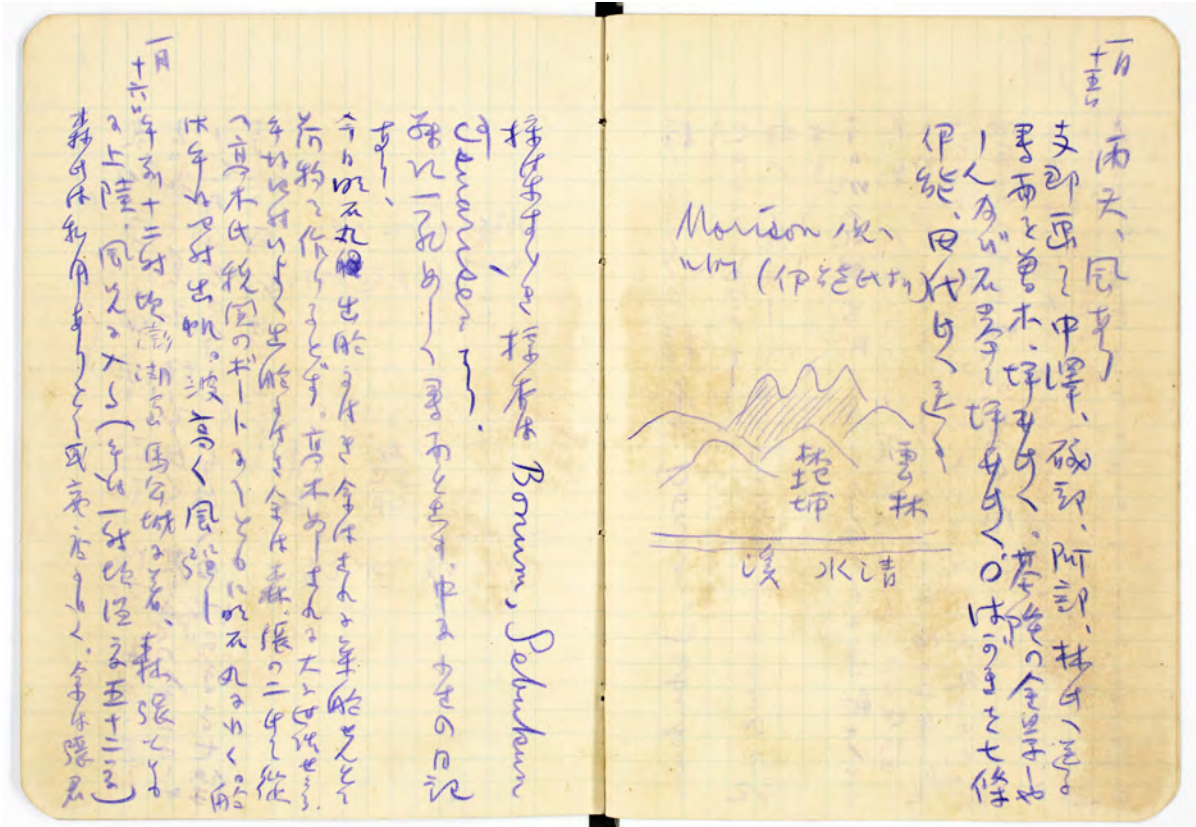


にして文廟ある右側なり。前には西河流れ
基隆港にそぐ。石器のある所は基隆にても
最も高き場所にして、前に河あるを以て見
れバ古は茲に水の流れ居りしを知らる。

右場所を見て森氏と、もに加藤氏方に帰り
ぬ、然るに加藤氏は小生の為めに大にもてな
されたり。かくする中張君楚来訪、其れ
よりともに撮影す、又 氏の乞ひにより同氏及び森
張及び余と四人して撮影す。
午後五時頃氏の宅をじし帰る、夜間森氏

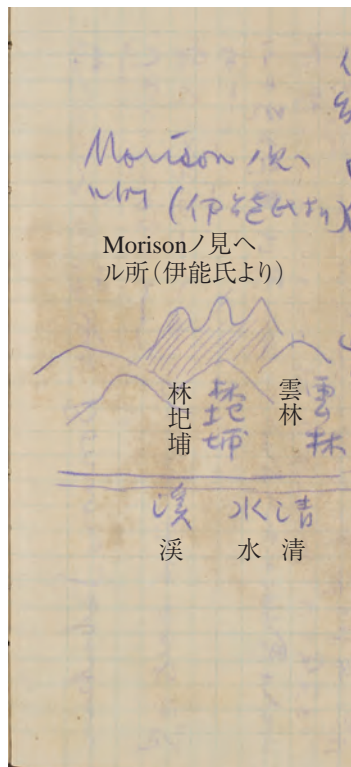
アミスを同伴来られしも、已に小生いねた
る時なりしを以て余は面談する能はざ
りき

一月十四日 昨日の晴天に似ず。今日は例の雨天にて風
さへ強く吹きすさびぬ。○拙父へ書面を
出す、
森氏阿眉蕃を伴ひて来訪。森氏は
午後八時頃まで談話し帰らる。氏は今回
の行に小生と同伴し南部へ行くこと、
なりぬ、



一月十五日 雨天、風あり

支那画を中澤、磯部、阿部、林氏へ送る
 書面を曾木、坪井氏へ。基隆の全景しや
 (真) しん及び石器を坪井氏へ。○はがきを七條
 伊能、田代氏へ送る、



採集すべき標本は Bonun, Sebukun

Tsurisen なり。

藤江一蔵ぬしへ書面を出す。中に小生の日記あり、

今日明石丸船出船に付き余はこれに乗船せんとて

荷物を作りなす。高木ぬしこれに大に世話せらる。

午後四時いよく出船に付き余は森、張の二氏を従

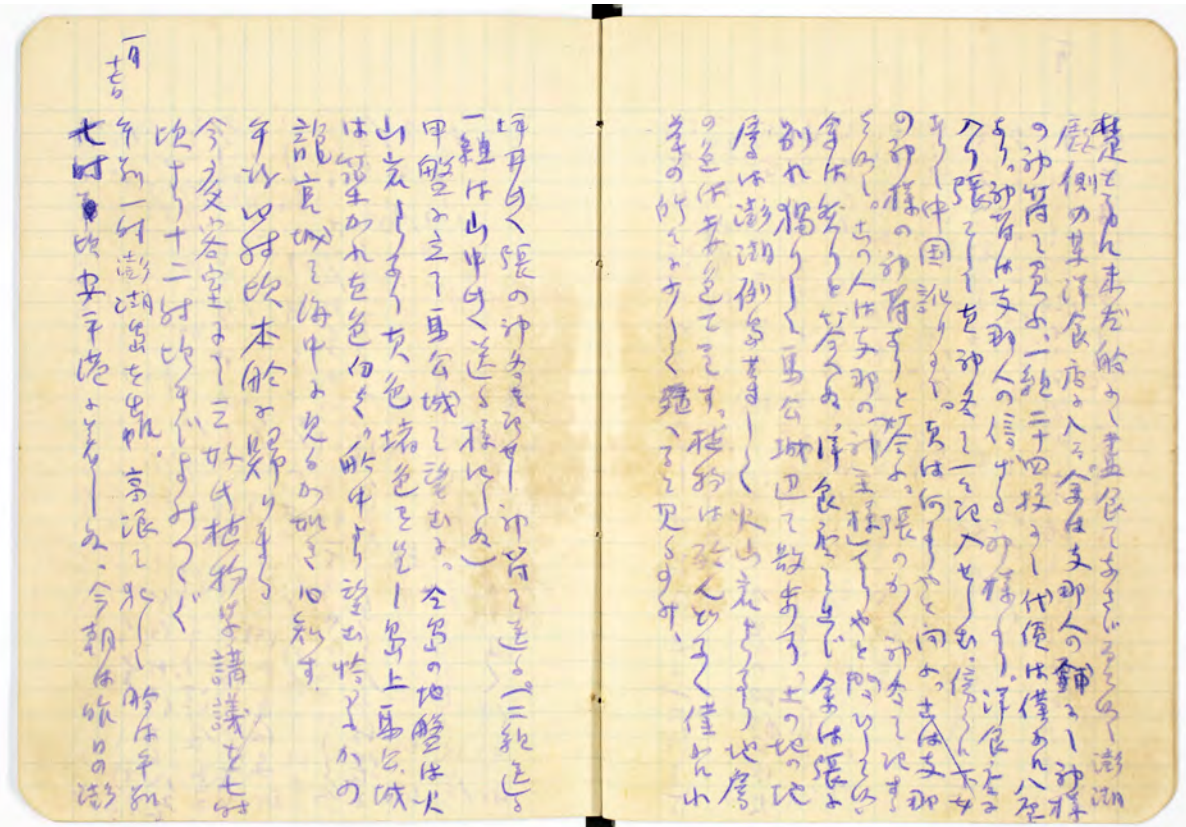
へ高木氏税関のボートにてともに明石丸に行く。船

は午後四時出帆。波高く風強し

一月十六日 午前十二時頃澎湖島馬公城に着、森・張とともに

に上陸。風呂に入る (午後一時頃温度五十二度)

森氏は私用ありとて或商店に行く。余は張君

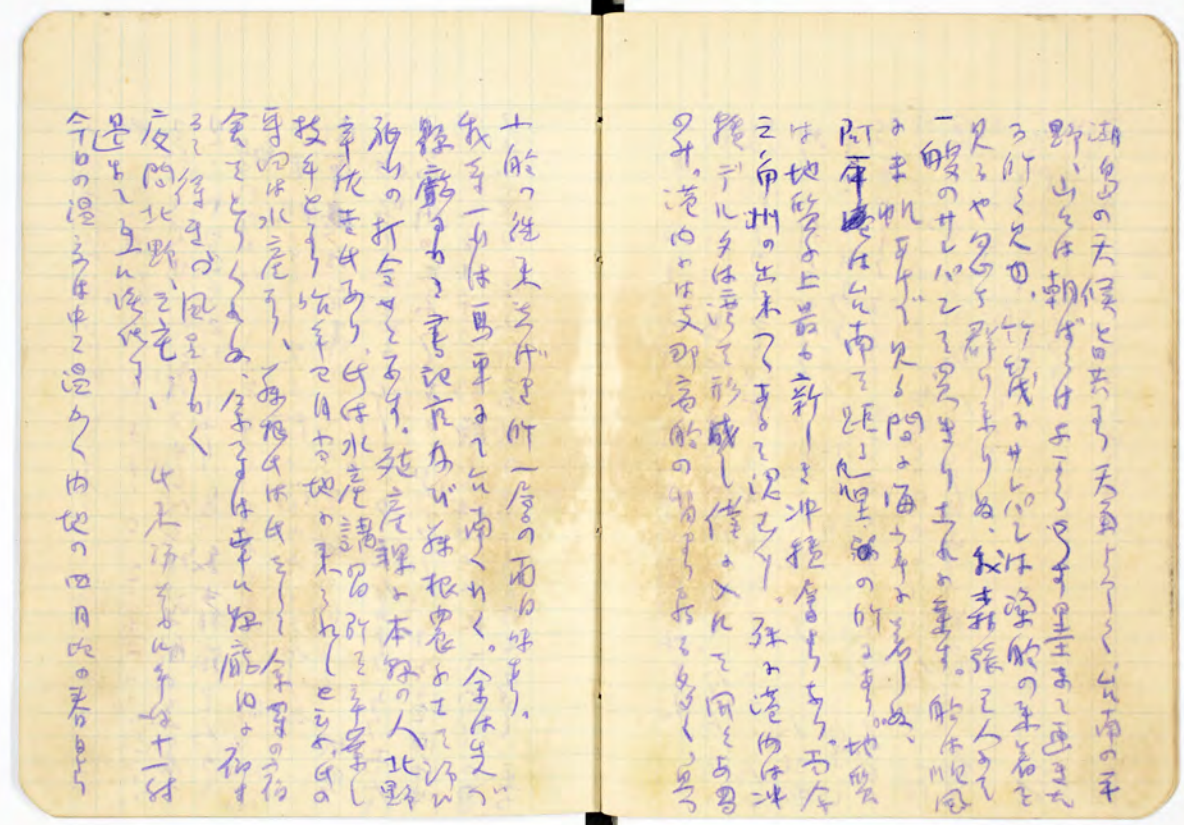


楚ととも未だ船にて昼食をなさざるを以て澎湖
 岸側の某洋食店に入る。余は支那人の舖にて神様
 の神符を買ふ。一組二十四枚にて代価は僅かに八厘
 なり。神符は支那人の信ずる神様なり。洋食店に
 入り張をして其神名を一々記入せしむ。傍らに下女
 ありて中国訛りにて。其は何なりやと問ふ。こは支那
 の神様の神符なりと答ふ。張のかく神名を記する
 を以て。この人は支那の「神主様」なりやと問ひしを以て
 余は然りと答へぬ。洋食店を出で余は張に
 別れ独りして馬公城辺を散歩す。この地の地
 層は澎湖例島等しく火山岩よりなり地層
 の色は赤色を呈す。植物は殆んどなく僅かに水
 草の所々に少しく殖へるを見るのみ、

坪井氏へ張の神名を記せし神符を送る。(二組送る)
 一組は山中氏へ送る様記しぬ)
 甲盤に立て馬公城を望むに。同島の地盤は火
 山岩よりなり其色堵色を呈し島上馬公城
 は築かれ其色白く。船中より望む、恰かもかの
 龍宮城を海中に見るが如き心知す。
 午後四時頃本船に帰り来る
 今夜客室にて三好氏植物学講義を七時
 頃より十二時頃までよみつゝく
 一月十七日 午前一時澎湖島を出帆。高浪を犯して船は午前
 七時半頃安平港に着しぬ。今朝は昨日の澎

楚ととも未だ船にて昼食をなさざるを以て澎湖
 岸側の某洋食店に入る。余は支那人の舖にて神様
 の神符を買ふ。一組二十四枚にて代価は僅かに八厘
 なり。神符は支那人の信ずる神様なり。洋食店に
 入り張をして其神名を一々記入せしむ。傍らに下女
 ありて中国訛りにて。其は何なりやと問ふ。こは支那
 の神様の神符なりと答ふ。張のかく神名を記する
 を以て。この人は支那の「神主様」なりやと問ひしを以て
 余は然りと答へぬ。洋食店を出で余は張に
 別れ独りして馬公城辺を散歩す。この地の地
 層は澎湖例島等しく火山岩よりなり地層
 の色は赤色を呈す。植物は殆んどなく僅かに水
 草の所々に少しく殖へるを見るのみ、

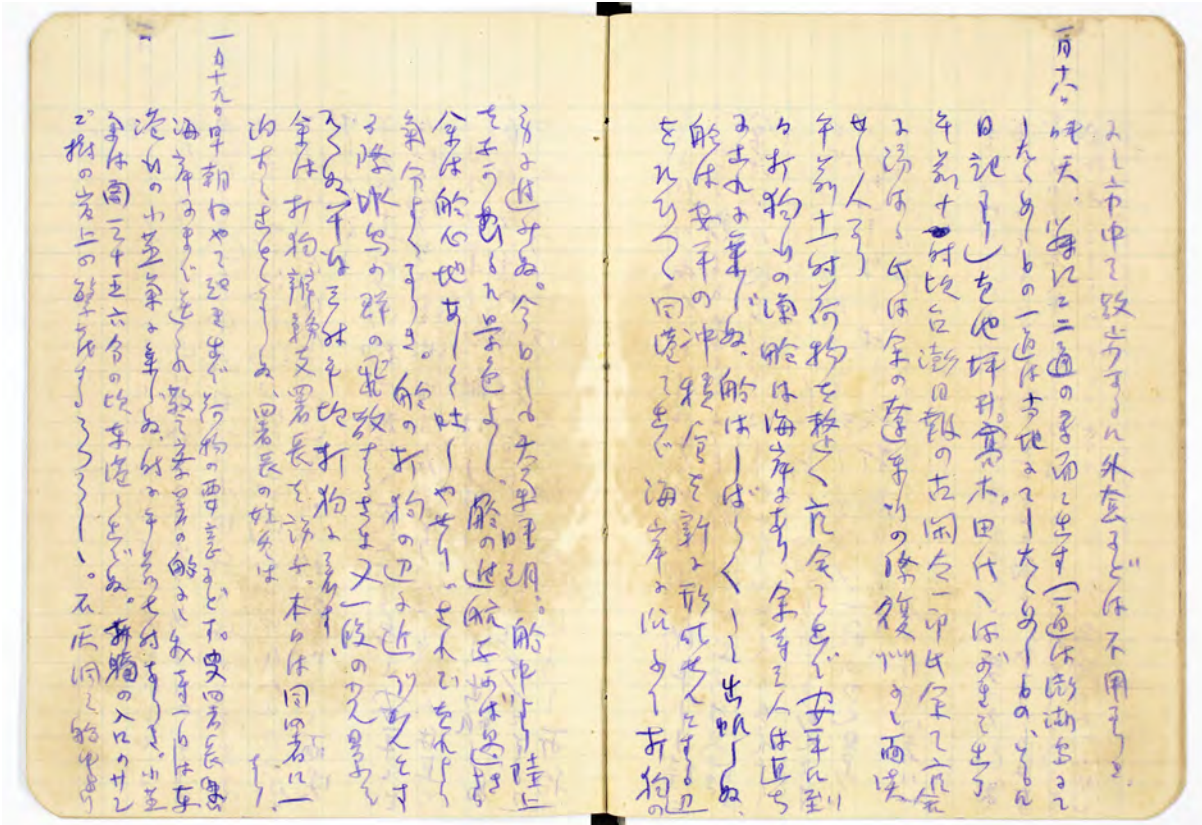
坪井氏へ張の神名を記せし神符を送る。(二組送る)
 一組は山中氏へ送る様記しぬ)
 甲盤に立て馬公城を望むに。同島の地盤は火
 山岩よりなり其色堵色を呈し島上馬公城
 は築かれ其色白く。船中より望む、恰かもかの
 龍宮城を海中に見るが如き心知す。
 午後四時頃本船に帰り来る
 今夜客室にて三好氏植物学講義を七時
 頃より十二時頃までよみつゝく
 一月十七日 午前一時澎湖島を出帆。高浪を犯して船は午前
 七時半頃安平港に着しぬ。今朝は昨日の澎



湖島の天候と異なり天気よろしく。台南の平野、山々は朝ぼらけなから烏す墨にて画きたる所々見ゆ。竹筏にサンパンは汽船の来着を見るや忽ち群り来りぬ。我・森・張三人にて一艘のサンパンを買きりこれに乗す。船は順風（意）にま帆あげて見る間に海岸に着しぬ、阿平港は台南を距る凡そ一里弱の所にあり。地質は地質学上最も新しき沖積層よりなり。尚余三角洲の出来つゝあるを認むべし。殊に港内は沖積デルタは湾を形成し僅に入口を開くあるのみ。港内には支那商船の留まり居る多く。且つ

小船の往来しげき所一層の面白味あり。我等一行は馬車にて台南へ行く。余は先づ県庁に行き書記官及び藤根農学士を訪ひ旅行の打合せをなす。殖産課に本県の人北野宇佐吉氏あり。氏は水産講習所を卒業し技手となり昨年四月当地に來れしと云ふ。氏の専門は水産なり、藤根氏は氏をして余等の宿舎をとりくれぬ、余等は幸に県庁内に宿するを得、まづ風呂に行く。夜間北野、三宅 氏來訪ともに午後十一時過まで互に談話す、今日の温度は中々温かく内地の四月頃の春日より

湖島の天候と異なり天気よろしく。台南の平野、山々は朝ぼらけなから烏す墨にて画きたる所々見ゆ。竹筏にサンパンは汽船の来着を見るや忽ち群り来りぬ。我・森・張三人にて一艘のサンパンを買きりこれに乗す。船は順風（意）にま帆あげて見る間に海岸に着しぬ、阿平港は台南を距る凡そ一里弱の所にあり。地質は地質学上最も新しき沖積層よりなり。尚余三角洲の出来つゝあるを認むべし。殊に港内は沖積デルタは湾を形成し僅に入口を開くあるのみ。港内には支那商船の留まり居る多く。且つ小船の往来しげき所一層の面白味あり。我等一行は馬車にて台南へ行く。余は先づ県庁に行き書記官及び藤根農学士を訪ひ旅行の打合せをなす。殖産課に本県の人北野宇佐吉氏あり。氏は水産講習所を卒業し技手となり昨年四月当地に來れしと云ふ。氏の専門は水産なり、藤根氏は氏をして余等の宿舎をとりくれぬ、余等は幸に県庁内に宿するを得、まづ風呂に行く。夜間北野、三宅 氏來訪ともに午後十一時過まで互に談話す、今日の温度は中々温かく内地の四月頃の春日より



にて市中を散歩するに外套などは不用なりき。

一月十八日 晴天。藤江二二通の書面を出す（一通は澎湖島にて

した、めしもの、一通は当地にてした、めしもの、ともに

日記なり）其他坪井。高木。田代へはがきを出す

午前十時頃台澎日報の古閑太郎氏、余を官舎

に訪はる、氏は余の遼東行の際復州にて面談

せし人なり

午前十一時荷物を整へ官舎を出で安平に到

る、打狗行の汽船は海岸にあり、余等三人は直ち

にこれに乗じぬ、船はしばらくして出帆しぬ、

船は安平の沖積層を新に形成せんとする辺

をそひつ、同港を出で、海岸に沿ふて打狗の

方に進みぬ。今日しも天気晴朗。船中より陸上

をな^(眺)かぬむるそ景色よし。船の進航なれば過ぎより

余は船心地あしく吐し^(海)やせり。されど其れより

気分よくなりき。船の打狗の辺に近づかんすとす

る際、水鳥の群の飛散するさま又一段の光景を

そへぬ。午後三時半頃打狗に着す、

余は打狗弁務支署長を訪ふ。本日は同署に一

泊すること、なりぬ、署長の姓名は なり。

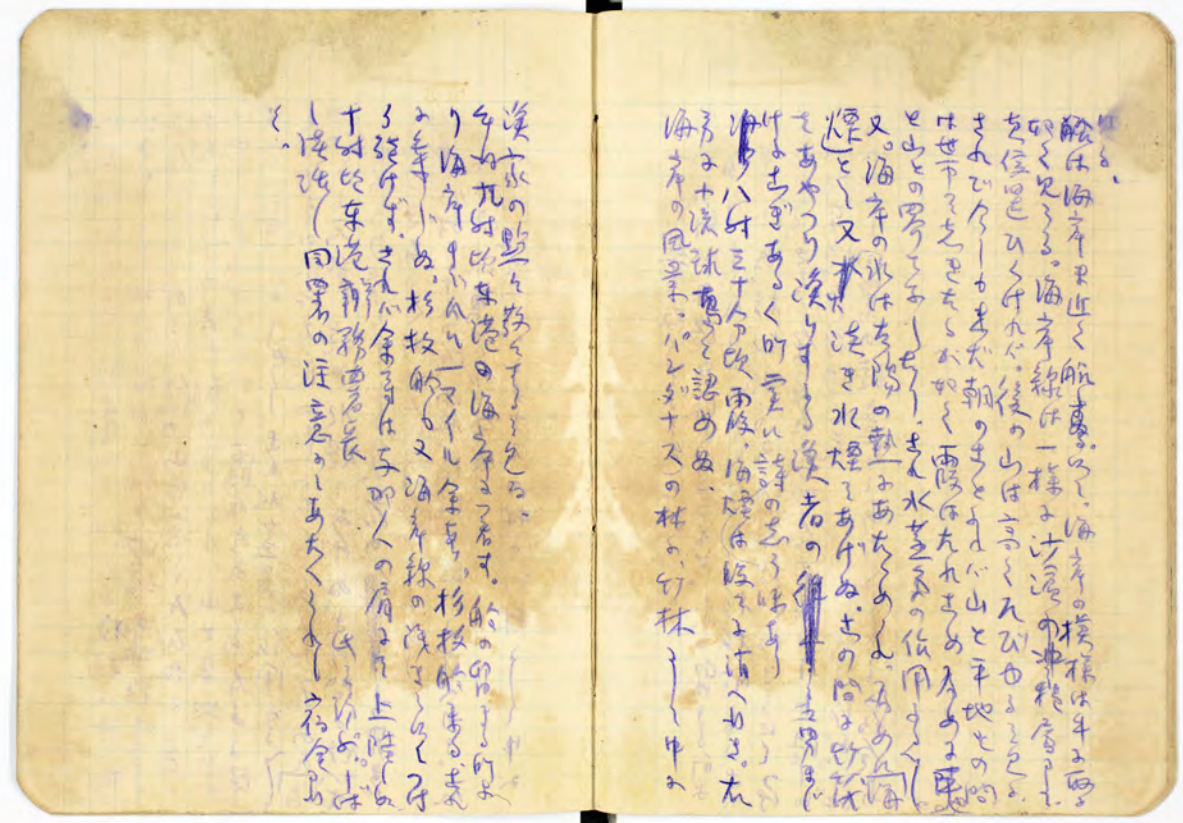
一月十九日 早朝ねやを起き出で荷物の要意などす。支署長に

海岸にまで送られ警察署の船にて我等一行は東

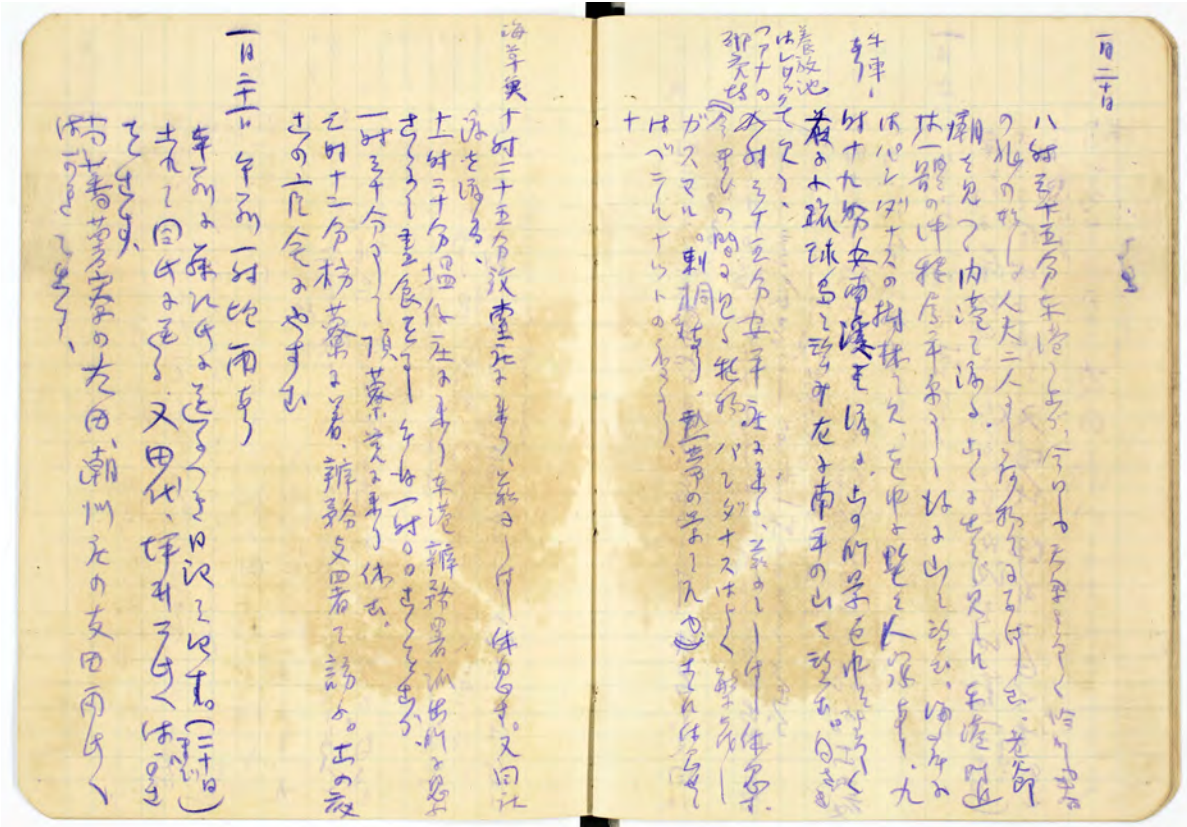
港行の小蒸気に乗じぬ。時に午前七時なりき。小蒸

気は同三十五、六分の頃東港を出でぬ。打狗の入口のサン

ゴ樹の岩上の繁茂するうつくし、石灰洞を船中より



見る。
 船は海岸^(側)ま近く船を以て。海岸の模様は手に取る
 如く見うる。海岸線は一樣に沙浜^(側)に於ての沖積層にして。
 其位置ひくければ。後の山は高くそびゆるを見る。
 されど今しも未だ朝のことなれば山と平地との間
 は帯をしきたるが如く霞はたれこめ、為めに平地
 と山との界をなしたり。これ水蒸気的作用なるべし。
 又。海岸の水は太陽の熱にあたゝめられ。為めに「海
 煙」とて又水蒸き水煙をあげぬ。この間に竹筏
 をあやつり漁りすなる漁者の往來する勇まし
 けるこぎあるく所実に詩のしう味あり^(趣)
 海八時三十分頃霞。海煙は段々に消へ行き。右
 方に小琉球島を認めぬ。
 海岸の風景。パンダナスの林に、竹林にして中に
 漁家の点々散々するを見る。
 午後九時頃東港^(側)の海岸に着す。船の留まる所よ
 り海岸まで凡そ一マイル余あり。杉板船来る、これ
 に乗じぬ。杉板船も又海岸線の浅きを以てつけ
 る能はず。されば余等は支那人の肩にて上陸しぬ
 十時頃東港弁務署長 氏を訪ふ。しば
 し談話し同署の注意にてあたへられし宿舎に行
 く。



一月二十日

八時三十五分東港を出づ。今日しも天気よろしく恰かも春の兆の如し。人夫二人にて荷物を(担)になはしむ。老爺廟を見つ、内港を渡る。こゝに出で、見るに東港附近は一体の沖積層平原にして後に山を望む。海岸にはパンダナスの樹林を見、其中に点々人家あり。九時十九分安南溪を渡る。この所景色中々よろしく右に小琉球島を望み左に南平の山を望む。白さ(霧)を見る。

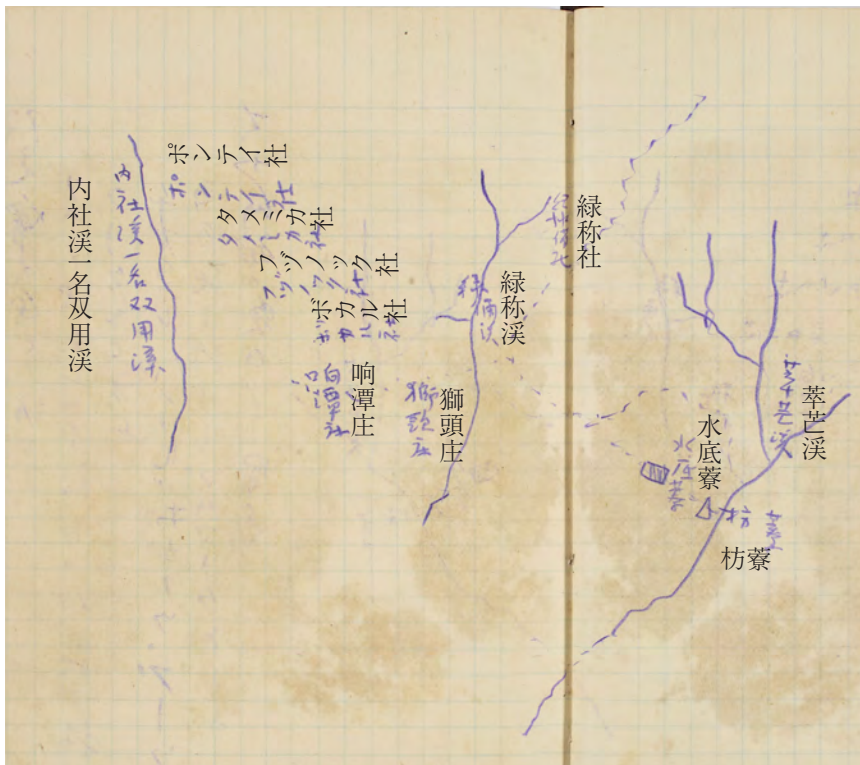
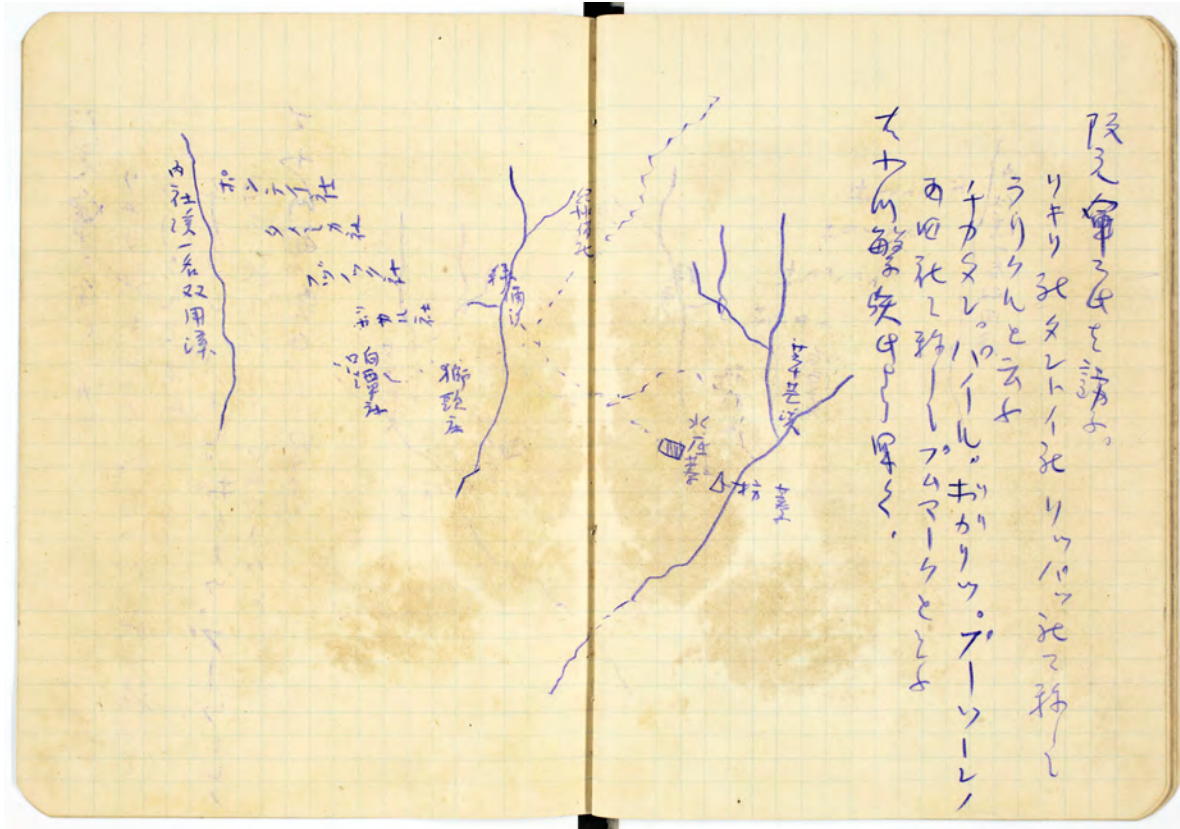
「牛車(上部)あり、／養放池／はレクック／ファナの／研究場」九時三十五分安平庄に来る、茲にてしばし休息す。《今までの間に見る植物。パンダナスはよく繁茂しガスマル。刺桐等あり。熱帯の景を(遠)ぞゆ》こゝに休息せしはベテルナツトの店なり、十

海草魚 十時二十五分放索庄に来り、茲にしはし休息す。又同庄渡を渡る、

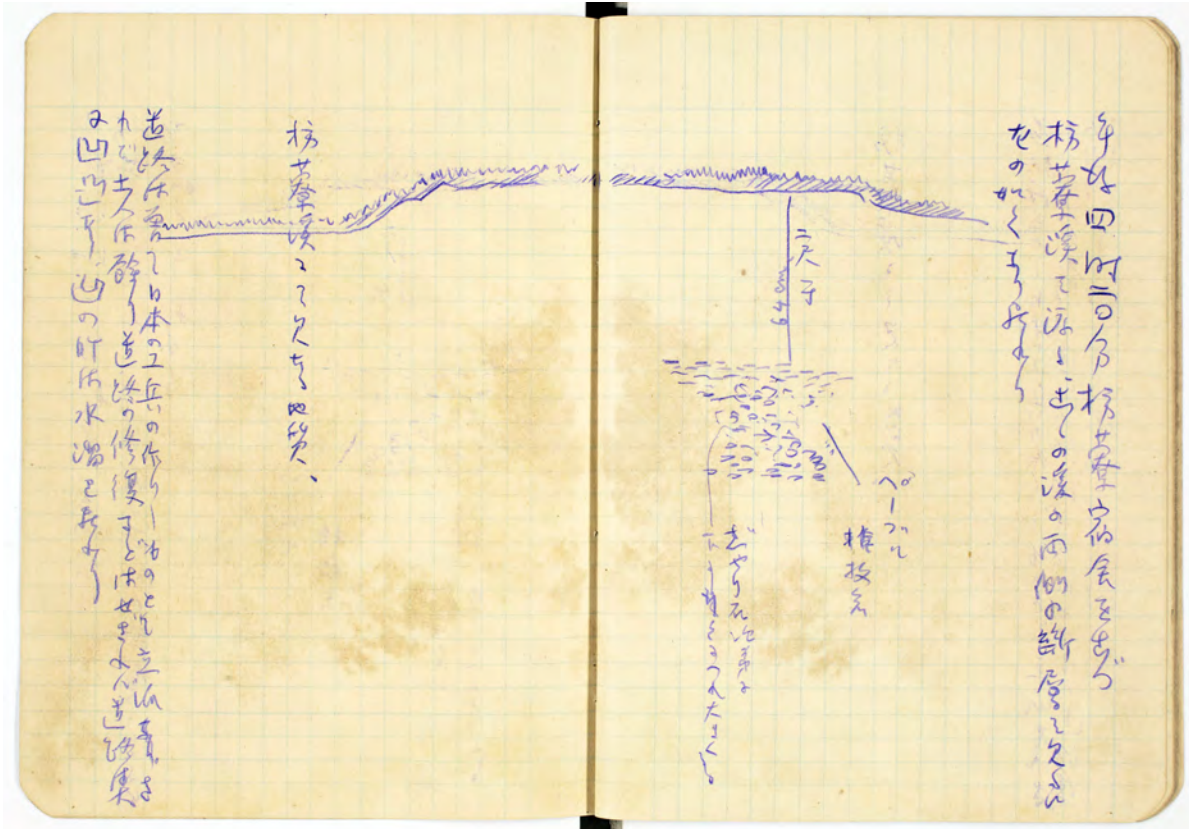
十一時二十分塹仔庄に来り東港弁務署派出所に息ふこゝにて昼食をなし午後一時〇〇こゝを出づ、一時三十分にして頂寮營に来り休む。三時十二分枋寮に着、弁務支署を訪ふ。この夜の官舎にやすむ

一月二十一日午前一時頃雨あり

午前に藤江氏に送るべき日記を記す。(二十日)までこれを同氏に送る、又田代、坪井二氏へはがきを出す、尚蕃薯寮の太田、潮州庄の友田(友田龍蔵)両氏へはがきを出す、



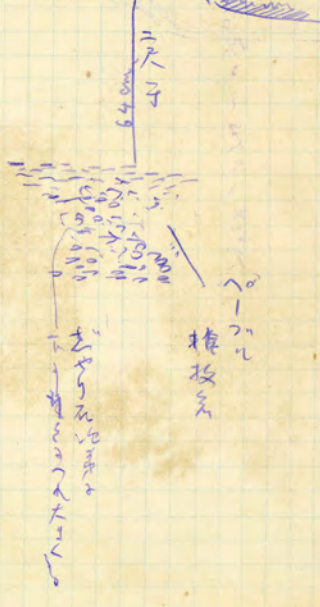
阪元軍二氏を訪ふ。
 リキリ社 タントイ社 リツパツ社を称して
 ラリクル社と云ふ
 チカタン。パイル。ボガリツ。プーソーレノ
 の四社を称してプムマークと云ふ
 右小川繁矢氏より聞く。



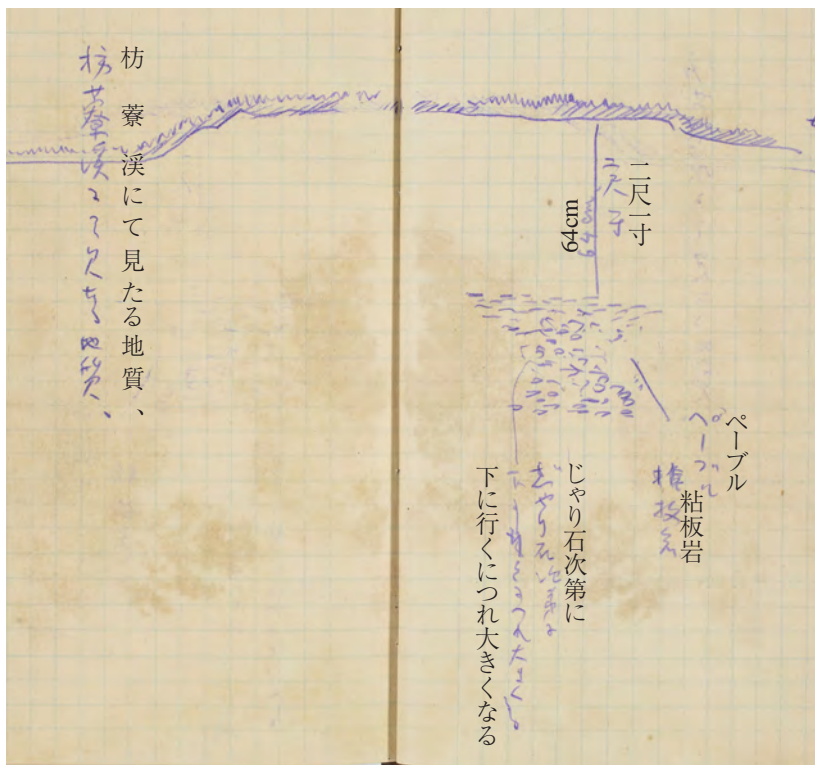
午後四時三十分枋藁宿舎を出づ
枋藁溪を渡り、この溪の両側の断層を見るに
左の如くなり居れり

道路は曾て日本の工兵の作りしものと立派なり。されど土人は余り道路の修復などはせざれば道路は大に凹凸なり。凹の所は水溜り居れり

枋藁溪にて見たる地質、
枋藁溪にて見たる地質、

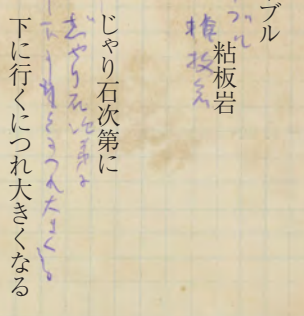


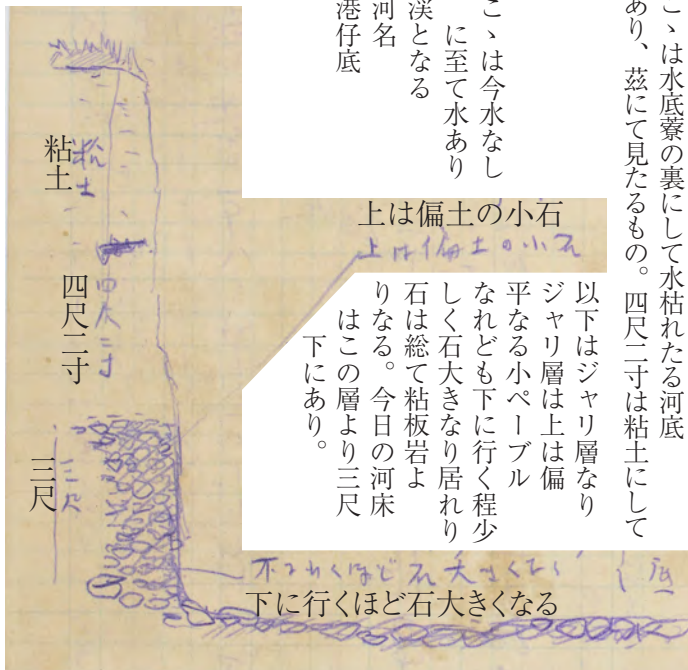
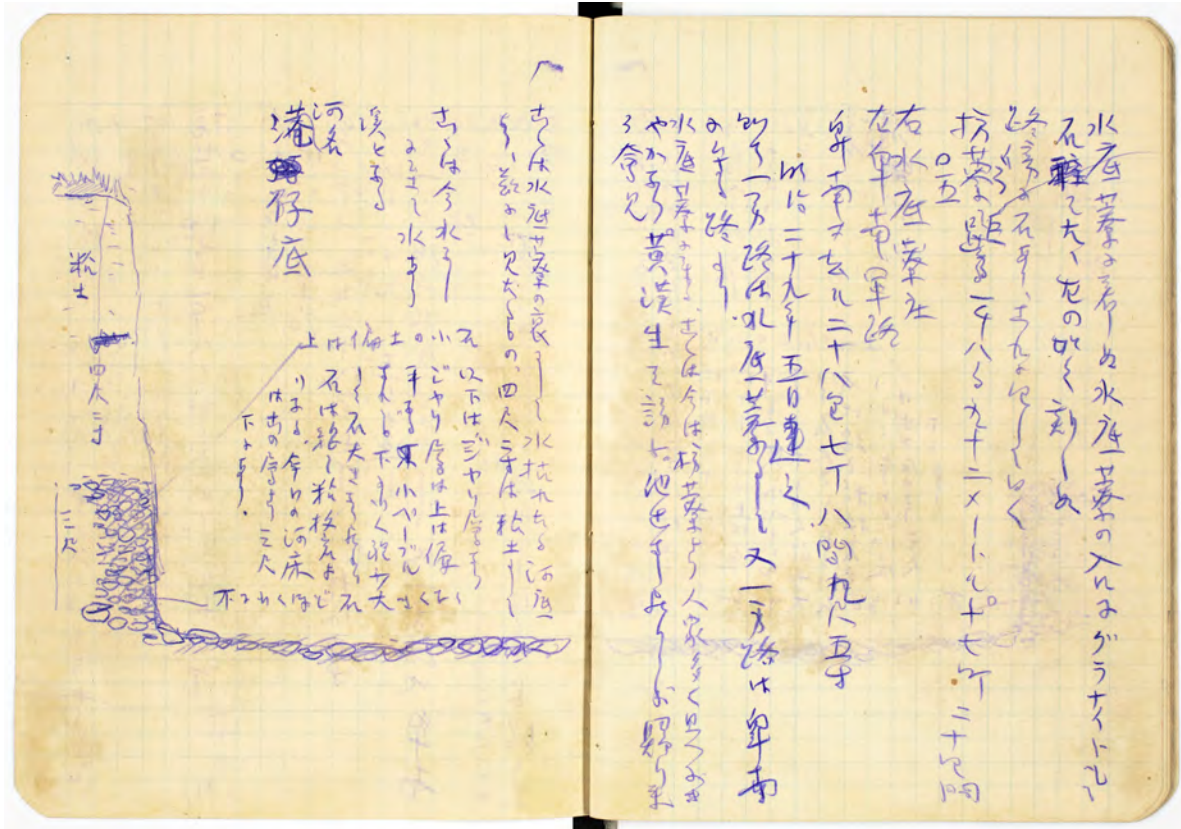
午後四時二〇分枋藁宿舎を出づ
枋藁溪を渡る、この溪の両側の断層を見るに
左の如くなり居れり

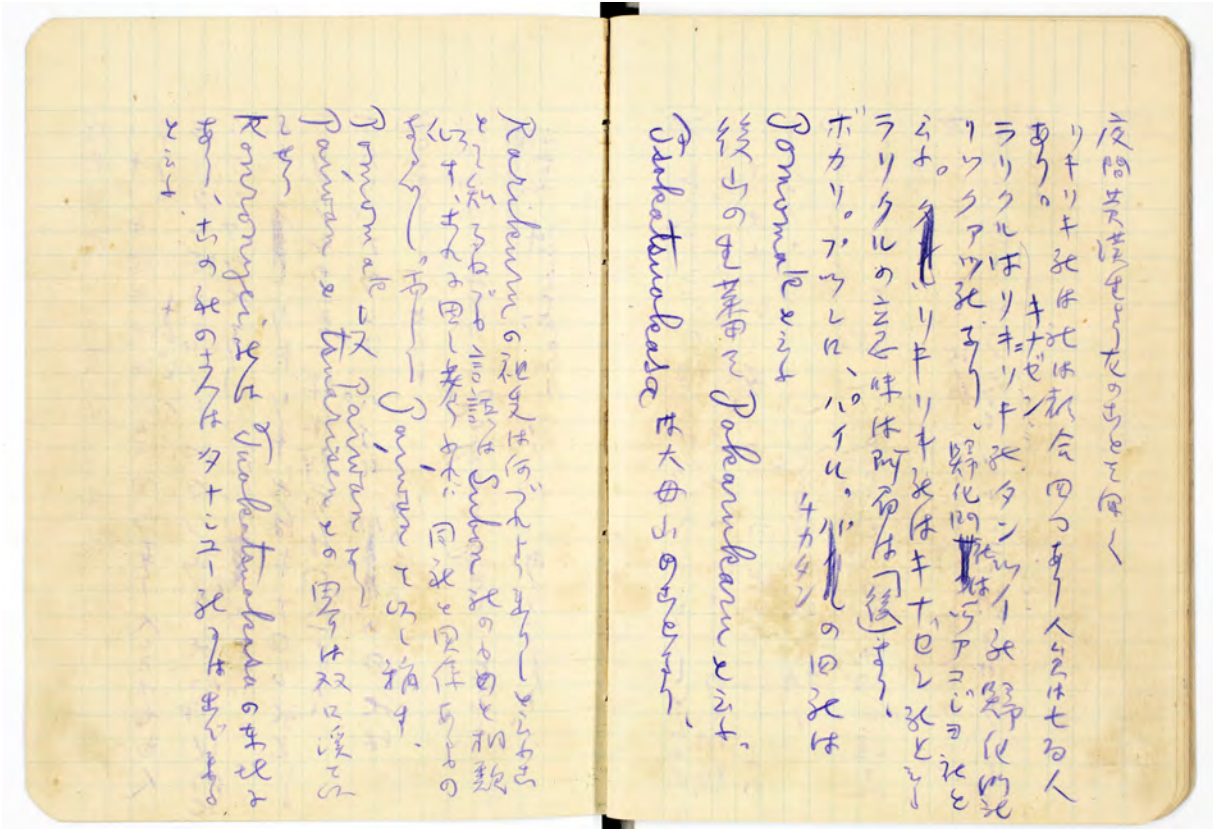


枋藁溪にて見たる地質、
枋藁溪にて見たる地質、

道路は曾て日本の工兵の作りしものと立派なり。されど土人は余り道路の修復などはせざれば道路は大に凹凸なり。凹の所は水溜り居れり





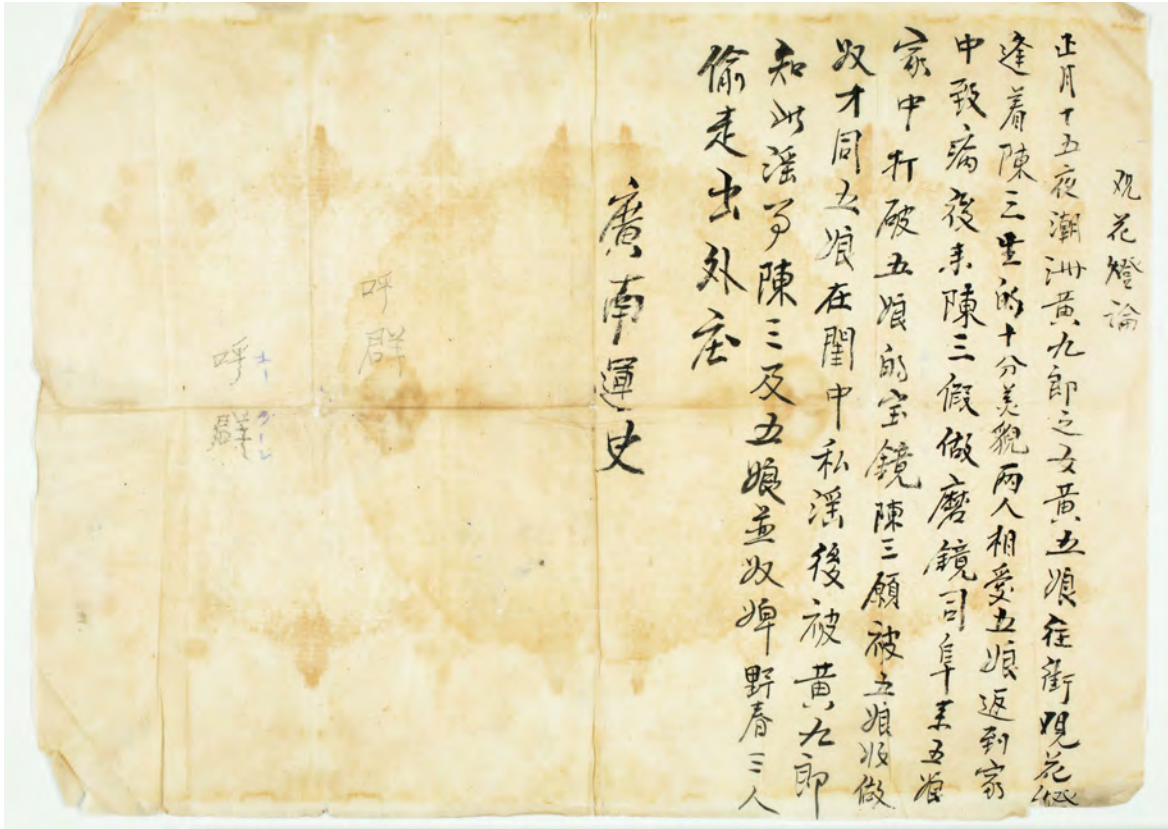


夜間黄漢生より左の社を聞く
 リキリキ社は都合四つあり人員は七百人あり。
 キナゼン

ラリクルはリキリキ社、タンツイ社、帰化門社
 リツクアツ社なり。帰化門社はツアコジヨ社と
 云ふ。タリキリキ社はキナゼン社と云ふ
 ラリクルの意味は阿眉は「後」なり、
 ボカリ。プツンロ、パイル。ポイルチカタンの四社は
 Pomoma^kと云ふ

後山の生蕃を Pokanukaru と云ふ。
 Tsakotsuokasa は大母山のことなり。

Raikuru の祖先は何じれより来りしと云ふ
 とを知らねども、言語は Subon 社のものと相類
 似す、これに因て考ふれば同社と関係あるもの
 なるべし。而して Paiwan を以て称す、
 Pomoma^k も又 Paiwan なり
 Paiwan と tsuarisen との界は双口溪を以
 てせり
 Komonyei 社は Tuakatsukasa の東北に
 あり、この社の土人はタナシユー社には出で来る
 と云ふ。



観花燈論

正月十五夜潮洲黄九郎之女黄五娘往街観花燈
 逢着陳三生的十分美貌兩人相愛五娘返到家
 中致病疫來陳三假做磨鏡司阜菜五娘
 家中打破五娘的宝鏡陳三願被五娘收做
 双才同去娘在閨中私淫後被黄九郎
 知此淫事陳三及五娘並双婢野春三人
 偷走出外庄

廣南運史

呼群

呼群

(挿入紙)

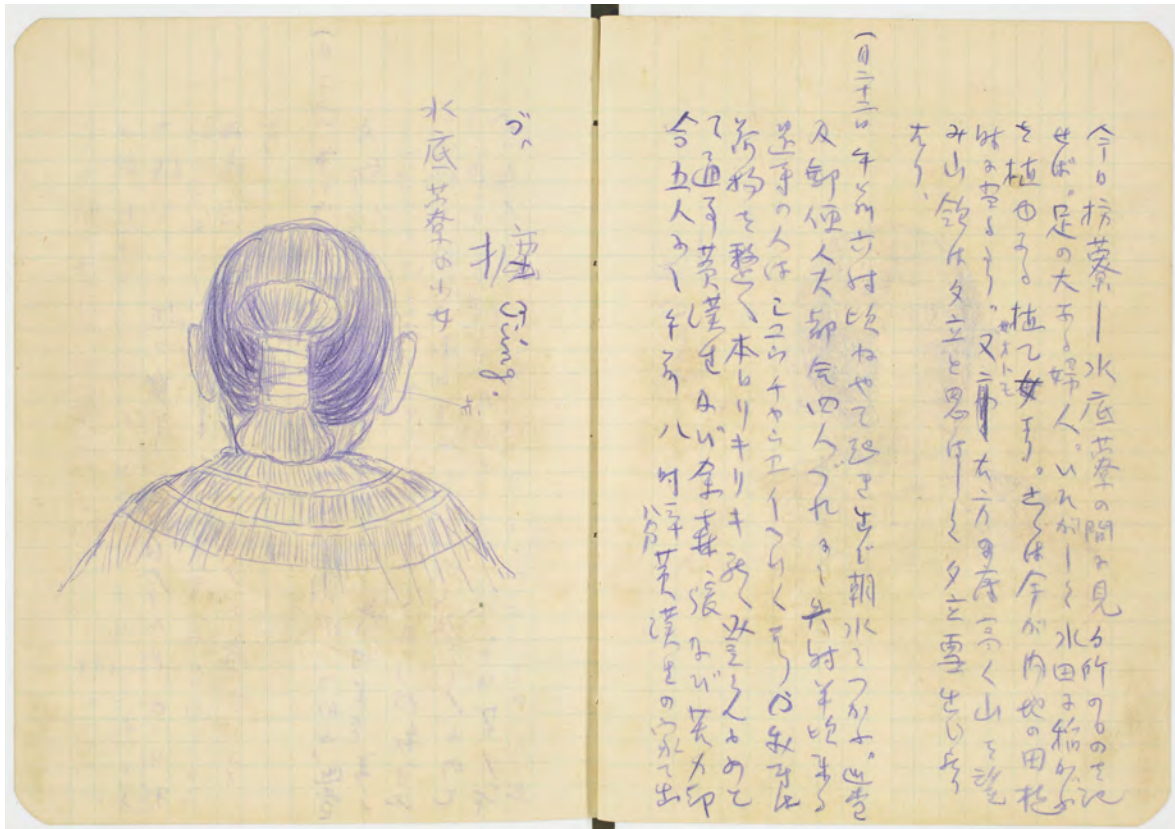
観花燈論

正月十五夜潮洲黄九郎之女黄五娘往街観花燈
 逢着陳三生的十分美貌兩人相愛五娘返到家
 中致病疫來陳三假做磨鏡司阜菜五娘
 家中打破五娘的宝鏡陳三願被五娘收做
 双才同去娘在閨中私淫後被黄九郎
 知此淫事陳三及五娘並双婢野春三人
 偷走出外庄

廣南運史

「呼群」

呼群

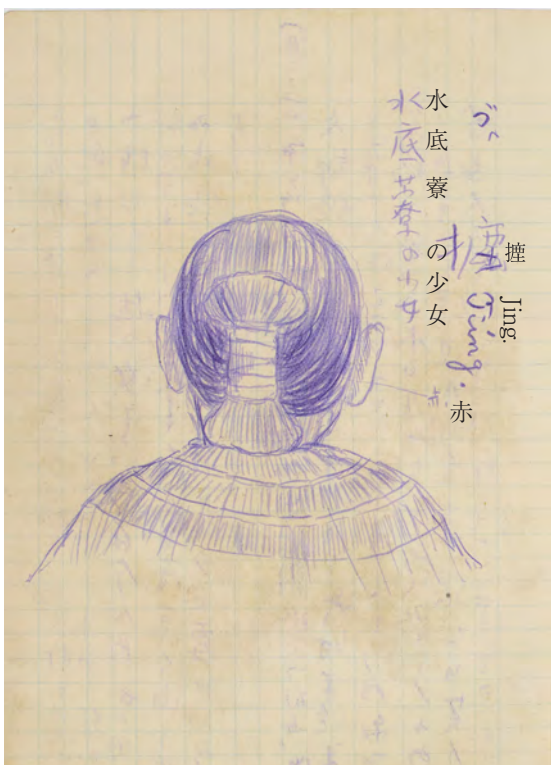


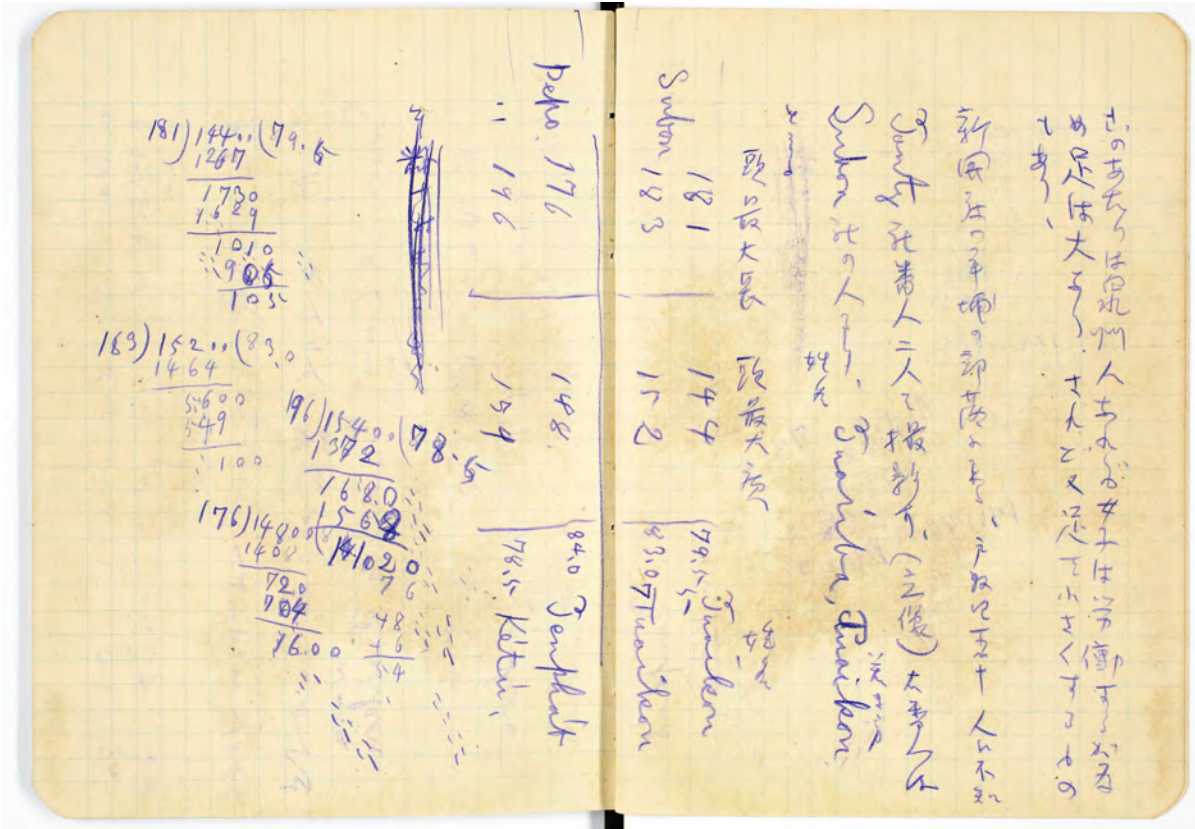
一月二十二日午前六時頃ねやを起き出で朝水をつかふ。巡査

今日枋藪——水底藪の間に見る所のものを記せば。足の大きな婦人。いそがしく水田に稲かぶを植ゆるる植乙母女なり。こゝは今が内地の田植時に当るなり。又聳く右方には高く山を望み山嶺は夕立と思はしく、夕立雪出で居りたり、

及郵便人夫都合四人づれにて六時半頃来る是等の人はシユウチヤンエイへ行くなり、○我等は荷物を整へ本日リキリキ社へ登らんものとて通事黄漢生及び余・森・張及び苦力都合五人にて午前八時^{三十分}黄漢生の家を出

づ、

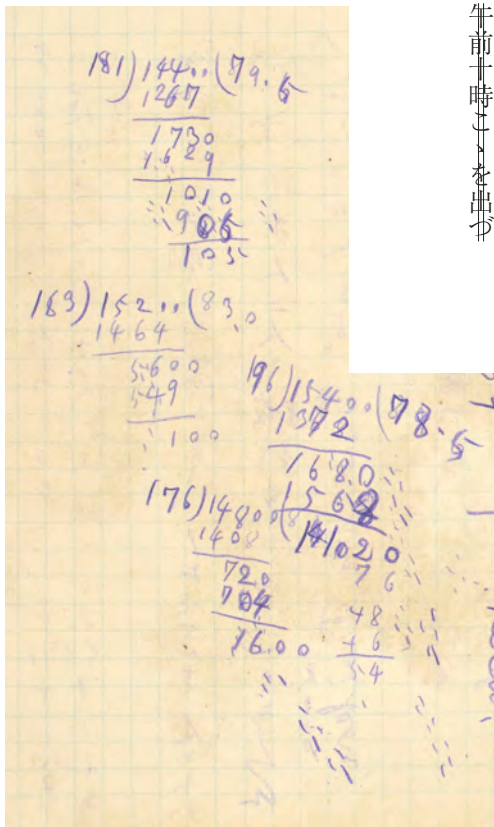




このあたりは泉州人なれども女子は労働するが為
め足は大なり、されど又足を小さくするもの
もあり、
新開庄の平埔の部落に来る、戸数四、五十、人口不知
Tany 社番人二人を撮影す、(立像) 右番人は
Subon 社の人なり、姓名 Tuarita, Tuakon
と云ふ

	頭最大長	頭最大広	姓名
Subon	181	144	79.55 Tuakon
"	183	152	83.07 Tuakon
Pepo	176	148	84.0 Temphat
"	196	154	78.5 Kéú

午前一時の出品





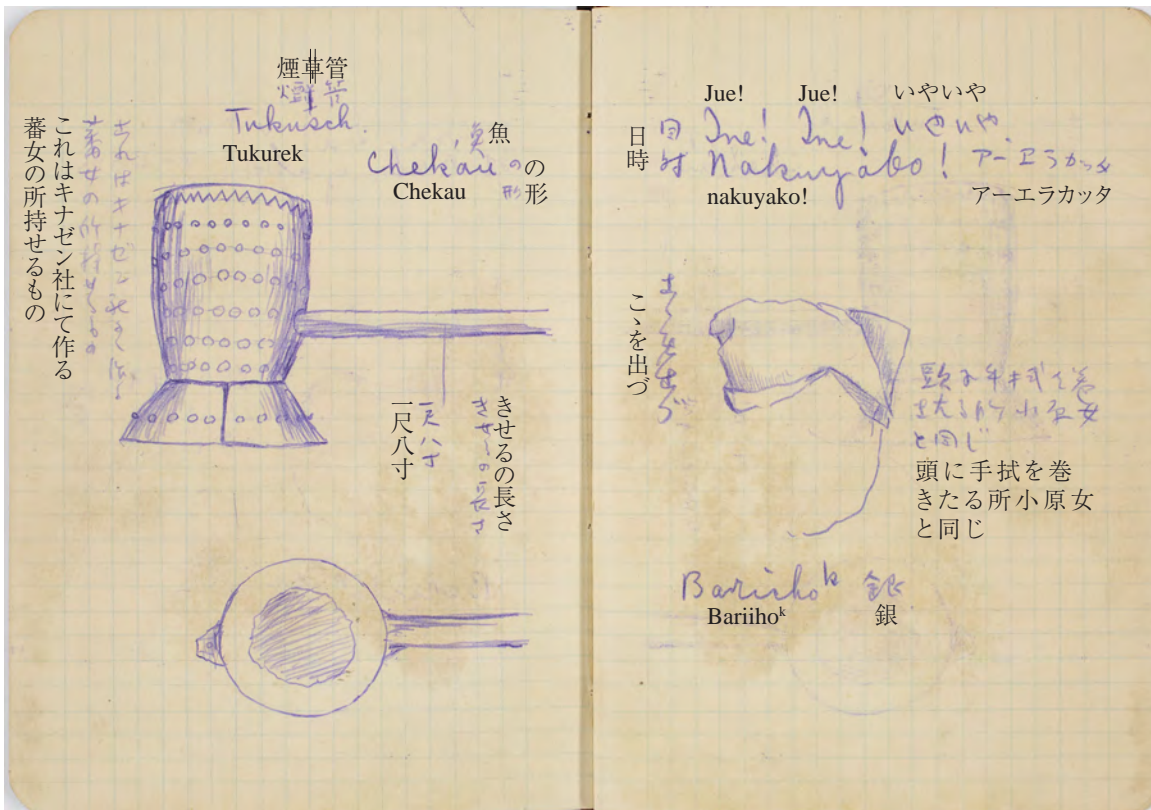
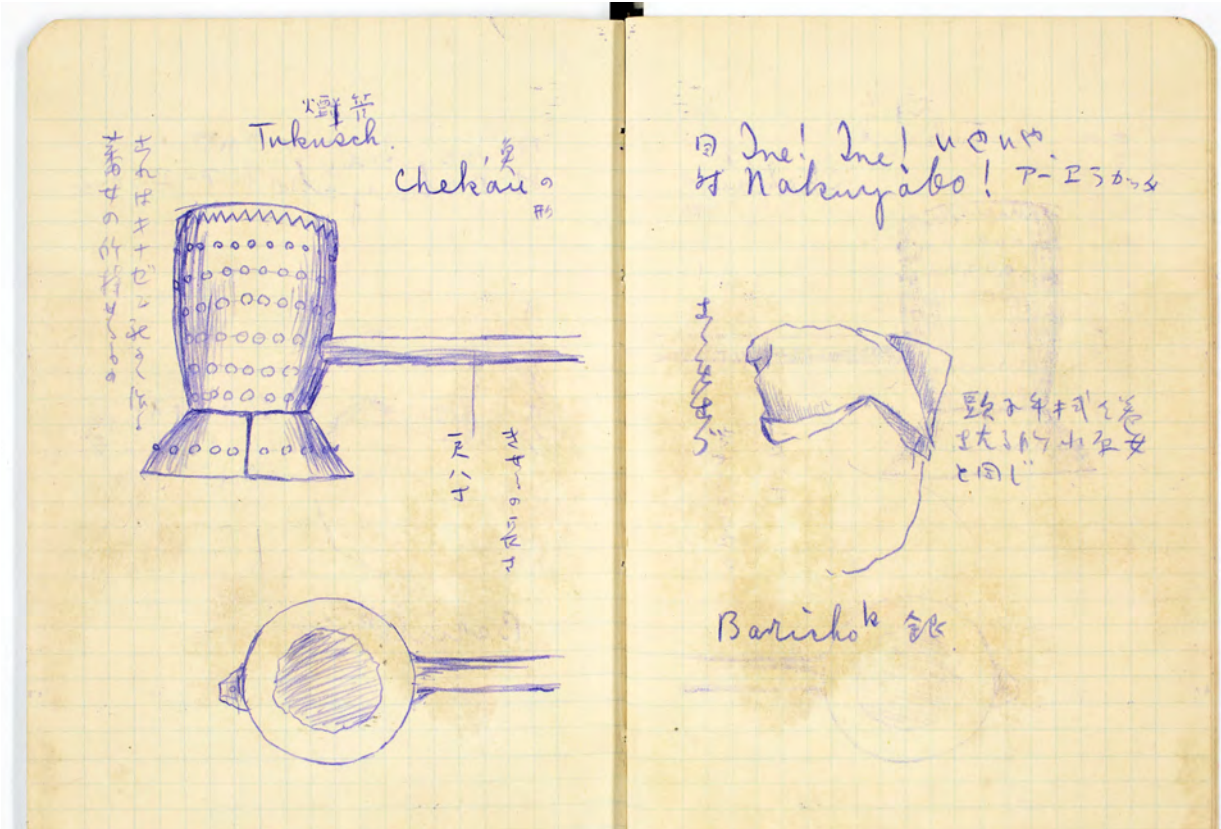
Subon 番の風俗を見るに一人の若き男は頭に草を以てまき、其他の衣服は半体衣にて(紺木綿)腰巻をなせり。又一方の歳とりたる男は卑南番に見るが如き皮服を着し。頭は紺木綿もて巻きぬ。

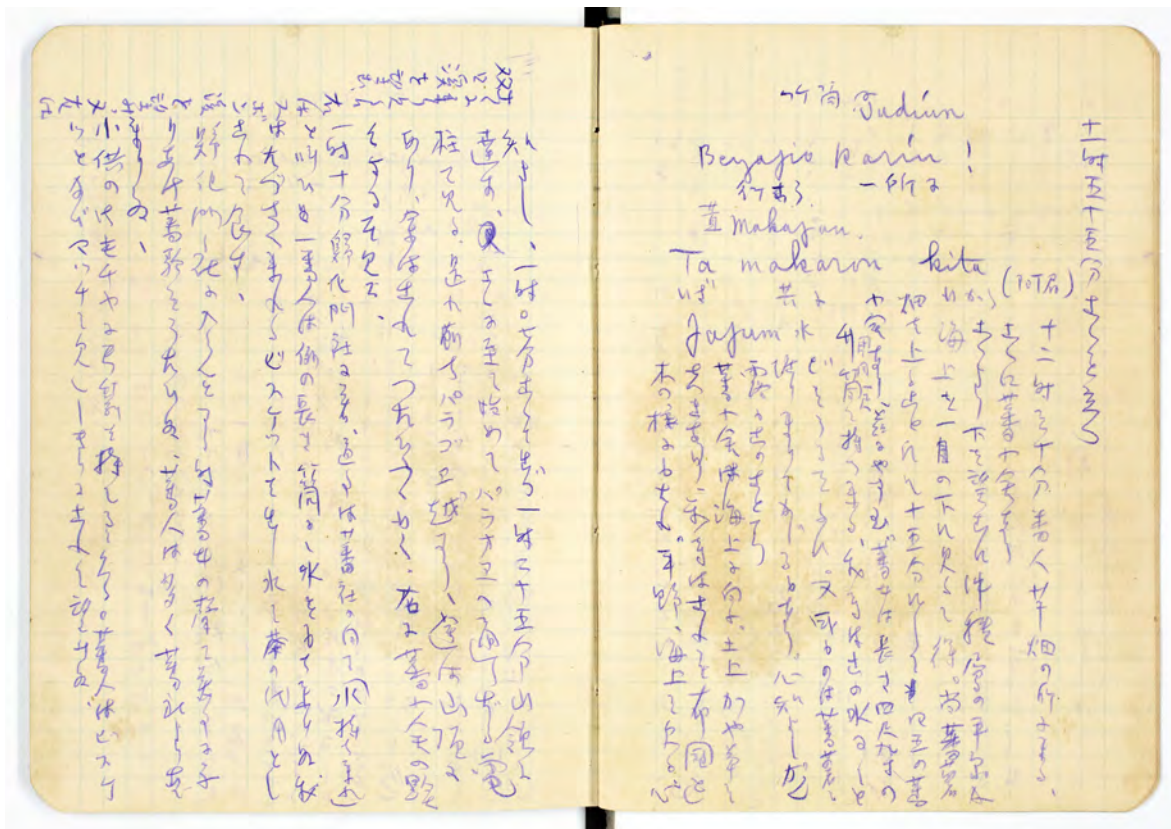


午前十時三十五分こゝを出づ、余等の一行に蕃女三人これに加はる。



十一時十八分
Dumnun に来る、こゝに息ぶ



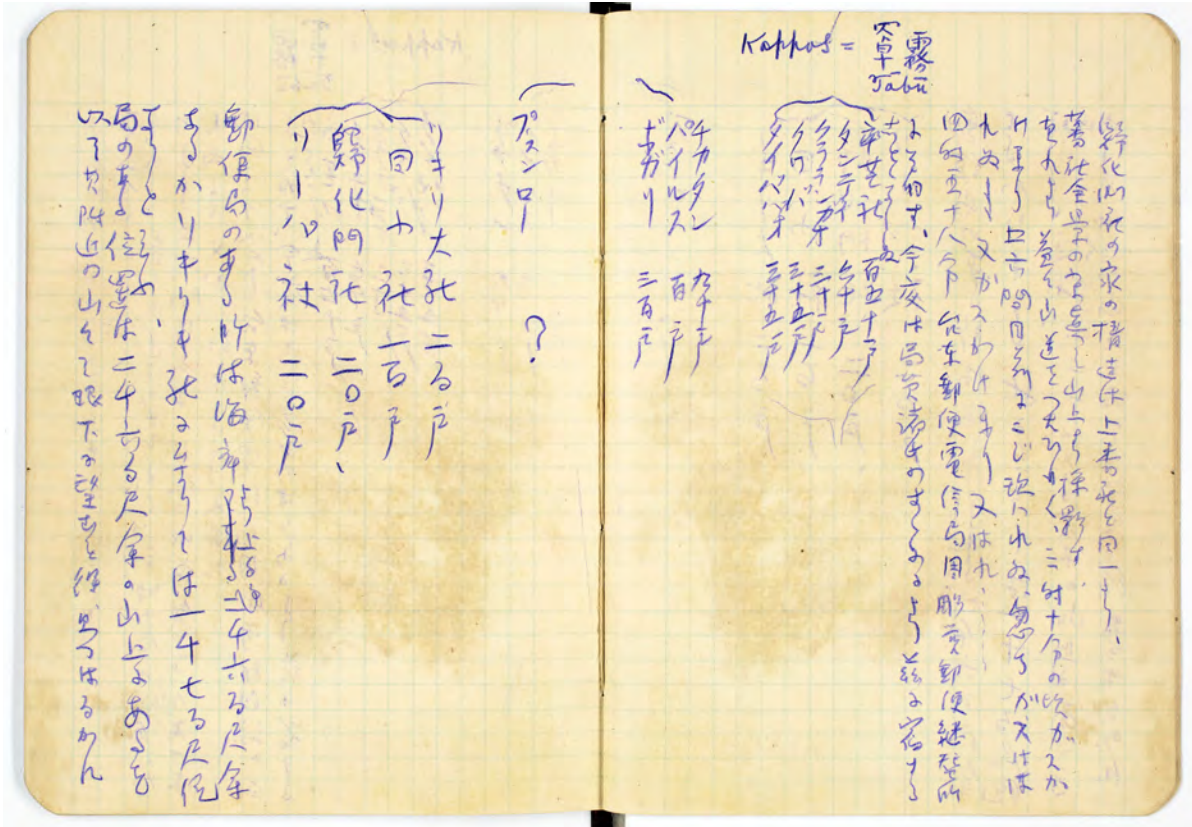


十一時五十五分こ、を立つ

竹筒 Judium
 Beyajio karin! 行こう 一所に
 萱 mahajau
 Ta makaron kita (阿眉) 共に行かう
 いざ
 Jajum 水

十二時三十分蕃人芋畑の所に来る、こ、に蕃小舎あり
 こ、より下を望むに沖積層の平原及海上を一目の下に見るを得。尚蕃薯畑を上ること凡そ十五分にして四、五の蕃小舎あり、茲にやすむ。蕃女は長さ四尺九寸の周圍一尺竹筒を持ち来る、我等はこの水にてをどをうるをふす。又或ものは蕃薯を掘り来りてかじるもあり。心知よし。かん露もこのことなり
 蕃小舎は海上に向ふ、土上かや草をしきあり、我等はこれを布団とし木の柱にもたれ。平野、海上を見る、心

知よし、一時〇七分こ、を出づ、一時二十五分山嶺に達す、某こ、に至て始めてパラオエへ通りたる電柱を見る、是れ則ちパラゴエ越なり、途は山頂にあり、余はこれをつたひつ、行く、右に蕃小舎の点々するを見る、
 一時十分帰化門社に着、通事は蕃社に向て(水持ち来れ)と叫ひぬ、一番人は例の長き竹筒にて水を持ち来りぬ、我はたづさへ来れるビスケットを出し水を茶の代用としてこれを食す、
 帰化門社に入らんとする時、蕃女の声を送るにふりあげ蕃歌をうたいぬ、蕃人は多く蕃社より出で来りぬ、
 小供のおモチヤに弓箭を持てるを見る。蕃人はビスケットと及びマツチを見てしきりにこれを望みぬ、
 「こ、に來り見るに右はスポン溪を望み、又左は／＼(上座) 双口溪を望む、」



Kappas = 霧 Tabu

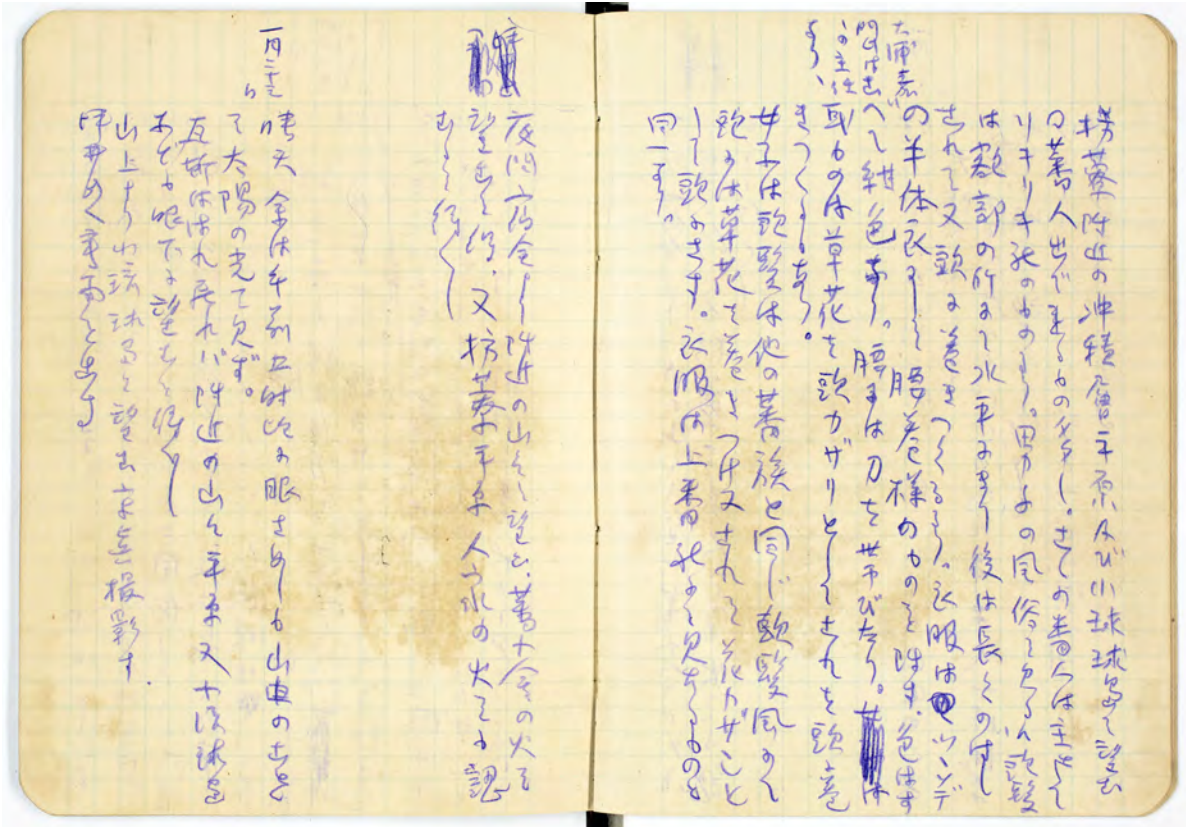
婦化門社の家の構造は上番社と同一なり、
 蕃社全景の写真を山上より採影す。
 其れより益々山道をつたひ行く、三時十分の頃ガスか
 け来り五、六間目前にニジ現ハれぬ、忽ちガスはは
 れぬ：又ガスかけ来り又ははれ……
 四時五十八分台東郵便電信局周彫管郵便継替所
 に着す、今夜は局員諸氏のすゝめにより茲に宿する
 こと、なりぬ

- 率芒社 百五十戸
- タンテイ 六十戸
- クラランガオ 三十戸
- クワバ 三十五戸
- タイバハオ 三十五戸
- チカタン 九十戸
- パイルス 百戸
- ボガリ 三百戸

プスンロー ?

- リキリ大社 二百戸
- 同小社 一百戸
- 婦化門社 二〇戸
- リーパ社 二〇戸

郵便局のある所は海岸を基より上る事二千六百尺余
 なるか、リキリ社に至りては一千七百尺位
 なりと云ふ、
 局のある位置は二千六百尺余の山上にあるを
 以て其附近の山々を眼下に望むを得、且つはるかに



枋寮附近の沖積層平原及び小琉球島を望む
 の蕃人出で来るもの多し。この蕃人は主として
 リキリキ社のものなり。男子の風俗を見るに頭髮
 は額部の所にて水平にきり後ろは長くのばし
 これを又頭に巻きつけるなり。衣服はヤトツ、ソデ
 の半体衣にして腰巻様のものを附す。色はす
 べて紺色なり。腰には刀を帯びたり。女子は
 或ものは草花を頭カザリとしてこれを頭に巻
 きつけるもあり。
 「大浦嘉／門氏はこゝの主任／なり、」
 女子は頭髮は他の蕃族と同じ頭髮風にて
 頭には草花を巻きつけ又これを花カサシと
 して頭にさす。衣服は上番社にて見たるものと
 同一なり。

夜間宿舎より附近の山々を望む、蕃小舎の火を
 望むを得、又枋寮平原人家の火をも認
 むるを得へし

一月二十三日晴天余は午前五時頃に眼さめしも山上のこと、
 て太陽の光を見ず。
 瓦斯ははれ居れば附近の山々平原又小琉球島
 なども眼下に望むを得べし
 山上より小琉球島を望む写真撮影す。
 坪井氏へ書面を出す

枋寮附近の沖積層平原及び小琉球島を望む

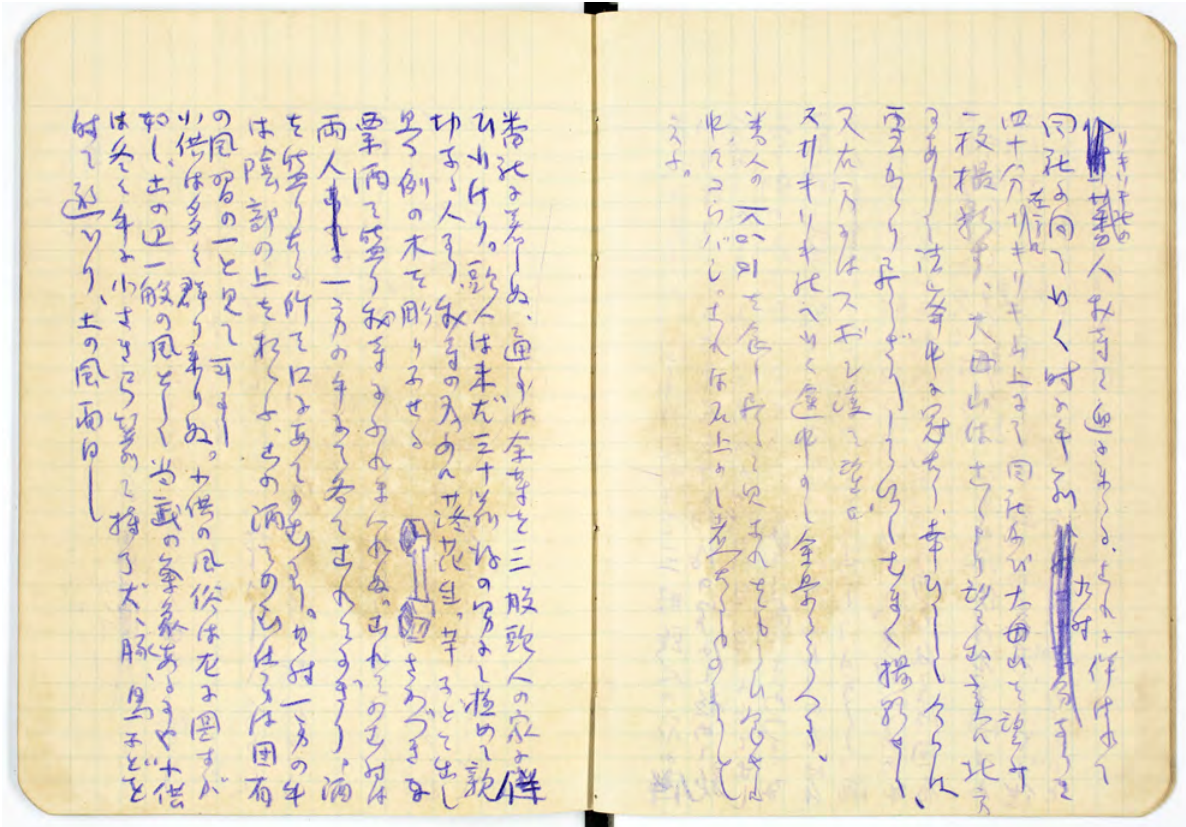
○蕃人出で来るもの多し。この蕃人は主として
 リキリキ社のものなり。男子の風俗を見るに頭髮
 は額部の所にて水平にきり後ろは長くのばし
 これを又頭に巻きつけるなり。衣服はヤトツ、ソデ
 の半体衣にして腰巻様のものを附す。色はす
 べて紺色なり。腰には刀を帯びたり。女子は
 或ものは草花を頭カザリとしてこれを頭に巻
 きつけるもあり。

「大浦嘉／門氏はこゝの主任／なり、」
 女子は頭髮は他の蕃族と同じ頭髮風にて
 頭には草花を巻きつけ又これを花カサシと
 して頭にさす。衣服は上番社にて見たるものと
 同一なり。


夜間宿舎より附近の山々を望む、蕃小舎の火を
 望むを得、又枋寮平原人家の火をも認
 むるを得へし

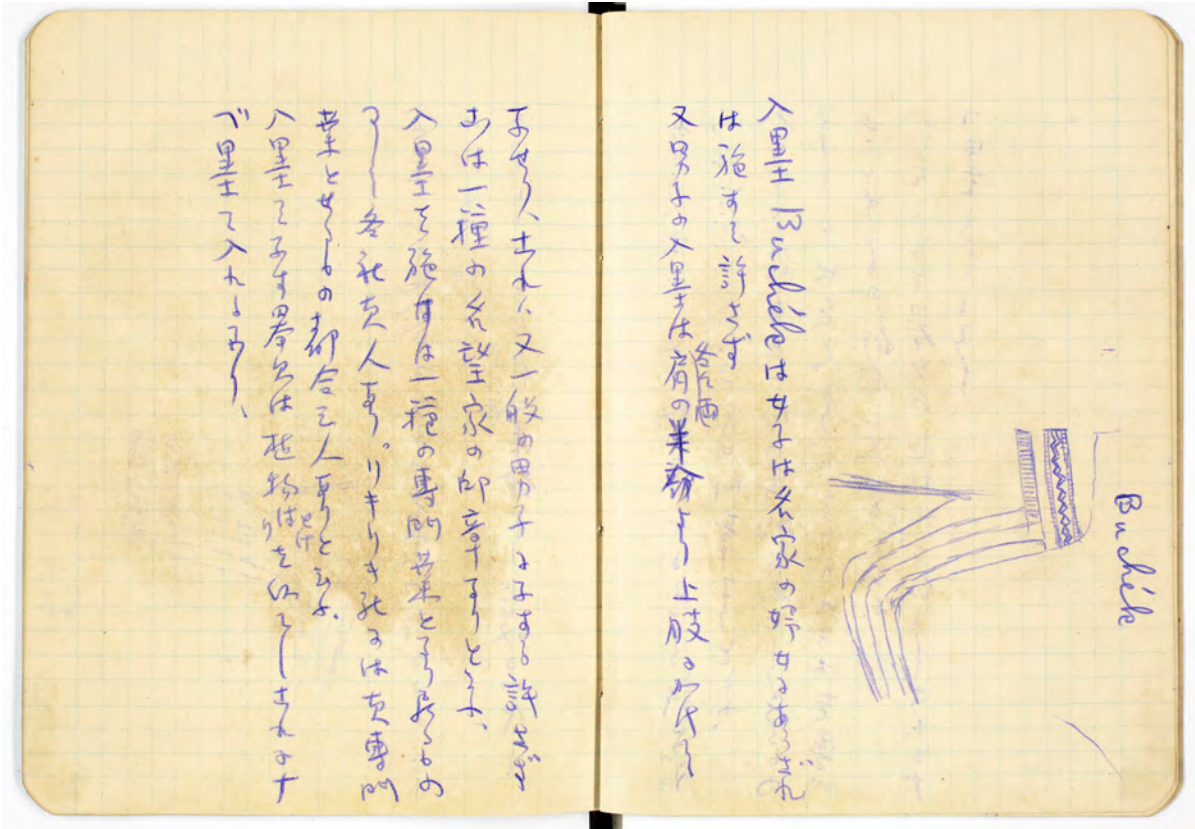
「坪井氏へ書面」

一月二十三日晴天余は午前五時頃に眼さめしも山上のこと、
 て太陽の光を見ず。
 瓦斯ははれ居れば附近の山々平原又小琉球島
 なども眼下に望むを得べし
 山上より小琉球島を望む写真撮影す。
 坪井氏へ書面を出す



八時リキキ社の蕃人我等を迎に来らる。これに伴はれて
 同社に向て行く、時に午前八時三十五分九時なりき
 四十分左方にリキキ山上にて同社及び大母山を望み
 一枚撮影す、大母山はこ、より望む、実に北方
 にありて諸峯中に冠たり、幸ひにして今日は
 雲か、り居らざりしを以てむま^⑤く撮影せり、
 又右方にはスボン溪を望む
 又リキキ社へ行く途中にて全景をうつす、
 蕃人の^(番)スポンを食し居るを見、これをもらひ食せしに
 中々コウバシ。これは石上にて煮たるものなりと
 云ふ。

番社に着しぬ、通事は余等を三股頭人の家に伴
 ひ行けり。頭人は未だ三十前後の男にて極めて親
 切なる人なり、我等の為に落花生。芋などを出し
 且つ例の木を彫りなせる  さかづきに
 粟酒を盛り我等にふれま^(振舞)ハれぬ。これをのむ時は
 兩人^①此れ^②一方の手にて各々これをにぎり。酒
 を盛りたる所を口^(覆)にあてのむなり。其時一方の手
 は陰部の上をお^(覆)ふ、この酒をのむ仕方は固有
 の風習の一と見て可なり、
 小供は多々群り来りぬ。小供の風俗は左に図すが
 如し。この辺一般の風として尚武の氣象あるにや、小供
 は各々手に小さき弓箭を持ち犬、豚、鳥などを
 射て遊べり、この風面白し



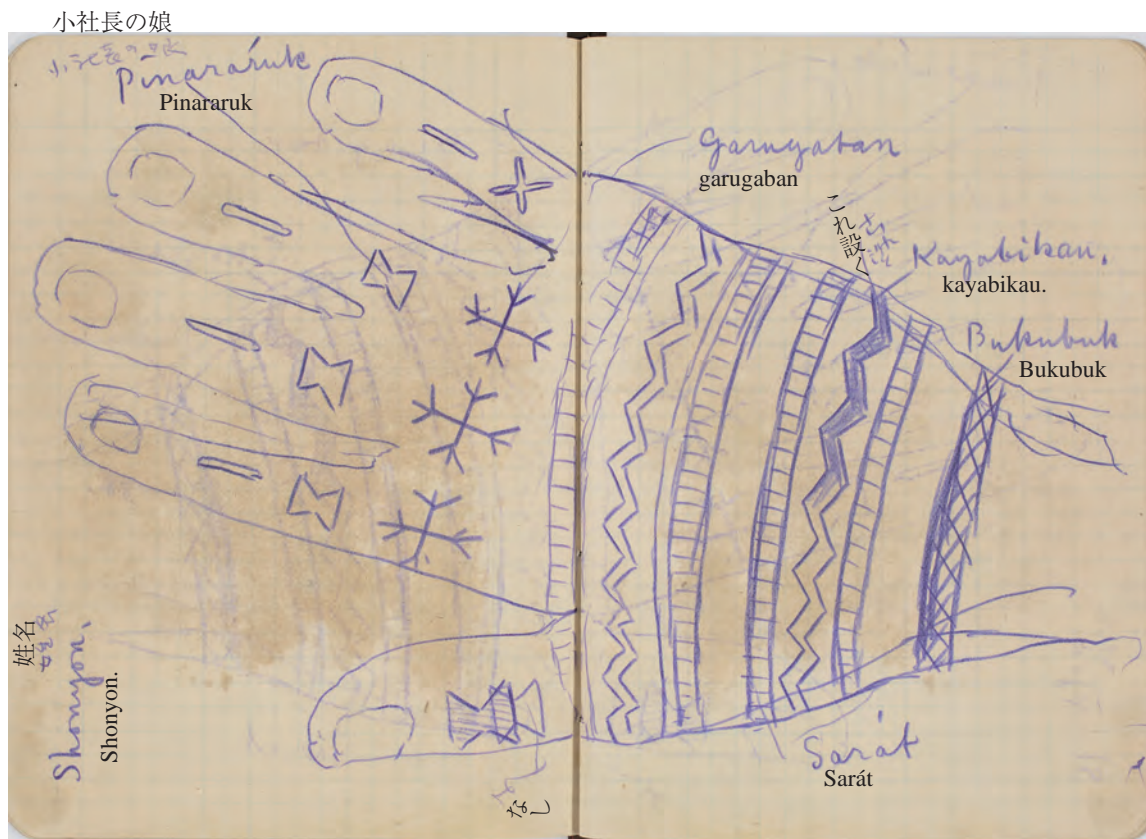
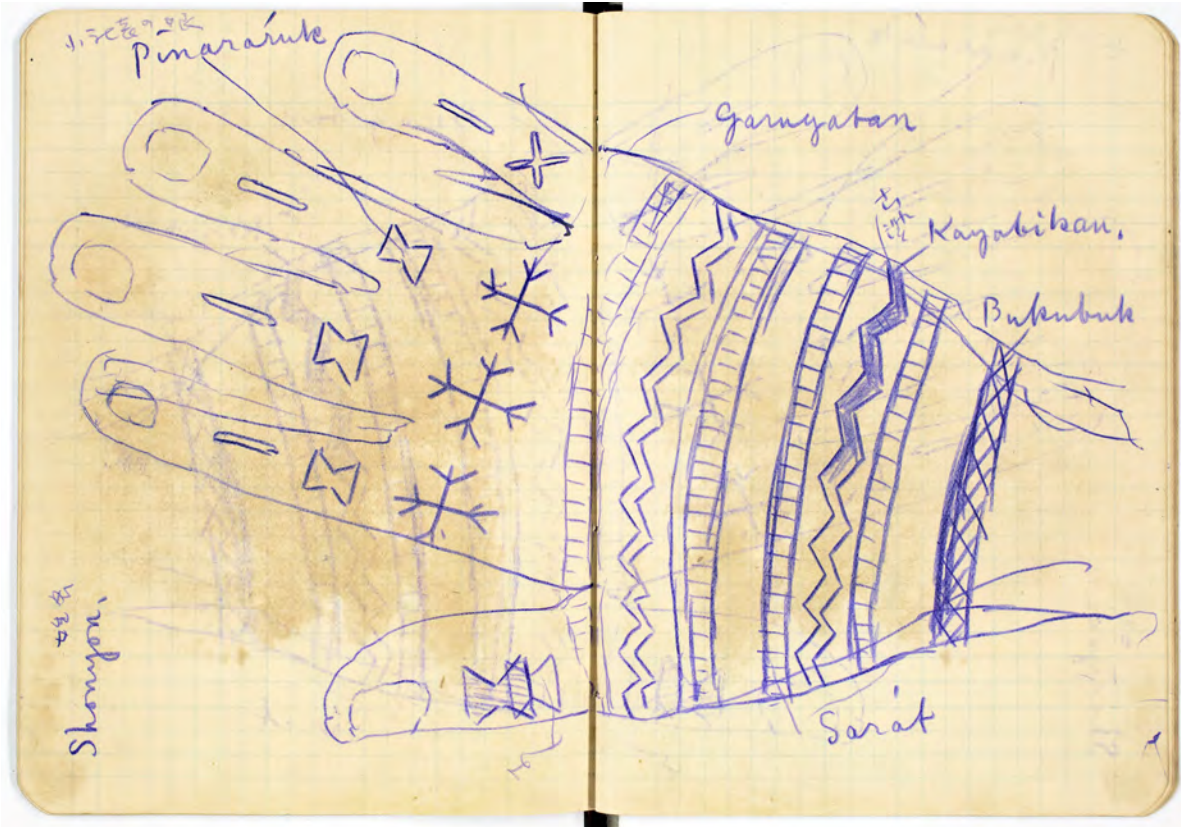
入墨 Buchide は女子は名家の婦女にあらざれば施すし許さず
 又男子の入墨は各々両肩の半部分より上肢にかけて

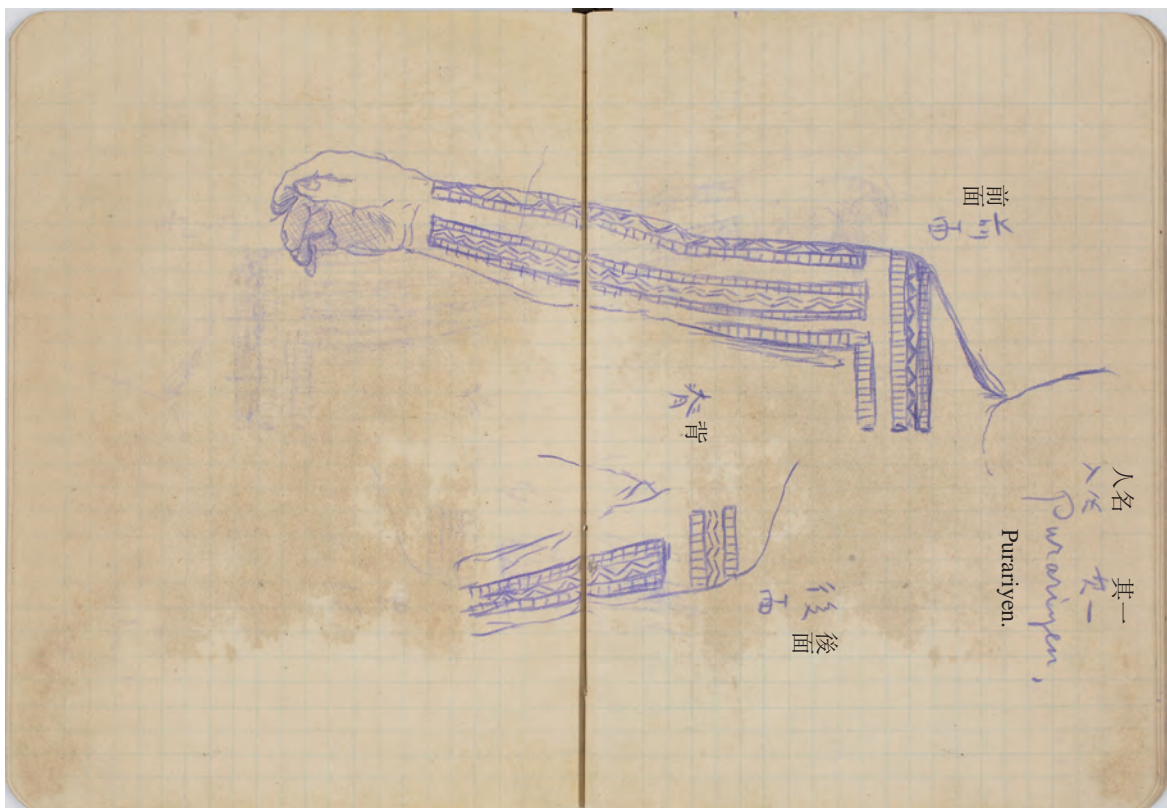
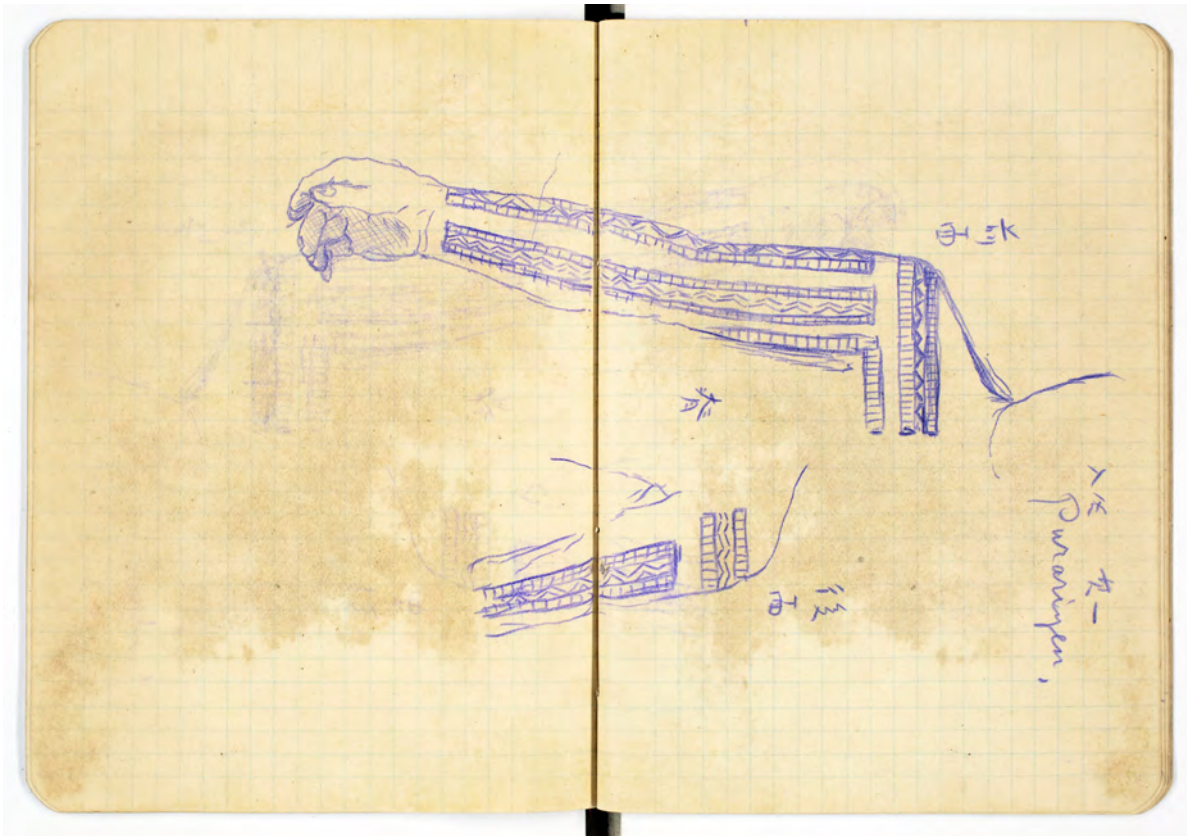
あせり、これハ又一般の男子になる許さず
 こは一種の名望家の印章なりと云ふ。
 入墨を施すは一種の専門業となり居るもの
 にして各社其人あり。リキリキ社には其専門
 業とせるもの都合三人ありと云ふ。
 入墨をなす器具は植物はりを以てしこれにナ
 べ墨を入れるなり、



入墨 Buchek は女子は名家の婦女にあらざれば施すを許さず
 又男子の入墨は各々両肩の半部分より上肢にかけて

なせり、これハ又一般の男子になる許さず
 こは一種の名望家の印章なりと云ふ。
 入墨を施すは一種の専門業となり居るもの
 にして各社其人あり。リキリキ社には其専門
 業とせるもの都合三人ありと云ふ。
 入墨をなす器具は植物はりを以てしこれにナ
 べ墨を入れるなり、







内文旧社（屏東県獅子郷）で調査を行っている様子（2023年12月7日撮影）



日本と台湾の合同で台湾フィールドノートを解読している様子（2024年12月11日撮影）

